露光量違いの為重複撮影



久庵　さうぢや、由兵衛めがかんづいた樣子。

源兵　はて大事ない、色紙の事はしらばッくれて覺えないと言ひぬく、又小三が身請けも頭巾を預ける程の仕宜、三日の内には金は出來ぬ。

伴五　然らば半時も早く彼の色紙を。

源兵　さあ待つてはをられぬ、これから直ぐにこなたも同道で色紙のせいらく、久庵は後に殘つてどぶ六めにふけつて來いと、ナア。

久庵　それも合點。

源兵　伴五郎樣はわしと一緒に。

伴五　いや、ま一度ちよつと小三に。

源兵　ハテまあござれといふに。

ト唄になり皆々はひる。知らせにて此の道具ぶん廻す。

大七裏かゞりの場。　本舞臺向う一面の板塀、よき所へ切戸口、屋根付きの枝折門、すべて大七裏かゞりの體。時の鐘、合方にて道具納まる。と枝折の内にて、

小梅　もうそれには及びませぬ、よしにして下しやんせ。

（言ひながら出る　後より男ぶら提灯を提げて出で、

男　もう日が暮れました、是非土手から吾妻橋まで送りませう。

小梅　忙しいのに大事ごさんせぬわいなあ。

男　イヱ〳〵、由兵衛様に言譯けが濟みませぬ。

小梅　そんならお前送つて下さんすなら、とてもの御苦勞ついで、吾妻橋を渡つてこの文を。（ト男へ渡す。）

男　弟淺次郎殿へ、姉小梅より。

小梅　サアわしが弟が藏前に奉公してゐまする、そこへ其の文を屆けて下さんせ、委しい樣子は道道話しませう。どうぞ行つて下しやんせ。

ト流行唄になり、小梅男を連れて花道へはひる。あとバタ〳〵になり十平次久庵出て來り、

十平　久庵、源兵衛親方の方へか。

久庵　さうぢや、その繩を。

十平　おい解いてくれや。

ト後ろを向く。縄を解くところへ金五郎出で、

金五　座敷をふけつた乞食め、働きやがるな。

十平　やあ、わりや金五郎か。

久庵　邪魔な二才め。

十平　やつてしまへ。

ト両人金五郎へ懸るをちよつと立廻つて、見得より跳への鳴物になり、いろ〳〵立廻りあつてトド金五郎十平次を追ひかけて花道へはひる。久庵此前より立廻りの内うろ〳〵して上手の松の木へ登り、窺ひ居て此の時降りようとする。又足音するゆゑ降り兼ねるところへ、内より小三小糸お筆出て、

小糸　小三さん、どのやうに尋ねても金五郎さんは、ゐやしやんせぬわいなあ。

お筆

小三　さうして悪者共も見えず、こりや由兵衛に言はねばならぬ。

ト此の内小糸上手の立木へ目をつけ久庵を見て、

小糸　あれ〳〵、松の木に誰やら居るぞえ。

ト これにて久庵袖にて顔を隠す。

小糸　ほんに、あれは慥かに。

お筆



小糸　それ〳〵、猿であらうわいなあ。（ト松の木の上にて。）

久庵　キヤツキヤツ〳〵。（ト猿の眞似をする、三人思入あつて、）

小三　いや猿ぢやごさんせぬ。ありや烏ぢや〳〵、なあ、お筆さん小糸さん。

小糸　おゝ、ほんにありや烏ぢやさうなわいな。

久庵　カア〳〵カア。（ト烏の眞似をする。）

お筆　いや烏ぢやごさんせぬ、鳶ぢやわいな。

久庵　ピイヒヨロ〳〵〳〵。（ト又鳶の眞似をする。）

小三　いえ〳〵、ありや鳶ぢやない、見やしやんせ、頭の圓い所は鮹ぢやわいなあ。

小糸　ほんに、鮹ぢやわいなあ。

小三　ありや鮹ぢや〳〵、河岸で見せる鮹男ぢやわいな。

ト久庵見世物の眞似をしようとしてゐる。

三人　よう〳〵、鮹様〳〵〳〵。

小糸　鮹男も慥に鳴くであらうわいなあ。

久庵鮹に困り詮方なしに、

梅の由兵衛

久庵　たこ〳〵。（ト皆々笑ふを三人嘲く。）
小糸　そんなら由兵衛さんに、さうぢや。（ト奥へはひる。久庵びつくりして落ちる。）
お筆　
小三　やあ、お前は久庵さんか。
久庵　小三坊か。

（トかゝるを兩人立廻つてゐるところへ、由兵衛提灯を提げつか〳〵と出て、久庵を突廻す。）

久庵　やあ由兵衛、われを。（トかゝるをちよつと立廻つて、下手の井戸へ打込むを木の頭にて、）
小三　それでは。
由兵　櫂はずござりませ。

（ト小三の手を取つて由兵衛花道へはひるを、よろしく、）

ひやうし　幕

## 二幕目

米屋の場

同返し塀外の場

役名　丁稚長吉、信樂勘十郎、角力長五郎、米屋佐兵衛、女房小梅、手代喜介、同權七、娘お君、下女お竹等。

藏前米屋の場。本舞臺三間の間常足二重、向う眞中暖簾口、上手上下戸棚、しも手茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、下手帳場格子、帳簿、いつものところに門口、此外大格子、すべて藏前米屋の體、愛に權七帳面を控へ居る。喜助十露盤を置いてゐる。平舞臺に長五郎田舍角力の前髪鬘にて俵を差上げてゐる。稽古唄角兵衛にて幕あく。

喜助　八百七十目。
權七　八百七十目。
喜助　二百三十目。
權七　二百三十目。
長五　こりや〳〵どつこい。（ト俵を差上げ投出す。）よいやさ。（ト相撲に勝つた見得をする。）
喜助　これは情ない、長五郎さんの力持で大事の帳合ひをあへられてしまつた。
權七　なんぼ稽古をしても、雷電や谷風のやうな角力には、生れかはつてもなれまい。

兩人　ハ、、、、、（ト笑ふ。長五郎これを聞きて、）

長五　ヤイ〳〵、權七喜助そりやなにを言ふのぢや、おれが好んで角力取にならうと思つてゐる此の長五郎、名乘はのべ紙と付いてある、此の秋の相撲から番附へ入れて貰つて土俵へ上つて見せる、夫故凝つて稽古をしてゐるを、何んでそんな事を言うて笑ふのだ。

權七　いや笑ふのではないが、所詮かなはぬ事ぢや、よしにしたらよからう、なう喜助。

喜助　ヲ、さうぢや、長五郎さん、お前江戸の角力へ出ようより、ちつと遠いが小人島の關取にならつしやれ。

長五　うぬが〳〵、主同然のおれを澤山さうに吐かすが、在所にゐた時分から下地のある長五郎、追付け關取になつて見せう、喜助でも權七でも相手は嫌はぬ、一番揉んでやらう、來い〳〵。

喜助　こりや面白い、米屋に奉公するものが、まんざら無手ではない、權七行け〳〵。

權七　一番揉んで見ようかい。

長五　大地へ埋めでやらう、用心して、さあ來い〳〵。

（ト長五郎しこを踏む。權七を相手に角力をとる。喜助行事のやうになり、長五郎權七兩人いろ〳〵あつて、トゞ權七長五郎を見事に投げる。喜助權七わつと笑ふ、長五郎むつとして、）

長五　なんぢや〳〵、今のは怪我の張合、誠におれや此の間からちつと色事に凝つてゐる故、それで今のやうに、はて爭はれぬものぢやなあ。

兩人　それがほんの負惜しみぢや、ハ、、、、。（ト兩人笑ふ。此聲にて奥より主人佐兵衛親仁のこしらへにて出て。）

佐兵　なんぢや店先がさわつくが、喜助權七、言付けて置いた勘定はどうぢや、よいか。

兩人　大概片附いてしまひました。

佐兵　そりや早かつた。いや長五郎、慥か娘が奥で尋ねてゐたぞや。

長五　それは大方。（ト思入あつて主人を見て）ハテなんの用ぢや知らぬ。

（ト俄かに髪をかき上げる。）

權七　これさ長五郎さん、角力取より色取の方がよからう。

喜助　それ〳〵減多無性に此中から。

長五　はて思ひ内にあれば面皰顔に顯はれるぢやなあ。

佐五　なんのことぢや。

（ト矢張稽古唄になり、花道より前幕の信樂勘十郎中間を連れ出て來る。後より丁稚長吉、若衆萱丁）

稚のなりにて出て來り花道にて、

長吉　勘十郎樣には思ひがけないところで、お目にかゝりましてござります。

勘十　さればく、長吉其方もこりや淺草へでも參詣したか。

長吉　イヱく、下谷の方から廣德寺前の花主場廻りでござりまする。

勘十　身共は又觀音へ參詣の次手、伯父者人をお見舞ひ申さうと。

長吉　それはようお出でござりまする。

勘十　サア同道いたさう、長吉來やれく。

（ト兩人門口へ來り、長吉門口を開ける。佐兵衞見て、）

佐兵　おゝ長吉、今戻つたか。

長吉　はい左樣でござります、勘十郎樣がお出でなされました。

佐兵　なんぢや、甥の勘十郎が參つた。

勘十　左樣にござりまする。（ト此の内勘十郎内へはひる。）

佐兵　やれようこそく、さゝこれへく。

勘十　然らば御免下されませ。（ト二重へ住ふ。）

長五　勘十郎樣、ようお出なされました。

勘十　長五郎變る事もないか。

長五　まあくあれへ。（ト喜助樽七茶煙草盆を持ち行く。）

佐兵　勘十郎はおれが甥、あの長五郎は死んだ婆めが甥、在所にゐたれど去年から此方の内へ來てゐるも、角力になりたき望み、今世話するも婆が遺言、どうぞ關取に。

長五　いやもう親仁樣のきついお世話になります、勘十郎樣よろしうお禮を。

勘十　はてつながる緣なれば、假令なにゝなつても隨分出精が肝要ぢや。

佐兵　おれが商賣の米屋、その内に長吉といふ丁稚と長五郎といふ角力、曲輪日記の淨瑠璃のやうなとの噂ぢや、ハヽヽヽ。

喜助　ほんに長吉、花主先の米はどうぢや。

長吉　皆後からいうてやらうと。

長五　長吉、わが身をお君さんが尋ねてゐたぞや。

長吉　なに、それはお前樣の事でござりませう。

長五　へゝ、こいつはちつとちんくぢやな。（トこなし。）

佐兵　時に勘十郎、なんと思うて參られた。

勘十　今日は觀音へ參詣ながら伯父者人、（ト懐中より紙包の金を出し）金子百兩先日念に入用あつて借用申しましたなれども、今日御返濟申上げまする、御受取下さりませう。

佐兵　はて伯父甥の仲義理がたい、さう無うても大事ないわさ。

勘十　イヤ〳〵、又御無心申上げまする儀もござれば、先お受取り下さりませう。

佐兵　そんなら慥かに受取りました。此帳面簞笥の抽斗へ入れて置きませう。

ト右の金を帳簞笥の抽斗へ入れ、錠前をおろし、長五郎これを見てゐる。勘十郎こなしあつて、

勘十　百兩の金御返濟申した上は、拙者は最早お暇申さう。

佐兵　それは餘り早々、せめて奥へ御座つて酒一つ。

喜助　權七　左樣なら奥へ勘十郎樣。

勘十　然らば。如何やうとも、さあ長五郎も一緒に來やれ。

ト唄になり、勘十郎佐兵衛先に皆々奥へはひる、引きゝがへてお竹下女のなりにて出て、

お竹　長吉どん〳〵。（ト呼びながら出てあたりを見て、）今聲のしたは慥かに長吉どん、何處へ行かしやんしたやら。

お君　お竹〳〵。（ト呼びながらお君世話娘の振袖なりにて出て、）こゝにゐやるか、最前より尋ねてゐたわいなあ。

お竹　お君さん、なんで御用でござりまするか。

お君　お竹や、昨夜頼んだ物を、かの人に渡してたもつたかや。

お竹　まあ長五郎さんには渡しましたが、肝心の長吉殿には昨晩から間が悪うてまだ渡しませぬ、けさから花主廻りで留守でござりましたが、今聲がいたしましたから、渡さうと思うてそれで尋ねてをりますわいなあ。

お君　エゝモ長五郎さんは大事ないが、早く長吉に渡してたもいなう。

お竹　ハイ〳〵合點でござります、そんなら奥で間を見合はせて渡しませう。

ト言ひながら奥へはひる。お君こなしあつて、

お君　どうぞ私が思ふやうに、南無觀音樣〳〵〳〵。

ト手を合はせ拜むこなし。此の内奥より出て來り、

長五　お君さん。（ト恥かしきこなしにて言ふ。）

お君　エゝ。（トびつくりこなしあつて）長五郎さんかえ。

長五　アイ。

お君　ようお出なさんしたな。（トこなし。）

長五　お出ぢやがどうだえ。

お君　長五郎さん、昨夜竹に渡したものが屆いたかえ。

長五　そりやあの、長たらしい此の文かえ。（ト懷中より出して見せる。）

お君　あいなあ。（ト恥かしさうに顔を隠す。）

長五　なんの、恥かしい事があるものか。

お君　それでもお前、あのやうな文をお前讀んでかえ。（ト長五郎無筆のこなしにて、）

長五　讀めまいか、おりや在所にゐる折寺屋へ五年も行つた者ぢや。

お君　さあ讀んで下さんしたら、誰にもいうてお呉れなえ。

長五　誰にいふもので。

お君　そんならあの通りぢやぞえ。

長五　まあ〳〵の通りぢや、あの通りはあの通りぢやが、なんとあの通りを口で一遍で言うて聞かさんせ。

お君　えゝもあのやうな事を恥かしい、口でどうまあ言はれるものぞいなあ。

長五　なんの言はれぬ事があるもので、どうでそりや長吉のやうにはあるまいが。

お君　又そんな事を長五郎さん、見やしやんせいなあ。

ト疊へ指で書いて見せる。長五郎讀めぬ故いろ〳〵とこなしある。

お君　ぢやわいなあ。

長五　ぢやわいなあで解るものかいなあ。

お君　えゝ、どう讀んでぢやわいなあ。（ト又疊へ書いて、）さうしてかうぢやわいなあ。

長五　さあ、それでも。

お君　これいなあ。（ト又書かうとするを、）

長五　エ、もう書くまい〳〵、女子のものを書く程面倒なものはない、よう喋る口を持つてゐて、滅多無性に書きたがる女ぢやなあ。

お君　それでも人が聞くわいな。

長五　聞いたらどうぢやえ、誰がなんと言うてか。

お君　いゝえ。

長五　そんならぐづ〳〵した筆先より、一挺とぼすが近道ぢや、さあちよつと。

お君　えゝもう、知らぬわいなあ。

長五　得心ぢやないか。（ト傍へ寄る。）

お君　それでもあれ、誰やらが。

ト擦り抜けようとするを捉へて、彼方此方と二三度追廻す。此の時内より權七出て來る。長五郎夢中にて權七を捉へる。

權七　こりや何をするのぢや。

長五　えゝ（ト顏を見て、）

長五　やあ、權七か。

權七　これ長五郎さん、勘十郎樣が呼んでぢや、さあどさりませ。

長五　いや、おりやこゝでお君さんと、地取りをしかけてゐるのぢや。

權七　まあ、どさりませ。（ト無理に長五郎を奥へ連れてはひる。お君思入あつて、）

お君　なんぼこちの爲めぢやとて、あの憎らしい長五郎づらに、えゝも、どうしようぞいなあ。

ト ちつと思入、なまめきやうの合方になりて、奥より長吉芝居の番附を見ながら出て來る。お君長吉を見て、



お君　やあ長吉か。（ト傍へ寄るのを、素知らぬ振にて、）

長吉　ハイお君樣。（ト矢張り番附を見てゐる。）

お君　そりやなんぢやゝ。

長吉　奥の硯箱にどさりました故、見てをりまするわいな。

お君　わしにも見せやいなう。（ト番附を取り見て、）ほんに此の狂言の時、父さんやわがみと一緒に見に行つたなう。

長吉　ハイ、見に行つたさうでどさりまする。

お君　此狂言は面白かつたぢやないかいなう。

長吉　お前樣は面白うどさりませうが、私は氣が揉めてどさりまする。

お君　さあ、其方の氣の揉める事故に。

長吉　お君さん、お前をお頼み申しました事、聞えてどさりまするか。

お君　そりや一昨日のことであらうがな。

長吉　サア、それぢやによつて私はな。

ト言ふ内、奥よりお竹出て思入あって、

お竹　おゝ嬉しや、長吉どんこゝにかや、お君様も一緒に。

お君　よい所へお竹、昨夜頼んだ文はどうしやつた。

お竹　矢張爰に。（ト懐中より出す。お君取って、）

お君　これ長吉、どうも口では言はれぬ此文、とつくり讀んでたも。

ト長吉の前へ置く。長吉取って、

長吉　そんなら此の文。

お君　お竹おぢや。（トお竹を連れて奥へはひる。長吉こなしあって、）

長吉　口で言はれぬ此文。長様まゐる君より。（ト封を切って、）今更文とは御覽の程も恥しながら、不束な我身事を是までとやかく御申し下され候へども、人目の關に隔てられ、態と御返事いたし不申候、誠に長吉と譯あるやうに御申し被成候へども、戀に上下の隔ないとは申せども長吉は奉公人の事なり、私はさら〳〵左様の事にはこざなく候、必ず〳〵長吉事を御念にかけ下されまじく候、此上はそもじ様と二世も三世も替らぬ女夫と存候へば、そもじ様にも御心の程御替らせなきやうに頼み上もし、また〳〵首尾を見合せ御目もじの上、ちと〳〵御頼申上度事御座候へばあひたく候、目出度かしこ、長五郎様まゐる君より。

ト讀む内いろ〳〵こなしあって、又繰返し讀むことあって、

ム、、そんなら書出しの長様まゐるは長五郎の様か、偖てはお竹が粗相に長五郎へやる文を間違へて、大方わしへは切文でがなあらう、さうとは知らずこれまで互に言ひ替し、親切らしい事も皆空言か、わしを欺して殊に又姉者人の據ない無心、その事を頼んでおくに長五郎へ其様に、えゝ腹が立つ〳〵、思ひかへられたより姉者人の頼み、百兩の金が今宵中に。こりやまあ、どうせうぞ。

ト右の文を繰返し見て、いろ〳〵思入あって、

さうぢや所詮金の出來ぬ時は、姉者人に言ひ譯けなし、いひかはしたお君様と。さうぢや。

ト思入あって奥へ行からとする。勘十郎、ずつと出て、

勘十　長吉どうしやつた。

長吉　えゝ勘十郎様。

勘十　伯父者人の平强ひにて相頼まうと思つたに、長吉は逃げをつたな、ハ、、、、、いやもう甚だ酩酊、まあこれへ來やれ。

長吉　私は奥へちつと用が。

勘十　ハテ苦しうない矢張是にて。

長吉　デモ私は。

勘十　ハテマア、下にゐやれと申すに。

ト勘十郎酒に酔ひたるこなしにて、無理に長吉を引きすゑる。

勘十　それにあるは何ぢや。（ト以前の番附を取つて、）こりや芝居の番附ぢやな、こりや長吉。

ト呼べどもうつとり奥を見てゐるゆゑ、

勘十　これさ長吉。（ト大きく言ふ。これにて長吉心付き、）

長吉　ハイ。

勘十　此の芝居と申すものは、凡て世間の流行事をとり仕組み狂言にする、中にもお染久松八百屋お七、古手屋八郎兵衛又は油屋の十人切、皆根が色よりその身を果し、恥をさらし、親兄弟に難儀をかけるも、いかに若いとて芝居をつい慰みとばかり見るは無駄といふもの、勧善懲悪それぞれに理非を分つて見るはこれ萬代不易、太平の道具四書五經よりその合點のゆく近道の學問、其の身に引較べて、兎角謹むが肝要、それをうか〳〵後先の辨へなく、腹立ちまぎれ欺されての無分別に切り、サ、切狂言にはつゞまる所は悪人亡び、善人世に出る六段目の思案が大事であらうがな。



長吉　思ひまはせば此の身にも、端折りかゞみの兄弟は、たつた一人の姉者人。

勘十　梅若を尋ねて班女が物狂ひ、哀れな面白い淨瑠璃ではないか。

ト長吉にのみこませる。これにて合點の行きしこなしにて、

長吉　勘十郎様の今の御異見有難うござりまする。芝居の話に長吉もよう合點いたしましてござりまする。

勘十　合點が參つたか夫は重疊、なにを言ふやら酔ひまぎれ、必ず氣にかけやるな。

長吉　ア勿體ない貴方のお志、有難う存じまする。

勘十　これも外ならぬ伯父の家、その奉公人の長吉、奉公大事に辛抱すれば育ちと言ひ人柄と言ひ、好み合うた仲なら末々はお君が聟、いやさ向ふ獅子には矢も立たず逢うて語らば心も解けん、戀はわびしさにあり、又これからはとつくりと俳諧の話、神祇、釋經、戀の句の合點の行くやう奥にて語らん、長吉來やれ。

長吉　はゝい。

勘十　はて來やれといふに。

ト兩人思入にて唄になり奥へはひる。後合方になり以前の權七喜助長五郎三人出て來り、

喜助　長五郎、なんぼお前さんが味噌をあげても、あの娘が得心してたまるものか。

權七　まだ長吉なら不斷の樣子と言ひ、どうか知れぬがお前とは合點が行かぬ。

長五　合點が行くか行かぬか、こりや昨晩、かういふものを持たしてよこした。

ト懐中より文を出して、

長五　その時の言傳で、必ず誰れにもいうてくれぬなというてよこした。

喜助　成程こりや文ぢや〳〵。

權七　どれお見せなせえ。

長五　何を旨の垣覗きな、分りもせぬ癖にわいらが見たとて胡椒の丸呑み、讀めやせまいがな。

喜助　米屋の手代を勤めるものが、女の文ぐらゐ讀めねえでどうするものか。

長五　そんなら本當に讀めるかよ、あのお娘は大抵の者ぢやないぞよ、それに所々に笠のない虚無僧のやうな所や、終の方には釣針のやうなものが出てあるが、それでも讀めるか。

權七　はて讀めねえでどうするものか、二人して讀んでやらう。

長五　口の内でぼちや〳〵讀みはならねえぞ、聞えるやうに讀んで聞かせろよ。

喜助　どれ〳〵。（ト取りに行くを長五郎こなしあつて。）

長五　どつこい、澤山ざうに罰が當るわ。二人共肖るやうに戴いたり〳〵。

ト兩人の頭の上を撫でる事あつて、

長五　そりや讀んだり〳〵。（ト兩人へ件の文を披げて見せる。）

兩人　えゝそれでは倒ぢや。

長五　はて倒にも讀むくらゐでなけりや讀む内ぢやない。

喜助　そこもあるてな。

ト權七文を取つて見て、

權七　なんだか大層濡れてゐる文ぢやねえか。

喜助　これが大方濡文といふのであらうよ。

長五　その筈よ、昨晩から肌身を放さず、臍の上へひつたり付けて置いたもの。

權七　道理こそ、訝な臭ひがすると思つた。

喜助　何々一筆しめし、

長五　そりや笠のない虚無僧だ。
權七　こゝこれは〳〵ぢや。
長五　おゝさうぢや〳〵、なか〳〵感心々々。
權七　誠に昨日は氣の毒な事を聞きまして、癪がおこり案じ〳〵。
喜助　長五郎さん〳〵、案じて癪がおこつたとさ。
長五　ハヽア何んの事だ、おれが力持の石で一寸擦りむいた事をそれ程迄に思つてくれるか忝い。

ト長五郎悦ぶこなし。

喜助　どうぞお頼みの事よろしく都合いたしたく、
長五　なにも頼んだ覺えはないが。
權七　まあ〳〵、默つて聞いたり〳〵。
喜助　ほんにこれまで惚れた〳〵と、あたいやらしい色々に口說き候を、幸に厭ながらも長五郎づら。
權七　やあ、おつな事が書いてあるな。
長五　づらぢやない、長五郎さんぢやねえか、しつかり讀んだり〳〵。
喜助　でも長五郎づら、め、まだめと書いてある。
權七　どれ〳〵、後はおれが讀まう、厭ながらも長五郎づらめに態々打解けたやうに見せ、右の事を拵へ度くと存じ、それ故いやらしき文を遣はし〳〵、必ず〳〵御心惡しく思召下されまじく候、ヤア長五郎さん、どうやら風が惡くなつて來ましたぜ。
喜助　此の文を昨晩から臍の上に載せて居たとは。
權七　よく臍が宿替せなんだの、序に後を讀まう、根が在所育ちの馬鹿者の長五郎なれば、口先で色色騙し、そもじ樣のお望みをかなへ度思ひ〳〵。
喜助　でも酷い書き方ぢやの。
長五　大方かうであらうと思つた、もう後は讀むに及ばぬ、宛名を讀んだり〳〵。
兩人　長吉樣まゐる、君より。
長五　やあ〳〵、そんなら矢張長吉めであつたか。（トどうとなりぢつとこなし。）
喜助　道理で話が旨過ぎると思つた。
權七　根が在所育ちの馬鹿者とは。（ト兩人長五郎へ指をさし）
兩人　馬鹿者とは、ハヽヽヽヽ。

ト兩人笑ひながら奥へはひる。長五郎悔しきこなしにて右の文を取上げ見ても讀めぬ故、いろ〳〵こなしあつて、以前の金に心附き、

長五　勘十郎が持つて來た百兩を此の腹癒せに。

ト帳箪笥の抽斗の錠前を煙管にてこじあけ、金を出し中へ此文を入れかへ金を懐中に入れて、

長五　あの文で二人のやつを旨い〳〵。（ト此の時奥にて、）

佐兵　はてまあ、もそつとゆるりとして行きやれ。

ト以前の勘十郎先きに佐兵衛お君長吉附いて奥より出て來り、

勘十　いや段々と御馳走忝うござる。

長五　是は〳〵勘十郎様、お歸りでござりまするか。

長吉　あまりお粗相にござりまする。

勘十　いや又來るであらう、お君隨分無事で。

お君　もそつとお話しなされませいなア。

ト此の内佐兵衛帳箪笥を見て、

佐兵　ヤア、こりや帳箪笥の錠がこぢ離して中の金が、ヤ、、、、。

ト びつくりする。長五郎わざとびつくりする。勘十郎立歸り、

勘十　こりや減多には歸られぬわえ。

佐兵　イヤ〳〵、勘十郎は大事ない、主人持ちや、早う屋敷へ。

勘十　先程持參の金子紛失とあつては、どうも聞捨てにはなりませぬ。

長五　左様でござりまする、錠前をこぢ離し抽斗の金がないとは大それた泥棒だ、こりや面々吟味を、まあ抽斗を。（トつか〳〵と行き、抽斗を取つて來て中の文を取出し、）ヤ、何やら書いたものが入れてある、おれや恥かしながら無筆ぢや、長吉こゝへ來て讀んで聞かせい。

長吉　はい、そんならそれを私に。

長五　さあ何か知らねど詮議の種になるまいものでもない、なあ親父様。

佐兵　さうぢや〳〵、長吉ちやつと讀みや〳〵。

長吉　ハイ〳〵。（ト何心なく取つて開き、）一筆しめし上り〳〵、誠に昨日は氣の毒な事聞きまして癇が起り案じ上り〳〵、どうぞ〳〵お賴みのことよろしく都合いたしたく、ほんにこれまで惚れた惚れたとあたいやらしい。（ト讀む内お君びつくりして、つか〳〵と長吉が傍へ來り。）

お君　これ〳〵長吉、減多に此の文讀んでたもるな。（トこれを長五郎立入りお君を引退け、）

長五　お君さん、お前の構うた事ではない、引込んでゐされ。

お君　でも、その文は。

長五　はてまあ、退いておいでなあ。（ト此の内長吉口の内にて文を讀んで、）

長吉　ヤ、そんならお君様、あのこれを。

お君　長吉合點が行つたかや。

長吉　さうとは知らず最前の。（ト勘十郎を見る。勘十郎咳拂ひする思入。）

長五　ヱ、讀まぬか、長吉後を讀まぬは合點が行かぬ。（ト文を取つて佐兵衛の前へ持ち行く。佐兵衛取て。）

佐兵　なんぢや、長吉様參る君より。（トこれにて兩人はつとこなし、）そんなら娘と長吉は。

長五　疾からちゝくり合つてをる其の濡文、これが此の抽斗に入れてあるとは泥坊の證據、不義盗人の此二人。（ト長吉を引立てる。勘十郎つか〳〵と寄つて、長五郎を引退け二人　庇ひ、）

勘十　長五郎待つた。

長五　勘十郎様、なぜ止めさつしやりまする。

勘十　此文には何んと書いてあるな。

長五　おれは無筆ぢやによつて讀めぬが、宛名は慥かに長吉様參る、君より、それが慥かな不義盗人の。

勘十　いや、證據にはなるまい。

長五　とは又何故に。

勘十　もつとも長吉様參る君よりとあれば、則ちお君より長吉へ送つた文なれど、こりや證據には相成らぬ。

長五　そりや又何うして。

勘十　されば兩人が金を盗みしにせよ。我が名の書いた文をば後日の證據に、これにて詮議いたせよと入置くやうなる馬鹿者があらうか。

長五　でも盗賊の疑ひかゝれば。

勘十　こりや盗人は外にござる。見す〳〵知れた古手な仕組み。

長五　ムゝ、でも二人は不義者、その文を。（ト取りにかゝる、勘十郎長五郎をぽんとかへす。）あいたゝゝ

勘十　たゝゝゝ、こりや勘十郎様、なんでわしを投げたのぢや。兩人が不義なら、長五郎そちも不義者ぢやぞ。

長五　ナニ、此の長五郎が不義とは、してその證據は。

勘十　外でもない矢張此狀。（と文を見せ、）ほんにこれ迄惚れた〳〵とあたいやらしく口說き候を幸ひに、厭ながらも長五郎づらにとあれば、長五郎そちもこれまでお君に不義を言ひかけたであうがな。

長五　いやさ、それは。

お君　これまで私を捉へて、色々とそれは〳〵。

長五　これ〳〵お君さん、お前顏に似合はぬ酷い人ぢやな。

佐兵　こりや長五郎、おのれも娘を。

長五　さあそれは惚れたが、矢張不義は長吉めだ。（ト長吉を引立てるを勘十郎さゝへて、）

勘十　こりや、其不義を糺せば其方も同罪。

長五　そんならこれも、ホイ。

佐兵　さうとは知らず娘が淫奔。

勘十　凡て色よき花には垣を結び、折取る者禁制と札を立てゝも手折るは世界の習ひ、まして主なき娘のお君。

長吉　いや私が過失、此上は如何樣とも。

お君　これ〳〵長吉、そなたに科はない、皆私が。

勘十　ハテ、何事も穩便に、金の行衛は追つての說議。

佐兵　成程、おれが思案もあれば、長吉は表の二階へ、娘は奥へ。

兩人　はあ。（ト兩人共こなしある。）

長五　さあこれで二人はお引分けだが、二階住居の丁稚め、又お君さんが忍び込んで行くまいものでもない、張番は此長五郎。

佐兵　いやおのれも不義者、憎い奴なれど、何んにもいはぬは死んだ母が賴み故。

勘十　此の家の內を放飼。

長五　おれを鳥ぢやと思うてゐる。いや鳥もとりも角力とりぢや。

勘十　最早幕合、拙者も暫く。

佐兵　二人が納り、勘十郎には奥へとさつて。

長五　思へば〳〵。（ト長吉へかゝるを勘十郎突退けて、長五郎をぽんと投げる。）

勘十　實に戀は曲者ぢやよなあ。

ト唄になり、勘十郎佐兵衛思入あつて長吉お君兩人の手をとつて奥へはひる。と暮六ツの鐘鳴る。

奥より以前の權七喜助行燈を灯し出て、長五郎を見て、

權七　ヤア長五郎さんがどうかしてゐるわ。

喜助　ほんに長五郎さん〳〵。（ト兩人長五郎を介抱する。長五郎心附いて、）

長五　うぬ勘十郎め。（ト兩人を見て、）喜助か、權七か。

喜助　これ樣子は聞いた長五郎さん。

權七　お前さん、此儘ではおかれまいぞえ。

長五　二人が手前面目ない、これからは破れかぶれお君を引攫ひ、今宵の中に此家を駈落ち、夫に付けても二人に頼むは、まあ中宿の工面、三味線堀のおくま婆がところへ。

兩人　ム、、すりや婆が所へ。

長五　合點か、こりや。（と長五郎兩人へ囁く。）

兩人　ハテそんなら奥の。

長五　ハテ、二人ともにおれが幕内。

兩人　首尾よく行けば、

長五　金はづッしり。

兩人　そんなら裏へ。

長五　こりやゞ（ト長五郎こなし兩人をおさへる。是を知らせにて此の道具ぶんまはす。）

米屋塀外の場　本舞臺一面の黒塀、よき所に切戸、用水桶、塀の内へ米倉の二階を見せ、障子閉切りある。すべて夜の模樣よろしく時の鐘にて道具納る。ト跳への獨吟にて花道より小梅好みのこしらへにて頭巾小提灯を提げ、お竹を連れて出て來り、

小梅　お竹さんとやら、お前のいかいお世話でござりますな。

お竹　なんの朋輩のこと、長吉どんには樣子あつてあれあの二階に、折角逢ひにござんした姉樣、内から連れて行くと目に立つ故、こゝへ連れて廻りました、私がさう言ふ程にこゝに待つて長吉どんに逢はしやんせ。

小梅　ハイ〳〵忝うござんす、是非とも弟に逢はねばならぬ大事の用、もう日は暮れて參りまする、うちに居ても心ならず、夫でこちの人に隠れてそつと淺次郎に。

お竹　淺次郎とはえ。

小梅　長吉がことでござんす、家では淺次郎と言ひました、此のお家へ參つて名が替りました故。

お竹　矢張長吉殿のことでござんすか。

小梅　左樣にござりまする。

お竹　どれ私は切戸からはひつて、長吉殿にお前さんのござんした事知らせて上げませう。

ト切戸の口へはひる。

小梅　よろしうお賴み申しまする。朋輩の好みとて今の女中さん、どうぞ早う弟に逢ひたいものぢや。

ト此時切戸より喜助出て來る。小梅提灯を袖にて隱し、用水桶の蔭へ隱れる。

喜助　長五郎さんの使に三味線堀のおくまさが所へ行つて萬事の事を。さうぢや〳〵。

ト花道へはひる。此の時二階の障子を開けて長吉顏を出し、

長吉　姉者人々々。

ト下を見下し尋ねる。小梅以前の用水桶の蔭より出る。

小梅　弟淺次郎か、こゝに居るわいな。（ト裏向に二階を見上げる。）

長吉　もしお前の見えたは、金の事でござんすかえ。

小梅　サア一昨日文で委しく賴んでよこした通り。

長吉　今宵のうちに要るとある百兩の金、これ〳〵氣遣ひなさんすな、金出來ました。

小梅　そんならその金が、忝い。

長吉　サアこれまで顏は知らねども、由兵衛殿やお前の命づくとある故、やう〳〵百兩の金をこしらへたが、私が方へ受取らぬが、これ必ず案じる事ではござんせぬ、たとひ夜が更けても受取り次第私が持つて行くわいな。

小梅　ヱ、忝い、兄弟なれば顏も得知らぬこちの人の爲めに、我身までが其樣に忘れはせぬぞや。

ト拜む。

長吉　勿體ないこれ姉さん、えゝ何んというても二階と下、お前顏を一寸。

ト小梅提灯を上げて顏を見せる。二階にて長吉思入あつて、

長吉　金は追付け持つて行く程に、人目に立つては惡い、お前は早う。

小梅　そんなら待つてゐるぞえ。

長吉　はて、後までにきつと持つて行きますぞえ。

ト障子をぴつしやりと閉める。此内花道より喜助戻つて來る。切戸より權七出る。小梅以前の用水

桶の蔭へはひる。

權七　どうぢや〳〵、喜助中宿はどうだ。

喜助　その事に付いて長五郎さんに言はねばならぬ、權七われも來い。

權七　そんなら奥で、合點だ。（ト兩人切戸へはひり、小梅出て。）

小梅　ア、嬉しや、兄弟は持つべきものと何やらの淨瑠璃にある通り、弟が今の樣にいうてたもつたので、胸が開けて癪が下つた、ちやつと此樣子を由兵衛殿に、いや〳〵、物がたいこちの人、奉公してゐる者に無心言うたというては又日頃の氣性、いや〳〵こりや矢張、默つて渡しませう。ぢやというて今頃は氣を揉んでゐやしやんせう、さうぢや。（ト行きかけて立止り、）たとひ言うても金さへ出來たら、萬更惡うも思ふまい、いつそこちの人へ、どれ長吉の來るのを。待ちませうか。（トよろしく知らせに付き此道具ぶんまはす。）

本舞臺三間の間常足の二重、見付正面襖、上の方一間の床の間、上手一間二階折廻し、障子閉切り、いつもの所に枝折木戸、よき所へ石の手水鉢を置き、すべて奥座敷の體にて道具留る。と蔭にて、

皆々　今宵は二十三夜待、約定の淨瑠璃盛衰記梅ケ枝無間の鐘が所望ぢや〳〵。

トこれより床の淨瑠璃になる。

〽あと見送りて梅ケ枝はしばし涙に暮れけるが、必ず氣遣ひなさるゝな、えわしが心當りのあるというたは皆嘘、お前の命が助けたいばつかりぢやわいなあ。

長吉　今姉さんに逢うて、氣遣ひさつしやるな後に持つて行かうと言うたは、お前に力を落さすまいため、今のわしが身の上、どうなる事やらお君樣のお返事も、最前の仕宜では、どうならうぞいの。

〽金ならたつた三百兩。

此方はたつた百兩、由兵衛殿や姉さんの難儀。

〽可愛い男を移すのか。

こりやどうせうぞいなう。

〽えゝ金が欲しいなあ、二八十六で文付けられて二九の十八でついその心、

四五の二十なら一期に一度、わしや帶解かぬ。

えゝ面白さうに隣りには、二十三夜の月待の淨瑠璃、あれに付けても此家へ、奉公に來てお君樣と言ひかはし、末は女夫にならうと思ひ思はれた、お君樣を惱んで拵へる金の工面、出來ねば現在の姉樣、さあ〳〵、こりやどうせうなあ。

〽あゝどうせうなあ、最早日本國に此の梅ヶ枝が、祈る神も佛もないか。

最前から心も留めず聞いてゐた、あの淨瑠璃は無間の鐘、それ故に梅ヶ枝が。

ト手水鉢へ思入あって、

わしは又姉さんへの孝行、一心をもつて今宵の手詰め百兩の金。（トきつと手水鉢を見る。）

〽おゝそれよ、夫ゆゑには石になつたる女もあり、我は賤しき流れの身なれど、一念は誰に劣らん、巖となれる手水鉢、水掬ひ上げ口嗽ぎ伏拜み〳〵人に知らせじ聞かせじと、柄杓おつとり傳へ聞く、無間の鐘を撞けば有德自在は心の儘、これより小夜の中山へ、遙かの道は隔つれど、思ひつめたる我念力、此の手水鉢を鐘に擬へ。

今宵の手詰、何うぞ百兩の金の出來ますやうに觀音樣々々。（ト柄杓を把り片手にて拜む。）

〽石にもせよ金にもせよ、志すところは無間の鐘、此世は蛭にせめられ未來永々無間地獄の業を受くとも、だんない〳〵大事ない。

姉さん故には、此の長吉。

ト柄杓にて手水鉢を打つ。途端に時の鐘鳴る、長吉びつくりして、

ヤア〳〵、今のは慥かに鐘の音、そんなら一心屆いて無間の鐘は。

ト空を見上げてよろしくある。此内鐘鳴る。

はて不思議や無間に擬らへ打つ度に、一イ二ウ三イ四ウ五ツを聞きしは鐘の音。（ト思入あって、）ム、、さては今のは無間の鐘ではなうて、上野淺草の時の鐘、撞く響きをばそれぞと思ひ、迷ひしなるか、段々夜も更け早や今宵も五つ、金が出來ねば姉さん夫婦、此の長吉も次第に縮む命に屠所の羊、もう戌の刻、こりやなんとせうぞいなあ。

〽面色忽ち紅梅の、花もちり〳〵心も髮も、逆立ち上り柄杓持つ手も身も震はれ、すでに打たんと振り上ぐる、二階の障子の内よりも。

ト此内二階バタ〳〵にてお君長五郎立廻つて金を下へ投げる。

お君　長五郎さん、嘸憎からうが此金わしに。

長五　いや折角盗んだ此金、なんのおのれにうま〳〵と。

お君　いや、それでも。

長五　いや、ならぬ。

お君　いや、下さんせ。

〽その金こゝにと三百兩、ばらり〳〵と投出す、深山おろしに山吹の、花咲きちらす、

長吉　こりやこれ金、思ひがけない。

〽如くにて、こゝに三兩彼處に五兩、是は夢かや現かや、誰方か知らぬが此の御恩、死んでも忘れぬ〳〵と、嬉しいやら怖いやら、拾集める心もそゞろ。

長吉　どうぞ百兩。

お君　長吉、そなたの報みの百兩。

長吉　やあお君樣。

長五　さてこそ。（ト飛下りかゝるを勘十郎出て、長五郎を引附け、）

勘十　越度ある奉公人、親元へ預けるは大法。

長吉　段々とのお情け。

勘十　所は本所梅堀の、

お君　それ、そなたの此の文。

ト投げてやる。長吉取上げる。長五郎それをとかゝる。

〽包むに餘る悅び涙、鎧代りの此の金と、おし戴き〳〵。

長吉　おさらば。

勘十　早く行け。

〽勇みいさんで。

ト三重にて長吉は花道へ、舞臺はよろしく此の仕組み、双方見合ふを木の頭にて、幕引付ける。と直ぐに時の鐘、浪の音にてツナギ、大川端となる。

# 三幕目

## 大川端長吉殺しの場

**役名**　梅の由兵衛、源兵衛堀の源兵衛、丁稚長吉、手代喜助、同權七等。

大川端の場。本舞臺向う正面大川端、淺草の方の夜の町家遠見、此前へ浪手摺、すべて大川端の體よろしく、此前へ淺黄幕をかけ、上手葭簀張りの茶店を片付けし心にて、葭簀を卷き床几を重ねある。浪の音時の鐘にて幕あく。

ト仕出し皆々思ひ〳〵の事あってはひる。と後流行唄やうの合方になり、花道より、由兵衛着流し一本差し頬冠りにて出て來り花道にて、

**由兵**　もう大方五つ過ぎ、四つ前でもあらうが向島にて請合うた小三樣の身請けの金、代りに渡した頭巾取返す日限も、今宵の今となって其金が出來ぬとは、これまで立てた由兵衛が男の廢るは厭はねど、金五郎樣に萬一の事があっては、大恩受けた隼人樣へ。（ト思入あって、）あゝ世間のよい衆は命がないと、醫者の手をあげた病人を、多くの金を出し人參を盛って見るが、しかしこれは金さへあれば助かる命、助かるも金殺すも金、なぜに寶と世に稱へるぞ。

トしを〳〵と舞臺へ來る。此の時上手バタ〳〵にて權七喜助長吉を引立て出て來る。由兵衛これにて小蔭へ身を隱す。

**權七**　さあ長吉、われがもってゐる百兩の金、こっちへ渡せ。

**長吉**　滅相な、わしや金はもってはゐぬ、覺えはござんせぬ。

**喜助**　覺えないとは野太い奴め、長五郎さんに頼まれて、われが後を追っかけて來た、さあその金渡せ。

ト兩方よりかゝる。

**長吉**　長吉は骨になっても、滅多に渡さぬ大事の金。

**兩人**　否でも應でも取らにや置かぬわ。（ト兩人して長吉を打擲する。）

**長吉**　アレイ〳〵。

ト言ひながら逃げるを、兩人やらぬとかゝる。よき程に由兵衛兩人を見事にとって投げ長吉をかとひる。兩人起上り由兵衛を見て、

**兩人**　ヤアうぬはどいつぢや、なんで邪魔をひろぐのだ。

由兵　おりや往來の者、通りかゝりて今の樣子、さてはわいらは物取りだな。

兩人　邪魔するわれから先へ。（ト由兵衛にかゝるを一寸立廻つて兩人を追込む。）

由兵　えゝ憎い奴め。（ト立戻り長吉を見て、）これ〳〵、見ればまだ若衆さうなが、はて悲哀な目に逢うた、怪我はせぬかや。

長吉　いえ〳〵怪我はいたしませぬ、よい所へあなたがお出なされて下さりまして、私が仕合せでござります、有難う存じまする。

由兵　なんの禮には及びませぬ、聞けば金をもつて居るさうなが違ひ無いか。

長吉　ハイ〳〵、大事にかけて持つてをりまする。

由兵　油斷せぬやうにしつかりと持つてゐやしやれ。さうしてこなさんは、何所まで行かつしやるのぢや。

長吉　はい、此の先の駒留橋まで參りまする。

由兵　そりやあまだ餘程ある、とてもの事におれが送つてやらう。

長吉　イヱ〳〵それには及びませぬ。

由兵　ハテ金もつて夜の道、またあのやうな奴がゐやうも知れぬ、おれもどうで歸路、遠慮に及ばぬ、サア〳〵行かんせ〳〵。

ト これより跳への合方になり、長吉先へ由兵衛後よりそろ〳〵と花道へ行く。

長吉　お前樣、いかいお世話樣でござりまする。

由兵　なんのおれも行くついで、さうしてこなさんの名は長吉殿と言ひますか。

長吉　ハイ、よう御存じでござりまするな。

由兵　今の野郎が言ひをつた故。

ト 言ひながら兩人花道へ行きかゝる内、由兵衛ふと思入あつて後ろより切らうとする。長吉ちよこなしあつて、

長吉　モシ、此道は歩みにくうござりまするな。

由兵　いや常に通りますると、そのやうにもない。（ト又行きかける、由兵衛柄へちよつと手をかける。）

長吉　闇なれど星明りで、ようござりまするな。

由兵　さあ〳〵、今宵は二十三夜、もう追付け月代が出るであらうよ。

ト いろ〳〵捨ゼリフにて花道大あゆみへ廻る内、知らせにて舞臺の黒幕を切つて落す、瓦家遠見、舞臺へ戻つて由兵衛思ひ切つて長吉の懐中へ手をずつと入れる。

梅の由兵衛

長吉　ヤアお前も此金を。

由兵　さあ貸して下され。

長吉　いや〳〵ならぬ。（ト由兵衛を突き退け）めつさうな、人を送つてやらうの何のと正直さうに見せかけ、何んぼ前髪でも無體な事をしやつては爲めにならぬぞえ。

由兵　ヤ何も案じる事はない、こゝまで來たりやもう僅ぢや、わしはもうこゝで別れませう、氣をつけて行かしやれや。

ト由兵衛は上手長吉は花道へ行きかける。由兵衛思入あつて、

由兵　ヤ長吉殿とやら、一寸待つた。

長吉　えゝ。（トびつくりする。）

由兵　何もびつくりせずと、一寸こなさんに用がある、こゝまで戻つて下され。

長吉　ハイ。

由兵　手間はとらせぬ、一寸歸つて下され。

トこれにて長吉舞臺へ戻る。由兵衛あたりへこなしあつて、長吉の傍へ行きこなしあつて、

由兵　これ、おれは今宵に限つてなければならぬ百兩の金、出來ぬ時は命づく、思ひがけなき長吉殿、どうぞ其の金二三日貸して下され。

長吉　いえ〳〵なりませぬ、そつちも命づくならこつちも命づく、どうぞこれは堪忍して下され。

由兵　すりや、どのやうにいうてもその金を。

長吉　サア何を隱さう此の金は、今宵中になければわしが大事の〳〵、たつた一人の姉さんが配偶が命がない、それでやう〳〵拵えた此金、それぢやによつてこればつかりは、どうぞ許して下さりませ。

由兵　こなたの言ふのは尤ぢや、見ず知らずの人に貸してくれとはわしが無理、さりながら今宵につゞまる百兩の金、無理と知つてこなたへ無心、どうぞ貸して下されえ、これ頼む〳〵。

長吉　私も頼む、どうぞ許して下され。

由兵　さあ無理であらう、無理であらうがこれも矢張お主の爲、これ長吉殿、これ拜むわいの。

長吉　いえ〳〵わしが拜みまする。

由兵　どうぞ貸して下され。

長吉　どうぞ堪忍して。

兩人　下さりませ。

ト兩人拜み合ふこなしある。長吉よろしくあつて逃げようとする。由兵衛逃がさじと爭ひちょつと立廻つて由兵衛是非なく一ト刀切る。これにて長吉あつと言つてどうとなり、

長吉　ヱ、胴慾な、こなたはわしを殺すのか。

由兵　さあ殺したうはないけれどもよんどころないお主の爲め、知らぬこなたを殺すは小の蟲と大の蟲、見かへられぬこつちの手詰め、不便ながらも金が欲しさに。

長吉　えゝ死にともない、今夜一と夜さ死にともない、これわしが命はやらうが金はやらぬ、此金の無い時は、姉さんの配偶に凶事あやまちがあつたならなんとせう、どうぞ助けて其金を。

由兵　命を助け金をやる程なら可愛さうにかうは切らぬ、二三日の内には金拵えて戻しに行かうが、こなたの名どころはなんと言はつしやる。

長吉　いや〳〵名どころを言うたとて、人を殺して金を取る程のこなたぢやもの。

ト又取り付くを一寸立廻つて

長吉　助けて下され、死にともない〳〵。

由兵　ヱ、了簡して死んで下せえ。

ト由兵衛聲立てさせじとして口へ手を當てるはづみに小指を喰切り、トゞ由兵衛乘りかゝつてとゞめをさす。此の時月出る。由兵衛脇差の血を拭うて鞘へ納め、以前の金を取上げる。此時前幕の手紙落ちてあるをこなしあつて手に取り、長吉の顔を月明りに見て、

由兵　女房小梅に生寫し。（ト思入あつて手紙を披き、月代に透し讀む思入あつて。）淺次郎殿へ姉小梅より。

ト讀み終つてびつくり、死骸を抱き上げ顔をきつと見る。此の時時の鐘、忍び三重になる、前幕の源兵衛出て窺ひゐる、由兵衛思入あつて長吉の死骸を川へ流し手を合はせて拜みつか〳〵と行かうとする。源兵衛支へるを引退ける、ちよつとだんまり模樣になり、トゞ源兵衛由兵衛の腰へ取附く、これを振切る、此の時由兵衛の腰の煙草入を引取り、たち〳〵と後へ下りどうとなる。

源兵　盜人め。

由兵　えゝ。

ト礫を打つを木の頭にて、由兵衛は花道へはひる。源兵衛煙草入を透し見る。此仕組よろしく、時の鐘、早き合方にて

ひやうし　幕

# 大詰

梅堀由兵衛内の場
同仕返しの場

**役名**　親方才兵衛、下男與太郎、女房小梅、小三、金五郎、醫者久庵、梅の由兵衛、米屋の娘お君、手代長九郎、同喜助、同權七、金谷金兵衛、源兵衛堀の源兵衛、等。

梅の由兵衛内の場。本舞臺三間の間常足の二重、正面押入納戸口、よき所に佛壇、上の方中二階。下の方門口、二重へ本疊を敷きすびつより人のではひり、すべて世話場の模樣、こゝに前幕の親方才兵衛男二三人連れ奥へ踏込まうとしてゐる。下男與太郎馬鹿のこしらへにて、鉢卷片肌脱ぎ、棕櫚箒をしやに構へてこれを止めてゐる。

與太　イヤ〳〵滅多にやることはならぬ、與太郎が止めた、一番待つて貰はう。

才兵　イヤ面倒な、馬鹿者に構はずと、さあ男共來い〳〵。

トバタ〳〵にて右の男共奥へ行くを、與太郎馬鹿な立廻りにて色々止めて、

與太　ヤイ親方、此の與太郎がかう止めかけては、假令りんびやうになつても滅多にやらぬぞ。

才兵　いやこちの奉公人小三が昨晩から走つて行衛が知れぬ、隱所は大方こゝな内、それで家捜しするのぢや。

與太　こいつ家捜しの店捜しのと、いやらしい奴等ぢやわい。

才兵　あんでもあの押入が氣ぶさいな。そりや男共。

男　合點ぢや。

ト行からとする。與太郎止める立廻り、よき處へ小梅穆前垂にて出で、皆々を引分け、

小梅　これはしたり、最前から騒々しいと思うてゐたら、與太郎こりや何事ぢや。

與太　小三樣が此方の内に引込んであると、鼠のやうに暴れをるわい。

小梅　そんなら身請けの手附日限は昨晩、それで。

才兵　いやその手附に預つてゐる頭巾は昨晩引替へに由兵衛殿が、金を持つて來て取替へて手附は濟んだれど、まだ後金の催促、それも前に肝心の小三が走つた故、隱所は大方こゝの家、小三を尋ねにやどちらへもおれが物も言はれぬ。（ト小梅こなしあつて、）

小梅　ムヽ、何んと言はしやんす親方さん、こちの人が昨晩手附の金、を持つて行かしやんしたかえ。

才兵　しかも夜更けて。

小梅　はてなあ。（ト思入ある。）

與太　あれ又店捜しを吐かし居る。」

才兵　でも。

小梅　待たしやんせ親方さん、よう思うても見やしやんせ、出來難い金を調へて持つて行く程の此方の人、是非に小三樣は身請けせねばならぬ仕宜、其の小三樣をこちの家に。

才兵　いや〳〵近來は走らせて親元から手を廻して、日割勘定へ立金など〻、金の山をめつしてわるせりが流行る故。

小梅　置かしやんせ、かう言うても梅の由兵衛の妻、さういふ賤しい身請けはしませぬ、殊に小三樣も此方の内にゐやしやんせぬわいなあ。

才兵　そんなら由兵衛殿は留守でござりますかえ。

小梅　留守でござんす、追附主が歸らしやんしたら、何もかも譯が知れませう、それ迄お前も。

才兵　成程、どうで由兵衛殿に逢はねばならぬ後金のせいらく、其間に行衛の知れぬ小三、わきを尋ねて見ようか。

小梅　それがようござんす、何事もまあ後に。

才兵　そんならお内儀。

小梅　親方さん。

才兵　必ず後に、さあ男共。

小梅　ようござんしたなあ。

ト唄になり、才兵衛男共を連れて花道へはひる。小梅こなしある。

與太　天晴通り者のお内儀さんぢやなあ、おれが最前から色々に力んで脅しても歸らぬ親方、それをお前が出て今の一言で歸るとは、雀の千聲より鶴の一聲ぢやなあ。

小梅　これそんな事を言はずとも與太郎ちやつと奥へ行て、茶を焚付けておきや、追附こちの人が戻らしやんすであろ。

與太　由兵衛さんよりおれの腹がきた山櫻、さらば。

ト合方になり與太郎奥へはひる。梅四方を見廻し押入を開け、内より小三出で、

小三　小梅さん、大事ないかえ。

小梅　氣遣ひさしやんすな、今親方は歸したが合點の行かぬこちの人、昨晩遲う手附の金持つて行か

しやんしたといなあ。

小三　サア、さういふ事とは知らず手附の日限は切れるし、伴五郎方へ身請けされては生きてはゐぬ覺悟、それで廓を駈落して金五郎さんに逢はうと來る道で、お前に逢ふと。

小梅　無理に連れて戻つて、あの押入の内へ忍ばせて置きましたが、もう此の上は隱れる事はどさんすまい。

小三　でも親方が後に來るというたは、後金の催促。

小梅　手附は濟んで一つ適へは又一つ、これに付けても弟は今に。三ツ四ツ五ツあゝ難しい浮世ちやなあ。

ト思入ある。此の内始終合方にて金五郎花道より頬被りにて、つか〳〵と出てずつと内へはひり門の戸をびつしやり閉める。

小三　やあ金五郎さんか。

金五　小三、小梅殿。（ト頬被りをとる。）

小梅　思ひがけなき金五郎樣。

小三　私しや昨晩からお前に逢ひたかつたわいなあ。（ト取付く。金五郎こなしあつて、）

金五　さあ心にかけてある身請けの日限、由兵衛殿に樣子を聞かうと思ふ内、勘十郎樣の御内意に此の金五郎を召捕の役人此江戸へ。

小三　えゝ、そりやどういふ仔細で。

金五　ハテそなたと言替し國を立退いた其後にて、彼の色紙の紛失、これ金五郎が仕業盜賊と評議極つたれども、又詮議の日限が切れたとやら、譯は知れねど國許より、何んでも召捕の役人が來てゐるとの事。

小三　さう言ふ事なれば、私が身の上も兼てお前に言ひ合せた通り。

金五　死ぬる覺悟、小三おぢや。（ト手を取つて行かうとする。小梅向うへ廻り、）

小梅　待たしやんせ、お二人さん。

兩人　ヤア。

小梅　そりやまあ何んの事でござんすえ、假令身請けが埒があくまいが、お國許から召捕が來ようが、こちの人に此の樣子も言はずに、言ひ合はしたの死ぬる覺悟のと、二人連れにてこりや何處へござんすのぢやえ。

兩人　さあそれは。

小梅　お二人故樣々と心を盡してゐやしやんすこちの人、ちつとまあ思遣つても御覽じませ。

金五　さあ小三が緣につれて、由兵衛殿がこれまでの志、どうも氣の毒で。

小梅　はてそこがお主なり家來なり、それに連添ふ私、なにも氣遣ひに及びませぬ、なんに依らずこちの人が引請けてゐやしやんすれば、小三さんも其樣に二言めには覺悟を極めたと言はずに。

小三　それでも今聞いた金五郎さんの身の上。

金五　國元の噂、捕手の役人。

小梅　そりや又こちの人が。（トこなしあつて、）さういふ事ならかういふ所を若しまた。（と思入）幸ひ小三樣と引分けて置いて、人目に立たぬやう暫のうち、此の疊の下に、まあ〳〵。

ト疊を上げる。兩人共手傳ふ。小梅すびつの蓋を取り、下より着物を出し、

小梅　面妖な、すびつの穴に此着物。

ト擴げて見せる。兩人見て、

小三　しかも男の着物。

金五　それ〳〵、血だらけになつてあるわ。

小梅　こりや慥かにこちの人の、昨日から着てゐやしやんした。

ト思入、此内花道より久庵つか〳〵と出て、ずつと内へはひる。

久庵　小三こゝにゐたか、さあ來い。（ト小三を引立てる。金五郎立廻りに引廻し、）

金五　わりや醫者の久庵。

小三　ほんにそなたは。

久庵　こりや伴五郎に賴まれて、かぎ出しに歩く小三が身の上、これから直ぐに。

ト小三にかゝる、金五郎立廻り小三も手傳ひをかし眛の仕組み、此の内小梅右の着物を矢張すびつの下へ入れ、程よく久庵を右の穴へ突塡め疊を敷き、その上へしやんとなほる。

金五　それは。

小梅　邪魔な所へ此久庵、かうして置けば極樂落し。

金五　そんなら此の金五郎や。

小三　私が身の上。

小梅　奥でとつくり相談いたしませう、お二人共さあお出なさんせいなあ。

ト唄になり、小梅こなしあつて小三と金五郎を連れて奥へはひる。彈きながし合方にて花道より、由兵衛樒の花を携へ内へ入り門の戸を閉し、奥を窺ひこなしあつて、佛壇の戸を開き花挿しを取

出し、右の檜を立てかへ懐中より前幕の狀を出し。

由兵　淺次郎殿へ姉小梅より、此狀が則ち位牌がはり。

ト狀を佛壇へ入れ、右の花挿を直し下にゐて合掌し回向をする。此の内合方、よき所にて奥より。

小梅　それ與太郎、必ず氣を付けてくれよ。

ト言ひ〳〵出る。由兵衛びっくりするこなしあって、佛壇の戸を引立てる。小梅もこなしあって。

由兵　おゝこちの人、お前今戻らしやんしたかえ。

小梅　おいたつた今。

由兵　見ればついにないお前、佛壇を開けてなにしやしやんすえ。

小梅　やあ、さ今日はちつと志の日ぢやによつて看經を。

由兵　そんなら佛壇は掃除せずにある、わしが掃除をして、御燈を上げようわいなあ。

小梅　いやもう看經はもう仕舞ひぢや、さらば是から一服喫まう、小梅煙草盆を。

由兵　あい〳〵。（ト煙草盆を持ち來る。此の内由兵衛腰の胴亂を捜し、）

小梅　ほんに昨晩落して來た胴亂、あるかと思つて矢張腰を、あゝ惜しい事をしたわい。

ト常の煙管に煙草をついで喫む。

小梅　こちの人、お前昨晩よう金が出來たなあ。

由兵　いやさ、その金故に。（ト小梅が顔を見て）いや大事の胴亂を、つい落して來たわいなう。

小梅　わしや合點が行かぬ、どうしてその金が。

由兵　これ案じるより産むが易いと、思ひがけない以前の近附に逢うて、てんぽの皮と無心言うたらつい百兩貸してくれた、それで小三樣の手附は濟んだ、これから又後金を。

小梅　さうとは知らず此の間から、屈托になつてお前が叱らしやんせうか知らねども、向島からぢきに弟の淺次郎が方へ行き是非と頼んで置いたが、堅く昨晩持つておじやる筈、それに今になんの沙汰もないが、こちの人どうしたものであらうぞいなあ。

由兵　はて、こなたの頼み淺次郎になんの如在があらう。可愛さうに奉公の身の上、何の言うてやらいでもよい事を、ア思へば。

小梅　え。

由兵　いや、それで大方苦勞をしてゐるであらう。

小梅　さあ私もさう思うてゐたれど、お前の男づくなり又命づく、大事ごさんせぬ、たとひ昨夜の間に合はいでも、是非今日は持つておじやるであらう、それを又後金に、なあもし。

由兵　さ、あそれは。（ト脇見して齒を食ひしめる思入。バタ〳〵にてお君走り出で戸を叩き、）

お君　もし〳〵、ちやつと開けて下さんせいなあ〳〵。

小梅　これは周章しい、誰ぢやぞいなあ。

（ト言ひ〳〵戸を開ける。お君内へはひり、うんと目を廻す。由兵衛小梅びつくりして、）

えゝ減相な、人の内へ目を廻しにはひるといふ事があるものかいなあ。（ト由兵衛立寄り。）

由兵　これ〳〵。（ト顔を見て）小梅此娘を見知つてゐやるか。

小梅　いえ〳〵、近附きではござんせぬ。

由兵　まあ〳〵、水々。

小梅　アイ。（ト茶碗に水を汲んで來る。兩人色々介抱して、）名も知らねば、なんと呼ばうぞいなあ。

由兵　はてまあ、この餘所の娘御イなう。

小梅　知らぬお娘御樣いなう。（ト兩人よろしくお君心附く。）

由兵　どうぢや、氣が付いたか〳〵。

小梅　あい〳〵、氣が付きましたわいなあ。（ト お君立上る。）まあ嬉しや、びつくりしたわいなあ。

お君　段々お前方のお世話忝うござんす、こゝへ來る道でちつと惡者に出逢ひ、見附けられまいと知らぬ道筋を走つて來て、思はず氣を失うたさうなわいなあ。

小梅　さうしてお前は何處の娘御樣で、どこへ行かしやんすのぢやえ。

お君　あい、此の梅堀の由兵衛さんのお内儀さんに逢ひに。

小梅　ヱヽ。（トこなしある。）

お君　さあ、そこにこちの人長吉が行つてゐやるによつて。

小梅　もし〳〵、そんならお前はお藏前の、米屋のお娘御さんでござんすかえ。

お君　思ひがけない、これはしたり。

由兵　女房共〳〵、そりや其方の弟が奉公してゐる所のお娘御か。

お君　さうして長吉は何處へゐやるえ、奥にか、但しは二階にゐやるかいなあ。

（ト言ひ〳〵行かうとする、小梅止める。）

小梅　これ、もし〳〵私も待つて居りますが。長吉はまだこちの家へは來ませぬわいなあ。

お君　なんのまあ、昨晩四ツ過ぎに家を出やつた長吉、慥かにこゝへ來てゐやるに違ひはない、隱さずどうぞ逢はせて下さんせいなあ。

（トいろ〳〵頼む。此内始終由兵衛思入。小梅こなし。）

小梅　現在姉弟の事、なんの隠しませうぞ、眞實今におじやらぬ弟、わしもどうやら心ならぬ、お娘御さん、こりやまあどういふ事であらうなあ。

お君　はて面妖な、昨晩中にお前に渡さねばならぬ金と私への頼み、やう〳〵調へてやつたれば、悦び勇んで其金持つて、直ぐにおぢやつたが、何處へ行つてゐやるぞいなあ。

小梅　そんなら百兩の金をお前が。

お君　さあ、互に言替した交情、末は女夫ぢやもの。

小梅　あの弟とお前は。

お君　おゝ恥しい。（ト袖にて顔を隠す。）

由兵　ア、南無阿彌陀佛。

小梅　えゝ思ひがけない念佛を。

由兵　いやこりや看經の餘りぢや。（ト思入あつて、）ハ、、、、、まだ近づきにならぬ女房の弟と、懇ろにしてござる親方のお娘御、よう頃合ひし色事で思はず知らず、殊に金拵えての眞實、女房の案じ、いや氣遣ひない、昨晩から出てゐる長吉、何處へ行くものだ、こちの内へ來にやならぬ。來たら幸ひお娘御と一緒に祝言ぢや〳〵、おれも近附きになつて共々に取持にやならぬ。

小梅　ほんに自慢ぢやないが生れ附いて正直な弟、滅多に外へは行きませぬ。それに此樣に暇の入るは。

お君　長吉に片時も離れて居ともない故、わさ〳〵こゝへ尋ねて來ましたわいなあ。

小梅　それは猶のこと。

お君　是非長吉に。

由兵　さ、來るといふにも、此の七月盂蘭盆に。

兩人　ヱ、。

由兵　いや裏の離座敷を掃除させうぞ、そこで待たんせ。

お君　あい〳〵。

由兵　おれが案内、さあ此方へ。

兩人　ハイ〳〵。

ト合方になり、由兵衛こなしあつて、お君を連れてはひる。後に小梅殘り、

小梅　どうも合點の行かぬ弟の身の上、金を持つて出やつたのに今に見えず、それに不思議な疊の下のこちの人の着物。（トこなしある、）こりや怪しからぬ、胸騒ぎがして來たわいなあ。

ト思入ある。ところへ花道より長九郎、喜助、權七を連れて出て來り内へはひる。

長九　これ、こゝが梅の由兵衛が家で、こなさんが内儀の小梅殿か。

小梅　あい小梅でござんすが、つい見たこともないお前方は。

權七　おいらは藏前の米屋の者だ。

喜助　ヱヽ。

小梅　

兩人　急にこなさんに見せにやならぬものがある。連れ立つてちやつと見せたら肝を潰さう、さあとさんせ。（ト兩人して小梅を引立てる。）

小梅　なんぢや知らねど、まあ樣子を。

長九　見せたら樣子が知れる、遲うなつては檢視が喧しいわい、早う。

權七　合點ぢや。（ト引立てる。）さあごんせ〳〵。

ト兩人して無理に小梅を引立て花道へ連れてはひる。長九郎後に殘り、

長九　これからこゝな内、合點の行かぬ由兵衛め。

ト奥へ行からとして、ちよつと思入あつて臆病口の方へそろ〳〵忍び込む。花道より金谷金兵衛、羽織袴お國侍のこしらへにて家來一人連れて出て來り、

金兵　慥かに此の家とある、それ案内いたせ。

家來　ハツ。（ト門口へ來て、）賴みませう〳〵、此家は由兵衛宅かな。

ト奥より與太郎出て、

與太　ヲイ〳〵、梅の由兵衛宅ぢや、これ内ぢやわいの。

金兵　然らば由兵衛殿は在宿かな。

與太　在宿とはなんの事ぢやの、これ〳〵旦那さん〳〵、何所やらから侍が來たぞえ。

ト奥より由兵衛出て、

由兵　ヤイ〳〵、何を吐かすのぢや、おのれはちやつと奥へ失せう。

與太　おつとしよ。（ト奥へはひる。）

金兵　御免下され。（ト内へはひる。）

由兵　やあ、あなたは慥か。

金兵　下總の國千葉の家中金谷金兵衛。

由兵　すりや金五郎樣の御舍兄樣。

金兵　如何にも此方金五郎奴が儀に就き、由兵衛ちとお手前に談じ度き事あつてわざ〳〵參つた。

ト下にゐる。由兵衛煙草盆を持って出て、

由兵　これは〳〵見苦しい處へ思ひがけないお入り、憚りながら私に談じ度き儀とはな。

金兵　出してくりやれ。

由兵　え、出してとは。

金兵　いやさ金五郎を。

由兵　何んと仰せられまする。

金兵　以前は同家中三島隼人殿の家來、今は町人の梅の由兵衛、天晴の心底誠に男一疋、それには引代へ人非人の弟金五郎め、武士の身にあるまじき隼人殿の息女と不義密通剩へお國を出奔、今此の江戸に流浪ひ居て略樣子を聞けば、由兵衛、お手前の淺からぬ世話身共が爲めには現在の弟、忝いと一禮を言ふに言はれぬ彼奴が不屆、國を立退く砌り三島樣に預りのお家の重寶、菅家手向山の色紙紛失の詮議の日延べも早や今明日に迫り、若し色紙出でざる時は隼人殿には御切腹、兼ねて覺悟を見るに忍ひず、殊に立退きし小三金五郎に疑ひかゝり、捕手の役人を差越すべき相談區々、彼といひ是といひ聞捨てならぬ此金兵衛が密に當國へ立越えしは、人手にかけうより金五郎に繩かけて、不義の越度の言譯縛首にさすれば隼人殿が明りも立ち、また色紙の詮議日延べの願ひ、此金兵衛が弟故三島の家滅亡させては、親友の義理といひ武士が立たぬ、それ故お手前に。

由兵　いや〳〵、もし金兵衛樣、それではどうやら片手打、金五郎樣に不義の科あれば則ち小三樣にも隼人樣が。

金兵　いやさうでない、凡て四海の掟男女同日の論に非ず、女は輕く男は重し、それ故にこそ女兒童と唱へるではないか。

由兵　でも金五郎樣を私が。

金兵　屋まはぬとは、そりや一通り右の入り譯けをとつくりと申し聞かすに、由兵衛お手前に似合はぬ一言、弟に繩かけて召連れねば隼人殿のお身上、打捨て置かれぬ色紙の日延、こゝを篤と承知いたして何分弟金五郎を。

由兵　はて、なんともはや。

と兩手を組んで思案する。花道より源兵衛出て來りずつと内へ入り、

源兵　おゝ由兵衛内にか。

由兵　これは源兵衛、なんと思うて。

源兵　ちと貴樣に見せる物があつて。

由兵　おれもちつと逢ひたいと思うてゐた。それは幸ひ、してまた見せる物とは。

源兵　外の物でもない、これぢや。（ト胴亂を出して見せる。）

由兵　やあ、そりやおれが胴亂。（トびつくりする。）

源兵　金物は鈍菊の定紋、煙管も象眼同じく鈍菊、こりやこれ梅の由兵衛が提物と、誰知らぬ者もない此の胴亂。

由兵　ム、、それがどうして。

源兵　昨晩拾うた。

由兵　ヤ。

源兵　しかも大川端の屋敷の前二十三夜の月明り、ふつと見附けた此胴亂。さし汐に流して仕舞へば人は知らぬと思へども、此源兵衛はな、はて變つた所で此胴亂拾うたぢやないか。

由兵　すりや胴亂を、源兵衛貴樣が。

源兵　賣らうと思うて。

由兵　なんと。

源兵　梅の由兵衛が定紋、慥な、いやさ慥に持主の知れてある此の胴亂。外へ賣つたらきつと大金になれどそりや不實、源兵衛は男を立てる氣性、さ恨をうけた此胴亂、由兵衛、貴樣に賣らうと思うて持つて來た。

由兵　そりや忝い、昨晩吉原へ急いで行つた道筋大川端で落したその胴亂、惜しい事ぢやと思うてゐたが幸ひ拾ひては源兵衛、氣に入つた、成程買はうがその價ひは。

金兵　千兩。

由兵　ヤ。

源兵　萬兩々々萬々兩、惠美壽講ではないけれども、此の二十日向島の出合は大黑屋、その時の建引に大人しく事を濟した由兵衛、貴樣へ返禮いよ〳〵此胴亂買ふ心か、む、はてなあ。（ト思入ある。）

金兵　どうやら仔細ありげな其胴亂、賣買に鈍菊の金具價の手づかひ由兵衛が當惑、此の場に有合はす金兵衛、其胴亂を求めてくれうか。

由兵　いや〳〵あなたはお侍、下作な代物お求めは御無用。

源兵　でも此品の價がなくば、外へ賣らうが。

由兵　いや滅多に外へは賣らさぬ。

金兵　そんなら價を。

由兵　さあそれは。

金兵　此場の樣子由兵衛が難儀、推察すれば慥にもとは。（ト奥を見て、）これは大方弟め。

ト捕縄を出し立上り、奥へ行かうとするを止めて、

由兵　待つた金兵衛樣、すりやあなたには。

金兵　奥へ跡込み金五郎に縄打ち、その元を糺せばその方が難儀も免がるゝ。

ト行かうとするを立廻りて、

由兵　いや由兵衛、少しも難儀仕ませぬ。

源兵　難儀なければこの胴亂を。（ト外へ行かうとするを、）

由兵　はておれが胴亂、減多に外へは賣らせぬぞ。

源兵　そんなら價を。

金兵　ぢやによつて弟めを。（ト又奥へ行かうとする。）

由兵　待つた。（ト止める。）

源兵　是非外へ。

由兵　これ、

金兵　でも。

由兵　サア、

金兵　サア〳〵〳〵。

源兵

ト金兵衛奥へ、源兵衛は外へ、兩方へ行けば由兵衛よろしく立廻り壘を賦上げる。下より久庵最前の着物を持つて出る。

源兵　やあ久庵。

久庵　此の由兵衛は長吉殺し、證據は此の着物。

金兵　誠にその通り。

源兵

ト立寄るところを由兵衛拔討に一刀切る。久庵傷を負ひ倒れる。

源兵　やあ、それは。（ト立ちかゝるを、由兵衛拔身をひらりと見せる。）

由兵　長吉は殺さぬ、久庵を手にかけた此の血汐。

金兵　はゝあ見事、驚き入つた、由兵衛が手の内よりは心の内、身共は今の詞の内弟故に人を殺せしと察せし故、金五郎に縄打つてなにもかも彼奴を科人と思ひの外、承知いたしてコレ此如く、

目前手を負はせしに矢張金五郎を庇ふ心底、はて頼母しいさりとては。（ト奥へこなし、）いや惜しい性根を町人と呼ばせる事ぢやなあ。

由兵　いや行きがけの駄賃、久庵に傷を負はせし由兵衛、胴亂の償に命の安賣、掛賣にせぬ源兵衛、こちの利分であらうが。

源兵　いや負けてやらう。

由兵　なんと。

源兵　それ。（ト胴亂を投出し、）外へ賣つたら大金になる品なれど、持主の由兵衛に戻してやるもこつちの商ひ、樂の種を蒔く互に損徳なしのもと〳〵ぢやないか。

由兵　こりや思ひの外折合うて出たわ。

源兵　この鞘に拔身を入れ。

由兵　帳合濟ませば。

ト拔身を鞘へしやんと納める。金兵衛こなしあつて、

金兵　いや、まだ身共が注文。（ト捕縄を投出す。由兵衛取つて、）

由兵　これは。

金兵　緣に柵む義理の捕縄、由兵衛そちが思案で染上げる、彼の紛失の色紙さへ手に入る吟味は離賣から。

由兵　梅はしぶくも梅の由兵衛、色紙の染上げあら立られぬ手業が大分、慥かにそれと知れてはあれど、かきさがししんしぎれのきず附けてせんなき事、そこを無事に疵を付けずにすつぱりとめうばんぢや、明ばん澁染の。

金兵　それを望みに、身共が誂へ。

由兵　とくと承知でござりまする。

久庵　やい由兵衛、おれを此樣に切つたな、その返報にわれが訴人する、待つてをれ。

ト駈出さうとする。由兵衛上手へ引廻す。金兵衛襟じめにして久庵が顏を見て、

金兵　うぬはお國の手醫者なれば、伴五郎と馴合つて御家老に毒を盛損うた大罪人、それ故見附次第に切捨てよとの仰せ。

久庵　南無三、それでは。

ト振切り逃げるを、ちよつと上へ廻り引据え手早く縄打つ。

久庵　なんの事ぢや、由兵衛をしまひ付けうと思つておれがしまひ付けられた、乃木伊とりが乃木伊

になる、これがほんの毛を吹いて、アイタ、、、、、疵がついたぞ。

由兵　すりや私は。

金兵　切り徳〳〵。

源兵　はてよい手つがひ、由兵衛われが身の上。

由兵　源兵衛、貴様にもまたとつくりと。

金兵　身共は旅宿へ、必ず共にその捕縄の。

由兵　縺れ解いて見せませうが、幾重にも。

金兵　七度結びて兄となる、碌では果てぬ弟が身の上は無事に。心勞ながら由兵衛さらば、家來共奴を引立てい。

ト呵になり、金兵衛思入あって、家來に久庵を引立てさせ、花道へついとはひる。後に由兵衛こなしあって、

源兵　さあこれから由兵衛、誰も遠慮はない、なんと打明けて。

由兵　不思議に返つた此胴亂、剛染の煙管で一服喫まうか。

ト煙草盆を引寄せ煙草を喫む。源兵衛は何やら言ひ籠ねるこなし、これも煙草を喫む。外から、

才兵　嬉しや由兵衛、戻つてか。

由兵　親方、こりや後金の催促か。

才兵　さあ此の間の手附はやう〳〵昨晩濟んだれど、モウ百兩都合二百兩の身請け、さあ由兵衛受取ませうか。

由兵　渡すに遊はぬ小三の身請け、源兵衛もこゝにゐる、才兵衛粹に似合はぬ金の催促。

才兵　いや〳〵、此源兵衛殿の方へちやんと手切れして、お前の方へ相談した身請け、後金が今戻らずば昨晩の手附も戻して、小三は矢張こつちの奉公人。

由兵　昨晩うつたは手附でないか。ありや半金、それを流すとは無法者馬鹿盡すな。

才兵　いや〳〵由兵衛殿、そのやうにけん〳〵してもの言はつしやりますな、向島で頭巾をのみこんで二十日の日、二十日に取つた同然の手附、すりや三日過ぎるぞえ。こりや道具屋の書附にも御手附三日限りとしてあれば、流さうといふおれが無理でえすか。

由兵　ちやと言うて今、後金の百兩。

才兵　なければおれがいふ通り、

由兵　えゝうぬ、此奴も行掛けの駄賃に。（トきつとなる。源兵衛止めて、）

源兵　由兵衛それ百兩。（ト前幕の金を投出す。）

由兵　やあ此金は。

源兵　向島でどぶ六めが騙つた百兩一兩も違ひはない、そつちに覺えの通り。

由兵　すりや此の金を。

源兵　貸すのではない、戻すのぢや。親方に渡して小三が身請け、さつぱりと譯立てゝしまやれ。

由兵　ムゝ、これまでの源兵衛と打つて代つた志、まあ何事も後へ廻して手詰の後金。

源兵　時の用には離れのよい男であらうが。

由兵　忝い、それ親方後金の百兩。（ト才兵衛へ渡す。）

才兵　忝い、それで言分はござりませぬ、小三さんが年期證文。

ト證文を渡す。由兵衛取つて懐中へ入れる。

源兵　金受取つたら言分はあるまい。

才兵　なんのござりませう、これといふも源兵衛樣の達引。

源兵　こりや、無駄をいふな。（ト目配せする。才兵衛のみこみ、）

才兵　さらばお暇をします、男共來い〳〵。

ト男共を連れ花道へはひる。由兵衛こなしあつて、

由兵　胴亂といひ今の金、美しづくにしかける源兵衛、こりや此の由兵衛になんぞ折入つて、

源兵　おゝ頼みがある。

由兵　ムゝ。（ト合方になり、由兵衛源兵衛こなしあつて前へ出で下にゐて、）その頼みとはおれも承知、また由兵衛も、貴樣にちつと折入つて。

源兵　その頼みといふは、おれも承知ぢや。

由兵　事によつたら、やらう。

源兵　そりや何を。

由兵　女房小梅を。

源兵　ムゝ、おれもやらう。

由兵　そりや何を。

源兵　手向山の色紙。

由兵　ヤ。

源兵　なんと違ひはあるまいがな、ハゝゝゝゝ、由兵衛こつぱづかしい事なれど此源兵衛、成程小梅を

貰ひたい、どういふ因果か藝者の内から惚れて〳〵惚れぬいてゐる、ちやによつてその胴亂、今の金まだ此の上に望みの色紙、伴五郎様の頼みも放擲つて、たとひ人が笑はうが謗らうが、小梅さへ女房に持ちや、おれが本望我身ながら恥かしい。どうしてあれに此様に惚れた事ぢや知らぬ、由兵衛必ず腹立てゝたもるなや。

由兵　鬼をあざむく源兵衛、色ゆゑなればこそ、はて心の外ぢやなあ。

源兵　外か内か知らぬが、どうぞわりない無心なれど。

由兵　現在の女房、源兵衛にかう〳〵しろというて、取持ちはせぬが縁を切つてやらう、はてその上で抱いて寢るのはそつちの手際、去狀附けて縁切つたらよいではないか。

源兵　成程、男の口から取持ちもなるまい、すりやいよ〳〵小梅を縁切つてくれるか。

由兵　さつぱりと去つてしまふが、今いうた菅家の色紙、盜賊はどぶ六なれど、持主は源兵衛と慥かに知れてあれど、表だつて詮議もならぬ筋合ひなれば、それで折入つて由兵衛が頼み。

源兵　根が盜み物ゆゑ密に賣拂うてくれと頼まれて、肌身放さぬ此の色紙。

ト懐中より色紙の箱を出して見せる。

由兵　それを。（ト取りにかゝるをちやつと持ちかへ。）

源兵　いやこればかりは滅多に渡さぬ、去狀書いた其の上で。

由兵　すりや去狀を見て、その色紙を。

源兵　小梅と引きかへに違ひない、併し由兵衛おれをいかさまにかけると、此色紙をべり〳〵と引き破つてしまへば、小三は元より金五郎始め、幾人死人が出來ようやら知れまい〳〵。

由兵　ちやによつて小梅をきつと。

源兵　約束が違へば、長吉殺しの訴人はおれが。

由兵　いや命は惜しまぬ、色紙が欲しい。

源兵　そんなら由兵衛。

由兵　源兵衛とくと。

源兵　樣子を見ようわい。

由兵　ム、。（ト獨吟になり、兩人こなしあつて源兵衛中二階へはひる。由兵衛思入ある。）

〽春の夜の、闇はあやなしそれかとよ、香やはかくるゝ梅の花、散れど薫りはなほ高く、袂に伽羅の煙り草、きつうをしめどそのかひも、なき玉ごろもほんにまあ、柳は綠紅の、花を見すてゝ歸る雁。

ト此の唄の内由兵衛色々思案する。花道より小梅涙にしほれて花道の角にて躓きこけて、起き上り、門口へ來て思入。こなしあつて涙を拭き、なりをつくりずつと内へはひる。唄の切、彈きながしの合方、由兵衛と顔見合せ。

由兵　小梅、最前から何處へ行つた。

小梅　あい、隅田川の渡場へ。

由兵　はて、かはつた所へ何しに。

小梅　さあそれは。（ト言淀ねる。由兵衛こなしあつて、）

由兵　おれに隱して遠歩き、どうでろくな事ぢやあるまい。

小梅　なんのいなあ、言ふに言はれぬ、それは〳〵。

ト悲しさを隱す思入。此の内中二階の障子を開き源兵衛樣子を見てゐる。由兵衛源兵衛ちよつと見てわざと腹の立つこなしあつて、

由兵　いま〳〵しうてならぬわえ。（ト灰吹を煙管にて叩く。小梅こなしあつて、）

小梅　もしこちの人、そりや何事でござんすぞいなあ、お前に隱して私が行つたはちつと譯のある事、その樣子を言ひたいけれども、どうも言はれぬ、何事も堪忍して機嫌直して下さんせ、私が身の上はな。

由兵　イヤそちよりはおれが身の上、割つて言はねど追附。

小梅　ヱヽ。

由兵　いやさ追附男の効驗、存分にせにやならぬ。（ト源兵衛が方へかけて言ふ。）

小梅　それ〳〵矢張りその樣に腹立てゝねやしやんす、機嫌直して下さんせえ。これ申し一生の、いやさ、頼みぢやわいなあ。

由兵　や、何んぢや、わりや泣くか、なんの悲しうもない事を。

小梅　あい、何んの悲しうもない事、泣きやしませぬ此樣に笑うてゐますわいなあ。（ト由兵衛思入。小梅顔をちつと見て、）こちの人、由兵衛殿、私よりお前が、なんで泣かしやんすぞいなあ。

由兵　なにが悲しくて、おれが。

小梅　イヱ〳〵、それお前の兩の目に、涙が一杯たまつてあるわいなあ。

由兵　いや、こりや存先で逆上るのぢや。（トこなしあつて拭ふ。）

小梅　こりやもうこたへられぬわいなあ。（ト悲しさを隱す心にて、チロリと茶碗を取つて來て手酌にて酒を飲む、）

由兵　こりやいつにない、樣々な藝が上つたな。

小梅　アイ上つたわいなあ。（ト一口飲んで由兵衛に助けてくれと出す。由兵衛顔をそむける。）穢いかえ。

由兵　おりや酒どころぢやないわい。（トぐつと飲んで顔を顰める。）

小梅　術ないかえ。

由兵　熱鐵を飲む思ひぢや。

小梅　ほんに由兵衛殿、藝者の時からふつとお前と言替はして今此樣に女夫になつて暮すのは、これが天上の榮華とやら、私やこんな嬉しい事はござんせぬわいなあ。

由兵　それも逢ふは別れ、生は死の元といふ事あれば、いつ別れようやら知れぬ。兼ねてその心で。

小梅　いえ〳〵私や別れはせぬぞえ、あの金輪奈落の底までもお前と離れはせぬぞえ、それで此樣に。

ト また酒をついで飲まうとするを、由兵衛左の手にてその手を持つて、

由兵　もう大概に飲んだがよい。

ト 此時小梅由兵衛が止めてゐる左の手の小指をちつと見て、

小梅　こちの人、お前の此の小指は、どうさしやんしたえ。

由兵　ヤ。（トちやつと引く、小梅思入。）

小梅　えゝ大方髭剃る折剃刀でちよいと。（ト言ひつゝまた手をとりて、）但し深爪か棘でもたつたかいなあ。（トとつくりと見て）いや〳〵、こりや深爪でも棘でもござんせぬ。

由兵　おゝ切つてやつた。

小梅　そりや誰に。

由兵　さあ、餘所の女子に。

小梅　あのお前が。

由兵　心中に切つてやつた此の小指。

小梅　そりや信實に。（トとりつくをとつて突退け、源兵衛が方を見て、）

由兵　小梅、いやになつた。

小梅　えゝ。

由兵　とんと倦きが來たぞ、傍へ寄るな胸が悪いぞ。

小梅　こちの人、そりやまあなにを言うて下んすぞいなあ、その指は慥かに。さあたとひ心中に餘所の女子に切つてやらしやんしても、もう〳〵私や何にも言やしませぬ、恪氣どころかお前に追ひ

由兵　出されて、なんとせうぞいなあ。

　　互に心底見抜いた上の女夫、今の様に言うてさへその通り、此の上また聞いたらびつくりする。

小梅　えゝびつくりするとは。

由兵　おゝびつくりさす。（ト源兵衛の方へかけて硯を取りさら〳〵と去狀を書いて、）そりや。（ト去狀を投付けわきみする。小梅取って、）

小梅　去狀の事、そんなら私を。

由兵　縁切つた暇やつた、その去狀をきり〳〵持つて出てゆけ。

小梅　此の去狀を、私に此の去狀。

　　トうち〳〵して由兵衛にとりつく。由兵衛こらへかね、

由兵　なんにも知らずに。（ト背を擦らうとして源兵衛を見て、小梅を突放し。）縁切つたといふ證據の去狀、ナ去狀ぢや。

　　トわざと源兵衛へ聞かす。

小梅　これお前、此様な胴慾な心ぢやなかつたに。

由兵　飛鳥川の淵は瀬と、夜の間に變る男の心。

小梅　さあ私が心も。

由兵　なんにも言ふな、聞く耳持たぬ。

小梅　エ、私が心、什なら割つてお前に見せたいわいなあ。

由兵　そりや此の由兵衛も。いや未練な奴ぢや。

小梅　さうぢや。（ト由兵衛が脇差にて左の小指を切る。）

由兵　やあ〳〵、なんでこりや指切つた。

小梅　心中に。

由兵　や。

小梅　サア、お前に去られた上は是非がない、これから私も面當、藝者の時から心をかけて色々と口說いて下さんした源兵衛さん、今更女房に持つてと口で言うても得心して下さんすまい、それで心中に切つた此の指、源兵衛さんに見せて女夫になりまする。

由兵　すりや源兵衛に眞實の。

小梅　此の縁お前の構ひにやならぬ、此の去狀。

由兵　心中に指といひ。

小梅　よう縁切つて下さんした、惨い心の由兵衛殿ぢやもの、此の世ではお前の顔を見ませぬぞいな あ。

由兵　なんと。

小梅　私や源兵衛さんと、末長う添ひとげまする。

ト小梅去狀をもつて花道へ走りはひる。由兵衛見てつか〳〵と出で門口の柱によりつき向うをきつとながめほろりと泣く。此の内二階より源兵衛悦び勇みて下り來り、

源兵　えゝ忝い〳〵、これ〳〵由兵衛殿、今のを見ておりやほんに得心ぢや、こゝな結ぶの神の、南無由兵衛大明神さま〳〵。

ト外へ出ようとする。

由兵　源兵衛、男づくの約束、去狀やつた上はこちの望みの。

源兵　色紙か、小梅故なら色紙も身上も置いて行く。（ト色紙の箱を由兵衛に渡し、）おれはこゝにをるに、可愛やうろ〳〵尋ねて居やう、小梅ばうおゝい〳〵。

トうつゝの樣になつて花道へ走りはひる。奥バタ〳〵にて小三金五郎出て來り

金五　これ〳〵由兵衛殿、樣子を聞いたが思ひがけない。

小三　小梅殿をなんでそなたは。

由兵　ハテ女房の事はうつちやつて置かつしやりませ。それよりお悦びなされませ、小三樣お前の身請けもすつぱり濟んで年季の證文。（ト懐中より最前の證文を出し小三に渡す。）金五郎樣、色紙はやう〳〵無難に取返しました。

金五　えゝ忝い、小三が身請けといひ、此の色紙。

小三　皆由兵衛が志、なんと禮を言はうやら。

由兵　さういふ間に時がうつる、お二人共に其品を勘十郎樣へ御持參あつて金兵衛樣へ御執成、さすれば御身の言ひ譯け。

金五　そんなら此の色紙を一時も早う。

小三　勘十郎樣や金兵衛樣へ。

金五　由兵衛殿には。

由兵　後から參ります、さあお二人共。

金五　さうぢや、小三おぢや。

ト唄になり、金五郎小三を連れ色紙を持つて花道へ走りはひる。由兵衛後にてこなしあり、

由兵　あれでお二人の身の上、目出度く納まる上は。

と思入ある。此のところへ奥よりお君出で、

お君　由兵衛殿、まだ長吉はおじやらぬかいなあ。

由兵　打明けて得心さそうか。いや〳〵それではかへつて。

お君　まあ何所へ行きやつたのかいなあ、え〻長吉もわしが此の様に案じてゐるのに、ちつとまあ顔見せてたもつたがよいに。

由兵　なんぼ待つても長吉はな。

お君　まだ暇が要るかいなあ。

由兵　こりやもういつそおれが尋ねて來よう、む〻さうぢや。

ト身拵へする。此の内お君悦びいそ〳〵捨ゼリフの内納戸より小梅つか〳〵と出で、門の戸をぴつしやり閉めると、これより胡弓入りの合方になり、小梅後ろにて戸を押へ、由兵衛となし、お君思ひがけなく。

お君　小梅殿。

由兵　去つた女房立戻つて來たは。

小梅　由兵衛殿、名乘つて出やしやんすには及びませぬ。

由兵　なんと。

小梅　隅田川の渡場へ流れよつた弟の死骸。

お君　ヱ〻。（トびつくり）

由兵　その死骸の口に喰切りある小指、殺者の證據、これ。（ト左の小指を見せる。）

小梅　いえ、これ。（ト同じく左の小指を見せる。その手を取つて。）

由兵　さては最前切つた、そちが小指。

小梅　お前の替りに。

由兵　ヤ。（ト小梅を突放し、）下手人は此の由兵衛。

ト此の内お君由兵衛が顔を見てゐる。

お君　そんならあの長吉は。

由兵　大川端の屋敷前で、昨晩手にかけ殺して仕舞つた。」

お君　ヱ〻。（トびつくり、）

小梅　ハヽア。（トとりみだし大泣き。此の内始終合方、由兵衛佛壇より以前の手紙を取つて來て、）

由兵　淺次郎殿へ、姉小梅より。

兩人　えゝ、その文は。

由兵　金と一緒に持つてゐた。（トさつと開き下にゐて。）これ現在連れ添ふ女房の弟、淺次郎と聞いて、はをれどまだ逢はぬのが因果、昨晩手詰の金の工面に詮方なく思案工風も暗まぎれ、百兩所持する丁稚長吉、惡者共が手込めにするを片つぱしから追ひまくり、送つてやらうと先へ立ちお主の爲めの出來心、非道と知つて無理やりに貸さぬを酷う、死ぬる際まで此金は命づくというたは矢張り此の由兵衛へ、姉の頼み、これ此狀を取上げて知らぬ事とて胴慾に、二十三夜の月夜に死顔見れば小梅に生寫し、落ち散りし此の狀を拾うてびつくり、さては長吉というたは、であつたかと、思へば後の死骸の片付け、さし汐なれば大川へ心で水葬、せめて名乘つて出る淺次郎は、こりやなげきの言譯、殊にお君樣の心底最前二人が樣子、此の由兵衛は人殺しの仕置にあはぬその先に、心は死んでをるわいやい。

お君　小梅さん、由兵衛さんが長吉を殺したといなあ〳〵、わしやどうせう、長吉が死にやつたらなんとせう、これお前も弟の事ぢやないかいなあ、えゝ。

トこなしあつて由兵衛にとりつき、

お君　なんでお前は長吉を殺さしやんした、可愛さうに、まあ矢張此家へ來てゐるであらうと思うて知らぬ道を駈出して尋ねて來たも、逢ひたさ見たさ、それ殺したとはこちや厭ぢや〳〵、長吉に逢ひたい顔見たい、元のやうに長吉を賠うて返しや〳〵。

ト振袖にて由兵衛を叩き、又打伏して泣く。小梅こなしあつて、

小梅　お君樣、娘心の一筋に道理ぢや、道理でござんすわいなあ。あこれこちの人、覺悟を極めて死ぬるまで、お前に恨みを言ふまいと思うてゐたがたつた一言、えゝ聞えませぬわいなあ。

由兵　こりや何事も、金が敵とあきらめてくれ。

小梅　お主の爲めに弟一人、見かへはせねど恨みはこれまで、お前が弟に逢うてやつて下さんせぬ故互に顔を知らぬとて、さういふ事とは思はず疊の下から出た血まぶれなお前の小袖、こりや喧嘩さんしたかと外の案じに思はずも、隅田川の渡場より米屋の男が呼びに來て、行つて見てびつくり弟が死骸、その時私も氣を失うたわいなあ、あたりの人に世話になり心を靜めて死骸を見れば、口にくはへた小指の證據、殺者の詮議と泣き〳〵戻つて此の事を、言ふに言はれぬ着物の血潮、よもやと思へどお前の素振、酒にまぎらし試して見れば、左の小指切つてや

つたは色事と聞いて嬉しさ、さは言へ矢張疑うて、去狀とつて思案をきはめ、わしや弟の下
手人と覺悟極めてお前の樣子を。

ト取りつき泣くこなしあつて、

由兵　よい女房共お君樣、何をいうても詮ない繰言、此の上は後弔ふが肝心、その序に由兵衛も。

ト立上る。兩人兩方よりとりつく。由兵衛思入ある。

お君　そんならお前は。

由兵　由兵衛が嘸憎からう。

兩人　いえ、諦めてゐるわいなあ。

由兵　思へばまだ蕾の花の長吉を。

お君　殺す刃もお主の爲め、

由兵　夫思ひの、（ト兩人を引寄せ、）

三人　心を察して、空に春雨。

ト手をとりかはし泣く。此の内奥屏より長五郎窺ひ出て、

長五　長吉殺したは、いよ〳〵由兵衛、われを。（ト立廻り、）

お君　やあ惡者長五郎。

長五　最前のお君、おれが戀人。

ト君を引立てる。小梅さゝえる。此内花道バタ〳〵、金五郎色紙を持つて走り出で、

金五　コレ〳〵由兵衛、最前受取つた色紙は此通りの僞物、夫故勘十郎樣には以ての外のお腹立。

由兵　ヤヽヽヽヽ、（ト取つて見て、）誠に是は襖のまくり、さては源兵衛めが。

金五　それ計りぢやない、小三が身の上、道で待伏して伴五郎や源兵衛が、年季證文共にあちらへ奪
はれた。

由兵　すりや證文も小三樣も。

小梅　こちの人、お前の身の上より誠の色紙。

金五　小三が事も。

由兵　それ。（ト行かうとする。長五郎又かゝる。小梅金五郎立廻り、この内お君思入あつて、）

お君　南無阿彌阿佛〳〵々々。（ト自害する。）

皆々　ヤヽこれは。

お君　未來へ行つて長吉に。

皆々　それ程迄に。

長五　うぬを。（ト立廻りよろしく。）

小梅　これなう。（ト長五郎を押へる。）

由兵　なんでも源兵衛めを。

ト花道へ走りはひる。これにてよろしく

幕

本舞臺一面土手の模様、幕の内より由兵衛伴五郎を踏附け、十平次が手をねぢ上げ、源兵衛刀を拔きかけ、是を留めてゐる見得よろしく、踊り三味線早幕に幕あく。

源兵　由兵衛、小三を戻したりや言分あるまいがな。

由兵　いや小三樣を受取つても、まだ誠の色紙をこゝへ出せ。

ト突廻す。十平次振切り、伴五郎起上り。

源兵　色紙とは何を、最前われに渡したではないか。

由兵　そりや襖のまくり紙、菅家御正筆の手向山の色紙は、源兵衛うぬを始め伴五郎どぶ六、骨をひしいでも、出させにやならぬ。

源兵　イヽヤ知らぬ、色紙よりうぬを。

由兵　命の濟んだ梅の由兵衛。

トかゝるを一寸立廻り。此内より長五郎走り出で、

長五　やあ、みんな爰にゐるか。

源兵　長五郎、われも一緒に由兵衛めをけしてしまへ。

皆々　合點だ。

由兵　相手は嫌はぬ一くるめ、昔の商賣、さあ何處からでも。

皆々　こりや面白い。

ト四人を相手に面白き鳴物にて大立廻りになる。皆々寄つて由兵衛を舟へ打込む。起上り四人を泥の中へ打込む。源兵衛を引上げ懷中より色紙の箱を取出し。

由兵　これこそ誠の色紙、えゝ忝い。

まづ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

梅の由兵衛（終り）



敵討噂高松（かたきうちうはさのたかまつ）

# 敵討高砂松（研辰＝七幕）

志賀別荘の場
同城内門番所の場
同城門表先の場

## 序幕

**役名**　比良井市郎右衞門、唐崎九市郎、同才次郎、鳥賣忠七實は結城左衞門尉友宗、若殿本太郎、小主水、足輕曾平太、門番甚助、田那上運平、中間鮒助刑部宗勝、守山辰次。本田の姫夕照、侍女宮城野、腰元みどり、近習宅助、諸士運平、同雁平、其他諸士等。

本舞臺三間の二重、向ふ金襖、左右落間、後へ寄せて綿代屏、一面の萩の盛り、總て本田家志賀別莊の體、二重に褥を敷き、夕照姫、下げ髪、補襠にて住ひ、傍に腰元二人附添ひ居る、平舞臺に辰次、麻上下、大小にて控へ、鳥賣忠七、やつし頭巾、袖なし羽織、手甲脚絆、鳥賣りの荷を擔いで居る、此見得早舞にて幕あく。

辰次　コリヤ、鳥賣何處迄通るのぢや。

忠七　アヽ、モシ〳〵、其樣に仰せあらずとも、何卒商ひをさせて下さりませ。

辰次　聞きわけのない奴ぢや、ならぬと申すのに。

宮城　辰次樣、何やら賣物の樣にござりますが、何故おせり合ひなされまする。

辰次　イヤ、姫君を始め御家臣方お詰合居る處へ、鳥賣りの身として放し鳥をさせてくれいと、のほうづの願ひ、見苦しい、下りをらう。

忠七　イヤ、そのお叱りを返り見ず、押して願ふも商賣づく、實は商ひがいたしたいのでござります。

夕照　あの者は鳥賣とな、あの樣に賴む故幸ひの放生會、購めてやりたいなう。

宮城　畏りました。申し辰次樣、アノ鳥賣が姫君の御機嫌に叶ひました故、お引合せなされませいなア。

忠七　ヘイ〳〵、それは有難い仕合せにござります。お侍樣、そこをよろしう御願ひ申します。

辰次　コリヤヤイ鳥賣め、其方は仕合せな奴ぢや、今放生會をなされるとある故御前へ出やれ。

忠七　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。（ト揉手を仕ながら前へ出て）私は結城に住ひまする新米の鳥賣、忠七と申しまして毎度京都へ參りまする。私が差上げまする雀は、堅田邊で捕りまする故、囀りが違ひます、モウ雀賣りの開山ぢやと評判に預り、瀨田の忠七と異名を取つた、名物男でござります。

ト此時、下手より侍三人、麻上下大小にて出で來り、

運平　ハア、姫君これにお渡りでござりまするか。一大事の儀が出來いたしました。

軍平　刑部樣にも取りあへず。

鳩平　只今これへお越しでござります。

辰次　何、一大事差し起り、取敢へず刑部樣にも。

宮城　これへお越しなさるゝとは。

夕照　みづからが身に取つて。

皆々　お氣遣ひな事ではござりませぬか。

辰次　シテ〳〵、刑部樣には、何れへお越しなさるゝのぢや。（ト序の無になり、刑部、上下、大小にて出て來る。）

刑部　イヤ、刑部宗勝夫れへ乘つて夕照に對面せん。（ト荷を隅の方へ片附ける。）

忠七　コリヤ怪しからぬ御取込み。ドレ、何も片附て控へませう。

辰次　是は／＼刑部様には火急のお越し。

皆々　先／＼これへ。

刑部　罷通るハト二重へ上りあたりを見廻して）何は格別、夕照が身に取つての一大事故、取る物も取敢へずわざ／＼これ迄伺候いたした。

宮城　シテ、一大事と仰せられまするは、如何様の儀にござりまする。

刑部　ヲヽ、その儀は兼て武將家より、御媒介下されし儀に就き、高丸家より火急に館へ使者到着、先一旦は夕照病氣の願ひに寄り、今日迄輿入延引いたせしも、姫の病氣は虚病との取沙汰、是に依て先達て結納の代りに送り遣はしたる、鈴虫の香爐受取りあるべし、然らば急ぎ輿入れいたしてよからうと火急の使者、夕照返事はなんと／＼。

夕照　自は大切なる、願望のある身なれば故。

刑部　いやなれば猶の事、一刻半時も猶豫はならず、早々結納の印し高丸家へ返すより、外に思案はよもあるまじ、サア返答は、どうぢや、どうぢや。

夕照　たとひどの様にあらうとも、父上様のお國入り迄はなんと返事の仕様もなし、是非に及ばぬ此場の仕儀、これ宮城野、結納の香爐返してたも。

宮城　畏りました。（ト上座より箱を取り出し）ハヽア、左様なれば結納の香爐御返上申しまする。

刑部　イヤ、大切なる品故に、一寸改めて。

宮城　御尤、姫君様、憚りながら。（ト宮城野、箱を出し、姫君あけて見て。）

夕照　ヤア、コリヤ大切な。（トびつくりする、刑部是に目を附け。）

刑部　香爐が如何いたした。

夕照　サア。

宮城　どうあそばしたぞ。

夕照　コリヤ、此中には。

刑部　何にもせよ。（ト見てびつくりなし。）誠にこりやいつの間にか、紛失いたした。

辰次　鈴虫の香爐は高丸家の重寶、紛失したとばかりでは事はすまぬ、ハテ笑止千萬。

刑部　何にもせよ、合點のゆかぬ寶の紛失、さつする處某が領分を徘徊なす、品田藤藏といへる盜賊の仕業にてはあらざるか。（ト姫こなしあって。）

夕照　さうぢや。（ト懐剣にて死なうとする。）

宮城　コリヤ、何故の御生害。

夕照　何故とは、大切なる香爐を失ひしも皆自が誤り故。

宮城　ヱヽ、御短氣な姫君様、妾にお任せなされませ。

夕照　それぢやというて。

皆々　マア〳〵、お待ちなされませ。（ト留める、此時奥にて。）

本太　ヤア、面倒な、放せ〳〵。

皆々　先づ〳〵、お待ちあそばしませ。

ト早舞にて、奥より小主水、麻上下、眉間に疵を受け逃げ出る、諸士留めながら出る、若殿本太郎、袴ばかりにて脇差を引提げ、小主水を追ひながら出る、後から諸士、○△□の三人、麻上下、大小にて附添ひ、止めながら出る。

本太　憎い小主水、ウヌ眞二ツ。

皆々　先づ〳〵、お留りあられませう。

トいろ〳〵留めるのを振拂ひ、花道へ追って行く。此時、花道より、唐崎九市郎、上下、大小にて出で來り、能き所にて本太郎をきっと留め、

九市　殿、恐れ乍ら、先〳〵。（ト留る、若殿きっとなって九市郎を見て。）

本太　ムヽ、そちや唐崎九市郎、予に向つて無禮の留立て、過言の小主水打ち放す、そこ退け〳〵。

九市　イヤ〳〵、お留めは申さねど、御手づから御佩刀を抜き放し、御手討ちとは餘りの一興、小主水が過言の罪科、逐一九市郎承り、事を糺すは身不肖なれ共家來の役目、先づ〳〵お待ちなされませ。

ト本舞臺へ押戻す、若殿きっとなって、

本太　主從の禮を輕んじ慮外の諫言、それぢやに依て。

九市　スリヤ、君に向つて慮外の御諫言申せし故に。

本太　手討にする、爰放せ〳〵。

九市　イヤ、先づお待ちなされませ、小主水が罪の次第、何卒拙者めに、御聞かせ下さりませ。

本太　ヲヽ、如何にも申し聞かさう、予が思ひ立つたる當所唐崎の明神の社頭殘らず取拂ひ、一本松を庭木に取寄せる樣申附けたる、奉行の役目を承引せざるのみならず、予に詞を返す不屆者。

小主　ハツ、一旦の御諚、返し奉るには恐れながら當所唐崎明神は、お國名譽の靈地、殊更松は日本の名木、もしや御家にお祟りもあらんかと、夫故若輩の拙者なれども、此儀をもつての御諫言。

本太　ヤア、たとひ靈地明神たりとも予は當國の主人、一旦申出せし予が詞、此の儘にさしおかば政

道の表面白からず。それ故討放す、九市郎、そこ退け〳〵。

**九市** 御諫言を奉るは御家の爲、良藥は口に苦し、御用ひなく御手討にあはゞ武士の面目兼ての覺悟、一命惜む小主水でもござるまい、此上は拙者も御手討の御相伴に預りませう。サア、すつぱりとあそばせ〳〵。（ト前へ出る。）

**本太** ヤア、不敵の一言、その方も手討にいたす、覺悟いたせ。

**夕照** 兄上には。

**皆々** お待ちあそばされませう。（ト女形皆々、本太郎を留める、諸士は小主水をかばうて。）

**諸士** お逃げなされい〳〵。

ト立役、皆々本太郎を隔てる。敵役は小主水をわざと本太郎の方へ突きやる。此立廻りの中に本太郎はいらつて斬つて行く　此とたん下手にある鳥籠を斬る、本雀澤山飛び出す、皆々びつくりなし。

**皆々** これは。（ト空を見上げる。九市郎きつと見て）

**九市** 天晴。

**本太** ム、。

**九市** 本太郎樣の御手にかゝり、籠中を退れし數多の小鳥、御手討よりは放生會、實に大度の御計ひ、有難う存じまする。

**本太** 命冥加な籠の鳥、羽交ひ伸して、飛び去りをらう。

**九市** ハア、有難うお受け召され。

**小主** ハア、有難う存じ奉りまする。（ト平伏する、忠七、思入あつて向うへ出て。）

**忠七** ヤレ〳〵、恐ろしや〳〵、すんでの事に、オ、恐や。（ト身震ひをする。）

**運平** ヤイ〳〵、うぬは最前の鳥賣め、まだそれにおつたか。

**忠七** おつたかとは胴慾な、商ひを仕かけた處が、方々ともめが出來、片隅へ寄つて居たが、納りがつきまして、御目出たう存じまする、つまらぬのはこつちでござります、雀には逃げられ籠はくだかれ、併し放生會の代物は戴いて歸りたうござります。

**九市** ム、、スリヤ只今放せし小鳥はその方が代物とな。

**忠七** ハイ〳〵、私のでございます。

**九市** シテ〳〵、代物は何程ぢや。

**忠七** イヤ、何程と申しますより私は、若殿樣よりお受取申したいものがございます。

**本太** 何、町人、予が手から受取りたきものがあるとな。

忠七　へイ〳〵、それ、あなたのお首が申し受たうどさります。

本太　ヤ、なんと。

忠七　只今も一寸聞いてをりますれば、なんぼ神様は見通しでも、ものおつしやらんと申しましても、無法の我儘、異見する者は手討にすると、なんぼ下の者ぢやとて、輕々しう瓜か茄子見る様に、御成敗にもなりますまい、商ひの代物もそつちの手から籠をくだき、放しておしまひなされしからは、取り返しがなりませぬ、それぢやに依て代物代りに貰うて歸るあなたのお首、無理か尤か、よもや無理ではござりますまい。

ト一々本太郎に當て付けて言ふ、九市郎感心なせし體、本太郎は理に詰り。

本太　ム、。

刑部　ヤイ〳〵、ウヌ素町人め、本太郎殿に向ひ樣々との世迷ひ言、扨はウヌも品田藤藏が同類の者よな。

辰次　ソレ何れも、繩打ち召され。

運平　心得ました。腕まはせ。

鴈平

忠七　コリヤまたあんまり。（ト立廻って兩人忠七をねぢ上る、忠七きつとなつて。）上使。

皆々　何と。

忠七　上使へ手向ひ、慮外であらうぞ。（ト兩人を投げ退けてきつとなる、九市郎こなしあつて。）

九市　ハテ、存ぜぬ事とて種々の無禮、眞平御高免下されませう、何は格別御上使とあれば。

皆々　先づ〳〵是へ。

忠七　役目の儀なれば罷り通る。（ト二重の上手へ行く。）

九市　思ひがけなきこの別莊へ御入來、シテ、あなた樣は何れよりの御上使。

忠七　鎌倉武將より直の嚴命。

九市　スリヤ、武將より直の御上使とな。

忠七　此場の一件、逐一見聞きいたしたれば、改めて上意を述ぶるに及ばず、粟津高丸とも長き因みにて、上意をもつて姫が緣邊、今に輿入延引の沙汰といひ、此返答が承りたい。

九市　ハア、その儀に就ては。

刑部　アイヤ九市郎、疎略の返答無用に召され、町人の分際で此場で聞きし口寫し、かたりの正體、何と不敵の者ぢやござらぬか。

辰次　御上使入來の式作法は、夫れ〳〵禮儀のあるもの、衣類は元より一刀も帶せず、ましてや本城

へ参るべきを、却て此別荘へ來りしはかたりの正銘。

運平　いかさま、先觸れの案内もせず。

辰次　イヤ〳〵御兩所、その性名は拙者最前承り居るが、確か雀の忠七とやら。

運平　何、御上使の性名が。

鴈平　あの雀の。

軍平　忠七とナ。

辰次　イヤモウ、舌を斬られて飛びさうな名前ではござらぬか。

運平　なか〳〵左樣でござる。

皆々　ハ、、、、、。

本太　ヤア、皆の者まだるい穿鑿、此本太郎を欺かんと不敵の曲者下れ〳〵、エ、、此座を早く下りおらう。

忠七　ム、、スリヤ忠七を。

本太　ウヌ、下賤の身を以て、同席恐れぬうづ虫め、本太郎が手の内、骨身にきつとこたへたか。

ト扇にて打つてかゝるを突廻し、二重に腰をかけ。

忠七　斯く姿を變へて來りしは當初の實否を探らん爲、穩密の役目、疑はしくば此奉書、愼んで拜見召され。

九市　何、御奉書とナ。（ト立寄るを本太郎、二重より奉書を引ったくり、引き裂く。）

本太　僞筆の奉書持つて歸れ。（ト平舞臺へ投る、辰次こなしあつて。）

辰次　ふて〳〵しいかたりの上使、ソレ何れも門前よりたゝき出さつしやれ。

運平　心得ました、かたりの烏賣り、キリ〳〵此場を。

皆々　立つて失せう。

忠七　歸つてよくば此方より。

皆々　キリ〳〵失せう。

忠七　ム、。（トこなしあつて、花道へそろ〳〵行きかける。此内九市郎奉書の破れを引寄せ、びつくりして、忠七へ目を付け。）

九市　御上使待つた。（ト忠七聞かぬふりをして行きかける。）イヤサ、鎌倉武將の嚴命に依て、御發駕ありし誠の上使。

忠七　ヤ、何と。

九市　結城左衞門尉友宗様には上使の御役目、御苦勞千萬に存じまする。

忠七　ム、、さすがは忠臣。（ト正面を向き引抜く、是にて、麻上下になり、荷の中より大小を出し。）友宗が家來、早まゐれ。（ト是にて家來花道より出る。）

本太　スリヤ、匹夫下郎と思ひの外。

刑部　當時鎌倉武將の直參。

辰次　結城左衞門友宗様とは。

敵役　アノ、雀の忠七か。

皆々

九市　御先君、忠勝公の郎等、結城三郎殿の末葉。

辰次　何は格別、御上使様には。

九市　先づ〳〵、是へ。

皆々　御通りあられませう。

忠七　役目の表、上座許しめされい。（ト太鼓、謠になり、靜々と二重に上り。）當家へ對して舊緣の某此度の役目を受け、姿を變へて來りしは事穩便に計らはんが爲。

刑部　ソレ御上使へ御詫び〳〵。

辰次　ハア、思ひも寄らぬ御入來故、殿を初め我々一同疎略の段、眞平御免下さりませうなれば。

皆々　有難う存じまする。

忠七　詫びて返らぬ此場の急難、武將の嚴命役目の某、先づ差當つての不調法は君の御手づから御判をすへて、御認めありし大切の御奉書を、引裂き捨しは本太郎殿一生の不覺。

九市　アイヤ、その儀に就きましては、憚りながら眼前御上使様へ此身一つを。イヤサ若殿、此身一つに此場の次第、何卒仰せつけて下さりませうなれば、有難う存じまする。

本太　ム、、九市郎、承知いたした。

九市　スリヤ御承知下されしとナ。

本太　今こそ汝がすゝめに任せん。

九市　左様ござれば。

本太　此場の一件、よきに計らへ。（ト本太郎は、近習共を引連れ、奥へはひる。）

九市　アイヤ、殿、御退座下されては。（ト立上るを、忠七隔てゝ。）

忠七　イヤ待て九市郎、聞きしに增る亂法狼藉、此儘武將の御前へ。評議の上にて後日の沙汰、其方きつと承知であらう。

九市　スリヤ、遙々と御到着ありし、御役目も思はずに。
刑部　武將の御前へあからさまに言上あれば。
辰次　悔んで返らぬ本太郎樣、御上使樣の御情にて。
三人　返答の御猶豫を。
皆々　願はしう存じまする。
忠七　上意の次第は格別、君の御奉書引裂き捨てし卽座の返答。
九市　その申譯こそ御願ひ申せし拙者が身の上、一旦失ひし寶なれど詮議仕出し差し上げませう。
忠七　スリヤ其方が寶の詮議を。
九市　及ばずながら拙者めが、思ふ仔細もござりまするば。
忠七　然らば卽刻此座を去らず。
九市　紛して御目をかけませう。
刑部　九市郎、スリヤ寶の在所を。
九市　只今紛して御目にかけませう。御上使御免。イヤ何、守山辰次殿。
辰次　何でござる。
九市　田那上運平殿。
運平　御用かな。
九市　御兩所共一寸是へ。
辰次　スリヤ身共に。
運平　アノ、手前も。
九市　如何にも。（ト合方になり、九市郎は眞中に、辰次上手に、運平下手に座し。）
辰次　唐崎九市郎、呼び出し召されたは、
運平　用ばし、
兩人　ござつてかな。
九市　サア、御兩所共高丸家の重寶鈴虫の香爐、紛失なしたるその行衞、眞直ぐに白狀めされ。
辰次　ヤア默りをらう九市郎、御手前は何を見つけ何を證據に身共等へ對し餘りの過言、寶の行衞白狀とは何のたは言、氣でも違うたか、結納の寶紛失せしは姫君の誤り、身共は知らぬ、それに盜んだとは、何ぞ慥かな證據があるか。（トきつと言ふ。）
刑部　九市郎殿、辰次を名さして盜賊呼はり、其身の明りを立てようとは、コリヤちと卑怯であらう

ぞ。

九市　アイヤ刑部様、明りが立たうが立つまいが、理非明白に糺さんとする九市郎が此場の詮議、其許様にはおかまひなく、暫時お控へ下されい。

刑部　然らば、控へて見物いたさう。（ト九市郎、小さき六角の箱を出し、文を添へて前に置き、箱の蓋を開き。）

九市　サア兩人、此品能く存じて居ようが。

辰次　ヤアそれは。

運平

九市　よも知らぬとは言はれまい、斯ういふ事に心を碎きし甲斐あつて、昨日多賀領見物の歸るさに、不思議に手に入る此一品、若殿本太郎様を調伏なし、御短慮の御病氣募らせんとの空恐ろしき企みの段々、家の寶を破却させその虚に乘じてお家をば、横領成就の上は、大金を出だすと雷雲へ卽諸の此一書、一々記せし性名を此處にて讀み上げようか。

辰次　サア、それは。

運平

九市　言譯あるか。

辰次　サア〳〵。

運平

九市　何と動きはとれまいがな。（トきつと言ふ、兩人顏見合せて。）

辰次　ム、。モウ是非に及ばぬ。（ト兩人して斬ってかゝる。九市郎留めて見得。）

運平　コリヤ、我々も。（ト其中へ斬込む。辰次上手へヒヨロ〳〵となり、倒れる。）

鴈平

刑部　エ、。（ト九市郎を目がけ手裏劍を打つ。九市郎は軍平を引廻して受留める、軍平アット言つて倒れる、刑部思はず刀を引提げ立上る。忠七是れをよろしく留める。九市郎兩人と立廻り。）

九市　ソレ、小主水。

小主　心得ました。（ト押へる。九市郎三人を下緒にてくゝる。三方一時になり。）

九市　御上使御檢分あられしか、詮議のつるを得ましたれば暫時の御猶豫、是非共御上使のお情にて。

忠七　如何にも緣邊の儀は、寶が出づれば迫て吉日良辰を選み、速かに事の納る道理、納め難きは本太郎殿、御奉書を破られし、此返答は如何いたす。

九市　その儀も後刻迄暫時の御容赦、召捕りし兩人は大切なる詮議のおとり、後方迄きつと糺明、御上使様には奥殿へ、御入りあつて御休息。

忠七　詞に從ひ、兎も角も。

九市　女中方はおもてなしを。」

忠七　然らば、各々。

九市　御上使様。

忠七　刑部殿。

刑部　先づ御入り、

皆々　あられませう。

ト唄になり、忠七先に九市郎附添ひ、皆々奥へはひる。小主水は運平を、立役の侍一人は厲平を、双方引立てはひる、刑部奥を窺ひて平舞臺へ下りる。下手より曾平太出る。

曾平　刑部様。

刑部　コリヤ、曾平太今の様子を。

曾平　何も彼も、小蔭にてとつくりと。

刑部　先づ辰次から介抱を。

曾平　心得ました、ヱヽ、此様は見られた事かえ。（ト辰次を引起し、活を入れようとする。）

辰次　ヲツト曾平太、活には及ばぬ、モウよい、モウよい。

曾平　ム、、御安泰に渡らせ給ふか。

辰次　渡らせ給ふ處かい、當てられたと見せたは身共が奥の手、ずんと健に渡らせ給ふ、併しあの九市郎といふ奴は、油斷のならぬ小癪者。

刑部　生けて置いては後日の妨げ、いつそ一思ひと打かけし身共が小柄。

辰次　狙ひは逸れて軍八めが、無慚の最期。

刑部　彼奴も一味の端しくれなれば、せめて死骸を。

曾平　身共が剛染甲斐に葬つてくれよう。（ト軍平の傍へ寄る。軍平飛び起きる。）

軍平　ア、めつさうな、葬られてたまるものか。

辰次　ハア、是も奥の手をやりおつたな。

軍平　そこらはぬかつてよいものか。

刑部　シテ、彼の儀はどうぢや。

曾平　松倉卿の短刀、イザ、お受取り下され。（ト懐中より袋入の短刀を出し。）

辰次　目利は身共が御手のもの。

刑部　曾平太出かした、よく仕果せた。

曾平　イヤ、何に寄らず執念かけた上からは、いやでも應でも手取らにやおかぬ此曾平太。

刑部　時に曾平太、その手並を見込む上は、今一色申し付け度き一大事、使者の間にて何かの密談。

辰次　マア、それ迄は刑部樣。

曾平　何なり共、承りませう。

刑部　然らば、辰次。

辰次　先づござりませ。（ト唄になり、刑部初め皆々奥へはひる。引き違へて腰元みどり出る。）

みど　ほんにマア此頃は何やら御用が多いので、文認める間もない忙しさ、幸ひ爰は密かな所、ちやつとこの間に、さうぢや〳〵。

ト硯引き寄せ、文を書きはじめる。此時奥にて、人の足音する故、手早く文を仕舞ひ。

みど　斯うしてお屆け申したら、よもや御返事のない事はあるまい、アノ胴慾な才次郎樣、エ、モウ辛氣な事ぢやわいなア。（ト此内奥より曾平太出て來て見て居る。）

曾平　我等とても御返事のない故に、テモマア、辛氣な事ぢやわいなア。（ト前へ出る、みどり見て。）

みど　ヲ、お前は曾平太樣かいなア。

曾平　曾平太樣かいなアとはどうしたものだ、餘り辛氣な御返事ぢやないか。

みど　ドレ私は奥へ。

曾平　オットどつこい、手放してたまるものか。（ト振袖を引張る。）

みど　エ、、又かいなア。

曾平　又かいなアとは胴慾な、コレみどり。みどり坊。一寸下に居なさんせいなア。

ト無理に引張り座らせる。曾平太こなしあつて、なまめきたる合方になり。

曾平　今更言ふのも愚痴なれども、大抵色事師のお定りぢや、言はぬ事は聞えぬが、全體身共が御當家へ御奉公にありついたは何の爲、三井寺へ御代參の時フツト見染しが惡緣にて、契り深しの橋渡しで、世話してくれたあの甚助、お前の親仁であらうとは夢にも知らぬ盜人の晝寢、ぐつたりやらかしてのらりくらりと門番の、家へ出かけて行つた時に、丁度お前がお宿下りして居たを見て、一倍思ひが增して來た、晝は幻、夜は夢、現にも忘られぬ思ひの種、胸の苦しさみどり殿、推量してくれたがよい。（ト みどりはうるさいといふ思入。）

みど　エ、あたきらひな、あたすかん不作法な事、父さんに告げるぞえ。

曾平　イヤモウ、告げられても責められても、斯うなつたらいつその事、殺されたが本望ぢや、顏見てはどうもこたへられぬ。（ト みどりに寄る。）

みど　アレ、悪い事して下さんすなア。

ト突退け逃げんとする。此内甚助、油さしを持つて出る。曾平太はみどりと取り遮へ、甚助を捕へ。

曾平　イヤモウ、悪い事でも良い事でも、斯うなつたらやけくそぢや。

ト甚助を押倒す。此時、油さしを落す故、曾平太滑りべつたり座る。甚助も滑りかけて。

甚助　どつこい。（ト踏みこたへる、みどりは見て。）

みど　お前は父さん、好い處へ。

曾平　ヤア、甚助か。（ト言はうとして。）どつこいしよ。（トべつたり下に居る。）

甚助　ヲ、甚助ぢや、コリヤ娘を捕へてどうさつしやる。

曾平　イヤ甚助殿、こなたの口からさう打割つてあらはにものを言ひかけりや、こつちも一番言はやならぬ。恥かしながらみどりに惚れた、改めて甚助殿、得心させて女房に貰ひたい。

ト甚助あきれしこなしあつて。

甚助　ヱ、あなたはまアあきれたものぢや、ようまアそんな事が言はれたものぢや、又娘も曾平太殿が斯ういふしだらと俺の耳に入れておけばよいものを。

みど　さいなア、外の事ならお耳にも入れまするが、あなたの無理な事故に、ツイ案じ過して言はなんだわいな。

甚助　ム、、さうか〳〵。イヤ何事も俺が胸にあれば案じぬがよい、サア爰に居ては悪い故ちやつと奥へ行つて、御用を聞きや。

みど　ハイ〳〵、左樣なら此後共悪い事をしやさんせぬ樣、おつしやつて下さりませいなア。

甚助　サア、よいと申すに、早く行け。

みど　ドレ、私は奥へ。

曾平　ヤア。

みど　御用を聞きませうか。（ト唄になり、みどり奥へはひる、曾平太腹の立つこなし。）

曾平　サア、甚助どうだ、いよ〳〵娘を女房にくれるか、但しは不得心か。

甚助　マア、いやぢや。

曾平　何と。

甚助　咽元過ぐればあつさを忘るゝと、こなたは大分地金を出さつしやるなう、親御樣は斯う悪うは産み附けはさつしやるまい、見下げ果てた其根性、こなたも元は長崎の郷士、惣左衛門樣の御惣領に産れ、こなたに乳を進ぜた乳母と言ふは此甚助が妹、こなたは大切な和子、成人する

に隨ひ有りとあらゆる惡黨業、大津の追分で雲助と迄成り下り、御流浪なさるがおいとしさに、一昨年の冬私がお組頭にお願ひ申して御奉公、それよりしても朋輩衆と喧嘩ばかり、それは私が後へ廻りお詫をすればこそよけれ、大抵の事ぢやござりませぬぞ、それを忘れて娘へ戀慕、此上無法を働けば、お組へ斷つて御門前からたゝき出さうか、以後はきつとたしなまつしやれ。

トきつと言ふ、曾平太こなしあつて。

曾平　イヤ、ゑらいものぢや、甚助わりやアモウ言ふ事はないか、娘をくれずばくれぬでよいが、コレ大恩のある宗左衛門様の若旦那曾平太様ぢや、三拜して娘をくれべきに、それを其様に申すとは事の外なる其心底、是非共娘は俺が貰ふぞ。

甚助　イヤ、どの様に言へばとてお家に仇なす惡人、殊に寶に望みをかける盜賊、何しに娘をやらるるものか。（ト是にて、曾平太むつとせしこなし。）

曾平　ヤア、だまりやアがれ、御家に仇なす大惡人とは何の事だ、それに又盜賊呼はり、何を證據に申すのぢや。

甚助　ヲヽ、盜賊といふ證據は紅葉山にて、そちが懷中より落たる密書。（ト密書を出し。）

曾平　ヤア、それは。

甚助　何と曾平太、盜賊と云うたが此甚助の誤りか。

曾平　イヽヤ、身共その密書覺えはない。

甚助　其覺えなきものが、名宛に長濱曾平太殿とは何で書いてある。

曾平　サア、その名宛は。

甚助　是ぢやに依て盜賊に、娘はやらぬと云うたのぢや、それが何とした。」

曾平　サア、それは。

甚助　お組頭へ持つて出ようか。

曾平　サア、それは。

甚助　御吟味を願はうか。

曾平　サア〳〵〳〵。

甚助　よもや言譯はあるまいがな。（トきつと言ふ、曾平太むつとして。）

曾平　ム、、その言譯は。（ト拔打に斬つてかゝる、甚助是を留め。）

甚助　どつこい、さう味くはさせぬぞ、手前達の一人や二人苦にするものか、一合取つても武士の端

くれ、あのこゝな恩知らずめが。（ト突き放し。）

曾平　ヱヽ、さうぬかしやア。（ト又斬りにかゝる。甚助刀をたたき落し、頸髪取つて、ぐつと引き附け。）

甚助　コリヤ、うぬがいくらじたばたしてもモウ叶はぬ、此悪黨故に見限つた、宗左衛門様は御尤も、いがみくさつたその手の内では、めつたに人は斬れまい、及ばぬ事だ叶はぬ事だ。

（ト引き起し、拔身を引つたくりポンと當てゝ。）

甚助　人外めが。（ト きつとこなし、曾平太はそのまゝどつさり、甚助は密書を見て。）此の密書の様子では、大それた科人、併し此位ひに異見の杖加へたれば思案も附かう、御組頭に差出すべき此書面なれど、暫時様子を見居けて、無事に双方納まれば浪風立たぬ御家は萬歳、ドレ御番を仕よう。

（ト唄になり、甚助下手へはひる。後合方にて曾平太起上りいろ〳〵こなし、此時、上手より鮒助、あわただしく走り出で、曾平太を見て。）

鮒助　曾平太様ぢやどさりませぬか。

曾平　そちや鮒助か、アイタ、ヽヽ。（ト脇腹を押へ。）何ぞ用事か。

鮒助　イヤ外の事でもどさりませぬが、代参戻りの御家老を待ち受けて討取る手筈、最早彼是時刻なれば。

曾平　ヲヽ、そりや承知ぢや。

鮒助　承知なれば、早う御出なされませ。（ト手を、取りにかゝる。）

曾平　アイタ、アイタ。（ト下に居る。）

鮒助　何だ、コリヤどうなされましたのぢや。

曾平　イヤモウ、息がはづんでものが云へぬ。（ト鮒助を招く。鮒助心得て。）

鮒助　ヱヽ、耳かな。（ト是にて囁く。）スリヤ、門番の甚助を。

曾平　コリヤ。（ト又囁く。）

鮒助　成程々々、コリヤ生かしては置かれぬ奴ぢや。

曾平　ぢやに依て。

鮒助　血祭りに殺した上。（ト大聲にて言ふ。）

曾平　コリヤ。（ト思はず押へて。）アイタ、ヽヽ。（トべつたり下に居る、鮒助口を押へる。道具廻る。）

本舞臺平舞臺。見附三間の間城門の心にて、丸家根の扉に小門有て出這入り、大門には柵を入れてあり。東西高石垣。土手の上は塀の裏門脇。上手に瓦家根、板びさしの番小屋、折廻し屋體、白張りの幕を張り、見附て唐紙襖、屋體に黒落しの番所行燈、突棒、刺股、切手桶、六尺棒等あり、右二重に甚助、角行燈に火を燈し、板對立の影にて、楊枝を削つてゐる。本釣鐘、合方にて道具留る

甚助　ドレ〳〵一服仕ようか、只居ようより手を動せば今日の煙草代丈は取れる、氣兼なしに一服やらうか。（ト煙草を呑む、花道より曾平太先に、運平尻からげ頬冠りにて出て、後より鮒助出で、番小屋を窺ふ。）

鮒助　曾平太様。

運平　たしかにあれが甚助の。

曾平　コレ。（ト押へて。）何分身共が合圖する迄、けどられぬ様忍び寄つて、合點か。

運平　承知ぢやが、鮒助あわてゝぼろを出すな。

鮒助　何、お前様こそぼろを出さぬ様になされませ。

曾平　そんならわれ達は後から來やれ。

鮒助　氣遣はずとお出なされませ。

ト是にて、曾平太本舞臺へ來り、尻からげを下して頬冠りを取る。此時、小門の外より、近習宅助合印の弓張を持ち、番所の前に來て。

宅助　御門番殿、御大儀。

甚助　ヲ、宅助、歸りやつたか。

宅助　やう〳〵、今歸りました。

甚助　さうかいの。

ト言ひながら曾平太と入れ違ひ、花道へはひらうとする故、運平、鮒助、提灯を見て惡い〳〵とゝふ思入あつて後しさりして小屋へはひる。宅助は何心なく花道へはひる。兩人は小屋の中にて行き違ひたる思入にて、出で來り窺ふ。曾平太、揉み手をしながら、

曾平　モシ〳〵、甚助さま。（ト進み寄り傍へ行く。甚助、すかし見て。）

甚助　ヲ、こなたは曾平太殿。

曾平　ハイ、曾平太めにござります、先程はお有難う存じまする。

甚助　扨は性根に入りましたかの。

曾平　イヤモウ、こなたの段々との異見がたつた今合點が行きました、それ故お禮に出て來ました。

甚助　何もお禮を受けようとてするのぢやござんせぬ、心さへ直つたら悦びます、マア〳〵爰へかけさつしやれ。

曾平　左様ならお許しなされて下さりまするか。（ト屋體の端に腰をかける。甚助こなしあつて。）

甚助　是はしたり、何ぼぢきに魂が入れ替つたとて、その様に慇懃にせいでもよいぢやないか、マ

アこつちへ、上つたがよい。

曾平　ヘイ〳〵、今迄は大きに了間違ひをやらかしました、ほんに私の様な者をお世話下されたのも忘れ、こなたの娘に懇を仕かけ悪い事を仕ましたが、モウ〳〵ふツつり思ひ切りました程に、御了簡して下さりませ。（ト言ひ乍ら、曾平太は、煙管を口にくはへ、様子を見てゐる。）

曾平　コレ、甚助殿、向後性根を入れかへる程に、何卒最前の物をば。

甚助　ム、、最前の物とは。

曾平　こちらへ戻して下されませぬか。

甚助　ハ、ア、最前の物とは大方。（ト以前の密書を出し。）此密書の事であらう。

曾平　左様〳〵、さつぱりと魂を入れ替へました故、それを戻して下さりませ。

甚助　成程、魂さへ入れ替へたら。イヤ〳〵あんまり早過る、受取り憎い、マアうかつには渡されぬ。

曾平　そんなら是程頼んでも。

甚助　お前の口から魂を入れ替へたと言はず、人から言はれる様にさんせ、その時には戻して進ぜう。

曾平　スリヤどうあつても今すぐには。

甚助　味い事を、言ふ人ぢやなア。（ト是にて曾平太、むつとせしこなし。）

曾平　ェ、おきやアがれ、その密書をうぬに持せておいては、夜がゆつくり寝られぬ故、返さぬといふて取らずにおかうか。（ト此時、運平、鮒助、よいかといふ思入、曾平太兩人に。）ソレ。

運平　合點ぢや。（ト兩人甚助にかゝるを拂ひ退け。）

鮒助

甚助　コリヤわいらは何とする。

曾平　こま言ぬかさず密書を渡せ。

ト是にて密書を引張り、いろ〳〵立廻りあつて、トド運平は鐵行燈を打ち返す。鮒助は番行燈を倒す。双方共消える。くらがりに成る。

甚助　南無三、燈火を。

ト曾平太抜いて甚助へ斬りかゝる。是にて甚助六尺棒を持て受ける。鮒助、運平、火鉢の灰をかぶる。曾平太鐵行燈の火袋の中へ首を突込み眞黒になり、双方見すかし、三方共一時の見得、忍び三重の合方にて此道具廻る。

本舞臺城門の裏手、東西石垣、高塀、本釣鐘にて道具留る。ト花道より小主水、着附上下、大小にて、提灯を持ち出で來り。

小主　最早あれは瀬田の御門、少しも早う、さうぢや、〳〵。

ト本舞臺へ來る。バタ〳〵にて小門の中より鮒助、運平拔身にて逃げ出る、提灯に行き當りびつくりしてたゝきおとさうとする。小主水きつとなり提灯にて顏を見ようとする。兩人は見せまいとする。トバ鮒助提灯を切落す。運平斬込むを小主水扇にて打拂ひ、片手にて鮒助を引き付ける。此立廻りよき見得にて此道具廻る。

本舞臺元の道具に戻る。ト曾平太斬付けてゐ、甚助六尺棒にて留めてゐる。是よりくらがりの探り合ひいろ〳〵立廻つて、トド曾平太は甚助の肩先に斬付る。甚助へたる。曾平太たゝみかけて斬込まうとする。甚助六尺棒にてめつた打に打つ。此見得にて道具廻る。

本舞臺元の裏門の道具になる。ト小主水鮒助運平を相手にくらがりの立廻り。トド扇にて鮒助の刀をたゝき落す。鮒助は上手へ逃げてはひる。運平斬つてかゝる。トド小門の處へ押しやられ、運平門の中にころげ込む。小主水續いてはひらうとするを、運平内より戸を押へて居る。此見得よろしく道具廻る。

本舞臺又元の道具になる。ト曾平太、甚助に乘りかゝり密書を取りとどめを刺してゐる。運平は小門のくらがりの内より扉を押へてゐる。甚助は苦む、是にて運平は「さては」といふ思入あつて扉の手を放す。小主水はひる。運平を捕へようとする。此物音に曾平太逃げようとする。小主水は曾平太と渡り合ふ。此時市郎右衞門ぶつさき野袴にて家來に提灯を持たせ入り來る。曾平太は提灯を斬つて落す。市郎右衞門曾平太を捕へ、

市郎　曲者。（ト曾平太の小腕を取り、見事に投げるを木の頭。）とつた。

ト早縄をたぐる。家來は震へてゐる。小主水は運平を引付ける。此見得よろしく、早き合方、風の音にて、

ひやうし　幕

## 二幕目

粟津本城の場

**役名**　比良井市郎右衞門、唐崎九市郎、同才次郎、若殿本太郎、結城左衞門尉友宗、足輕曾平太、守山辰次、刑部宗勝、中間鮒助、中間琵琶平、走井文吾、鼻之丞、市郎右衞門妹おらん、奥女中みどり、諸士軍平、同雁平、同三藏、同藤助、番人二人、近習二人等。

本舞臺平舞臺。黒幕、一面の石垣、土手通り矢切りを見せ、所々に蘆原の茂み。松の釣枝、立木、此後ろに土藏を見せ、すべて江州瀬田口の體、七ツの鐘、合方にて幕あく。ト花道より中間琵琶平

柿の脚絆、胸當をして、小田原提灯を提げ出て來り、花道にて、

琵琶　あの鐘は七ツだな、コリヤひどく遲くなつたわえ。（ト言ひながら本舞臺へ來り。）ハヽア、爰は何處だ。（ト提灯にてあたりを見て　南無三寶は[illegible]山口御寶藏前裏通り、コリヤ道をとつぱぐつてとんだ所へ、ハテ、コリヤ變だわえ、斯ういふ時には魂を臍の下へ落し附て、先づ一服煙草でも。（ト此時落ちてありし、鑑札に氣附き）なんだ妙なものが。（ト袋を取り見て）　コリヤ御門出入の鑑札だ。（ト鑑札を見て）

守山辰次組下坂口部屋鮒助。扨は彼奴めが、夜鷹でも買ひに出かけて、落したものと見える、定めて難儀をして居よう、何卒返して、イヤ〳〵、人の事よりおらが鑑札。（ト探し見て、びつくりし）　ヤア、コリヤないわ、ハア今朝屋敷を出かける時、ヲヽよいわ、幸ひ拾うた此鑑札、鮒助と名乘つて歸つてくれべえ。

ト煙草入より煙管を出し火を附ける。此時、人の足音する故、提灯の火を消し眞中の蘆原の中へ忍ぶ。奴鮒助頬冠りして、番人金兵衛と斬り結びながら出る。此時辰次、着流し、大小、頬冠りにて下手の蘆原より出る。此中、鮒助　番人金兵衛を斬り倒し、とゞめを刺す。中間琵琶平、後より出て、樣子を見てゐる。此時辰次前へ出て、

辰次　鮒助首尾は。

鮒助　まんまとしてやつた、轡。（ト轡を出して渡す。）

辰次　ヲヽ、出かした、然し此死骸を捨て置いては後日の災ひ。

鮒助　イヤお氣遣ひなされまするな、かやうの事もあらんかと、琵琶平めが名前を記せし此鑑札、ちよろまかしておきましたれば。（ト袋入の鑑札を出し。）是を斯うして。

ト探り寄り、死骸の手に持たす。琵琶平手さてはといふ思入。

鮒助　此死骸に持たせおかば、盜賊は琵琶平め。

ト此内、琵琶平惡い奴だといふこなしにて、鮒助の鑑札を出し、死骸に持たせ、斯うしておけばよい、といふ思入あり、兩人は是に氣の附かぬこなし。

辰次　イヤ、よく氣が附いた、彼奴は比良井の組下なればイデ此上は邪魔になる、兄弟を罪に取つて落せば、何も彼も此方の思ふ壺。

鮒助　イヤ、うまい手つがい。

辰次　最早、夜明け。

鮒助　人の見ぬ間に、お先へとされ。

**辰次**　合點だ。

ト始終本釣鐘にて、辰次先に立ち鮒助も行かうとする。此時琵琶平窺ひ寄つて辰次の鎗を持つて引き留める。辰次扨はといふこなしにて振り拂ひ行く。鮒助隔てる。始終くらがりの模樣、だんまりの心にて、三人引つ張りの見得にて、此道具廻る。

本舞臺通し二重、金の大襖、總て粟津家城中大廣間の模樣、右二重の眞中に、若殿本太郎、着附、長上下にて梅に居り、後ろに、麻上下の近習二人、小姓二人居並び、上の方に上使左衞門、着附長上下にて高相引にかゝり居る。此前の筒花活に菊の花活けあり。右二重下手に刑部、着附上下にて控へ平舞臺上手に、諸士一二、下の方に三四、皆々、麻上下にて居並び、此見得明け六ツの太鼓にて道具留る。

**刑部**　今日は重陽の御壽。

**士一**　鎌倉在府の大殿を始め奉り。

**士二**　若殿本太郎樣にも益々。

**士三**　御機嫌うるはしく。

**士四**　恐悦至極に。

**皆々**　存じ奉ります。（ト皆々平伏する。序の舞になり。）

**刑部**　則ち御當家の御先祖平八郎忠勝樣には、信州天神坂の合戰、天祿二年九月九日日頃手馴し松倉卿の鎗引提げ、數千の敵を突破り、遂には城を乘取つて比類なき手柄を顯はし給ふ。

**左衞**　其砌り、勳功ありし松倉卿の穗先を以て短刀となし、當家の寶と承はる。

**士一**　則ち今日の儀式に用ゆる御家の先例。

**士二**　然るに其短刀、先達て紛失いたし。

**士三**　草を分つて詮議いたせど。

**士四**　今に於て在所知れず。

**左衞**　其所を計つて此左衞門、今日の役名を申受しも、當家の無事を計らはん爲。

**刑部**　ハア、萬事に御心添への段、有難う存じ奉ります。

**左衞**　此度某當家へ參りしは先達て申し入れし如く高丸家へ武將よりの御指圖を以て、當家の姫君夕照が婚姻の媒人は則ち此結城左衞門、結納の印として高丸の重寶鈴虫の香爐先達て差し送りし處、今に於て輿入延引は媒介たる左衞門が誤り、夫故急ぎ輿入ある樣改めて武將の嚴命。

**刑部**　イヤ、其儀は家老たる比良井市郎右衞門に申し付け置きましたれば、追つて返答申上るでございませう。

左衛　シテ、比良井市郎右衛門は。

刑部　いまだ登城仕りませぬ。

左衛　斯く打捨ておくは某をないがしろのいたし方。此上は猶豫はならぬ、夕照輿入あるべき、其の日と申すは。

皆々　サア、その儀は。

左衛　但し又送り越せし鈴虫の香爐、お返しあるか。

皆々　サア、それは。

左衛　姫を伴ひ立ち歸らうか。

皆々　イヽヤ、その儀は。

左衛　香爐を受取り申さうか。

皆々　サア。

左衛　御返答は如何でござるな。（トきつと言ふ、此時揚幕にて市郎右衛門。）

市郎　アイヤ其御返答、比良井市郎右衛門それへ參つて、申し上げん。

ト序の鉾になり、市郎右衛門着附、上下、家老のなりにてツカ〳〵と出で來り、直に本舞臺へ來て、

本太　ヲヽ、市郎右衛門、只今登城いたしたか。

市郎　ハテ、先づは若殿初め御上使樣、一家中の各々、今日は重陽の祝儀。

刑部　てお互ひに、

皆々　に存じまする。（トとなし。左衛門思入あつて。）

左衛　郎右衛門。

市郎　守殿には鎌倉在府なれども、萬事を計らふ其方なれば、婚姻首尾よく整へば兩家の

るに今に姫の輿入延引、斯く捨ておかるゝは樣子あつてか、返答によつて計らふべき

、市郎右衛門、何と。

御上使の仰せらるゝが御尤も、早速輿入いたすにも肝心の夕照姫は。

アイヤ、それは拙者申し上げん、刑部樣にはお控へ下され、成程左衛門樣仰せの通り承知仕

る、此將よりの指圖の緣組早速取り急がんと思ふ折柄、志賀の別壯にて短刀の紛失、あづかり

し其市郎の誤り、大殿には鎌倉御在府中の事なれば如何はせんと思ふ折柄、姫君樣には御病氣

南無三、輿入延引いたさば高丸家への申譯立ち難く、とやせんかくやと晝夜心を勞する折柄、又〻候や再度の御上使、只此上は夕照姫病氣平癒あらば、早速輿入いたすに依て暫時の間は、何卒左衛門樣の御計ひにて。

諸士皆々　デモ、みす〳〵。

市郎　ハテ、其方達が知つた事ではないわサ。

四人　ぢやと、申して。

市郎　ハテ、いらざる差し出、控へおらう。

左衛　市郎右衛門、寶の紛失姫の身の上、國家の納り、嘸、心勞であらうなア。

市郎　ハア、拙者が胸中、憚り乍ら御推量下さりませ。

左衛　斯申す家老が祖父、大部友光は當家の先祖平八郎忠勝殿の家臣、味方原の功名が鎌倉殿の御目にとまり直參に召し出され、則ち此粟津家は拙者に取つては、古主の嫡流。

市郎　誠に深き御好みを思召し、御猶餘下さらば主人が悅び、拙者が安堵、此儀願ひ奉る。

左衛　シテ、夕照の病氣は。

市郎　物怪同然。

左衛　何と。

市郎　人は四百四病の病の器、何時どの樣な御病氣の起らうやら、物の怪の業と見え、折に觸れては物狂はしきその有樣。

左衛　アイヤ、市郎右衛門、汝如何程包みかくす共、夕照姫は。

士一　國違なされて。

同二　御館には。

四人　お越しなされぬぞや。

市郎　ム、。、ト前にある花活けの菊を見て）此菊は諸花に勝れ、自ら君子の德あり、故に菊は花の弟と賞す。

左衛　昔唐土周王に仕へし慈童、誤つて君の枕を越ゆる。

市郎　群臣其の罪をあげて、遠き山路に捨てんと奏す。

左衛　帝、深くあはれみ給ひ四句の偈を授け給ふ。

市郎　慈童心に彼の偈を保ち、常に菊の花の雫をなめて。

左衛　七百余歲の命を延はる、則ち彭祖是なり。

市郎　[illegible]。

左衛　[illegible]。

市郎　世[illegible]の者の診にも。

左衛　一[illegible]遣びれば尋とやら。

市郎　スリヤ御上使の御賢慮にて。

左衛　若の[illegible]。

市郎　國家の納り。

左衛　合點がいたか。

市郎　御芳志の程。（ト飛びしさり。）有難う存じ奉りまする。（ト平伏する、本太郎思入あつて。）

本太　申し付し品、是へ。

小姓　ハア。（ト白木の箱を三方に乗せ、持出で左衛門の前へ直す。）

本太　ハア、本太郎が心を籠めし其一品、御披見下さりませう。

左衛　何か様子の有磯海、深き思案の此箱は。

本太　あけて言はれぬ拙者が心。



衛左　籠めし一品知らね共、奥へ參つて後程披見。

市郎　先づそれ迄は對客の間にて御酒一献。

本太　今様の節檢校殿に申し付けて御氣慰みに。

刑部諸士四人　此上は姫の身の上。短刀の一件。

左衛　問ふも語るも、今宵の落着。

本太　萬事の思案。

市郎　後[illegible]迄に。

左衛　然らば、本太郎殿。

本太　[illegible]様。

市郎　[illegible]様には。

刑部皆々　先づ、いらせられませう。

ト唄になり、左衛門先に本太郎、刑部、その外皆々附添ひはひる。後に市郎右衛門殘り、合方になり。

市郎　今左衛門様のお渡しなされし此の菊の一本、ム、。（ト菊を取上げ、こなしあつて。）夫れ花は臣下、根元は御主君、落花微塵になすとも根元を枯らす謂なし、忠義は金鐵さりながら、寶の紛失は若殿の越度、其身に引受け忠義を立つる弟九市郎、察する所伯父刑部殿を初め、守山辰次とは思へ共荒立てられぬ寶の詮議、若殿の御身の紛り姫君の御身の上、花物言はねど今宵の中、事を納める工夫が、（ト花を下におく、是を道具替りの知らせ。）ありさうなものぢやなア。

ト思案の思入、合方にて道具廻る。

本舞臺三間の間數寄屋建、見附鼠壁、床の間に金比羅のお札を飾り、神酒、洗米を供へあり、東西落間、後に寄せて建仁寺垣、石燈籠、柴垣、舞臺一面の菊の花檀、いつもの所に枝折門、右二重に九市郎、着流し一本差し、座布團を敷き、硯箱を置き、手紙を認めてゐる。よき處に蟲籠あり、此見得、獨吟にて道具納まる。

〽迷ふにぞ、今日こそ秋に萩の葉の、露草程も僞の、あるかなさかは白菊の。

ト是にて九市郎筆を止め。

九市　ヲ、、思へば武士の身の上程味氣なきものがあらうか、短刀の紛失二つには、鎌倉御館の御教書を誤り裂きし若殿の、科を此身に引き受けて潔く切腹と、覺悟は兼ねて極めしが、心にかかるは若殿の御短慮、諫書を殘し相果てなば、憐れ不便と思召し、御心和ぐものなれば死後の忠節此上なし。

ト右の唄にて、又手紙を認める。花道より娘おらん振袖、屋敷風、小さき提重を袱紗にて包み、携へ出て、花道にて。

らん　ア、嬉しや、どうやら斯うやら爰迄は來たれ共、向うに見えるあの數寄屋が九市郎様の御居間であらう、ヲ、、さうぢや〳〵。

〽あやめもわかぬ夕顔の、その睦言のしるしだに。

ト合方にておらん本舞臺へ來て、切戸の傍へ行き思入ありて。

らん　ハイ、誰ぞお頼み申まする。モシ。ヲ、、しんき、取り次ぎの衆はござらぬかいなア。

ト九市郎氣附き。

九市　ハテ心得ぬ、誰れ問ふ者もなき閉居の一間、殊に女の聲にて音信しは。（トおらん此聲を聞き。）

らん　ヲ、、さうおつしやるは九市郎様、こゝあけて下さりませいなア。

九市　ム、、其聲は。（ト手早く書置を卷き納め、切戸の傍へ行く。）ヲ、、こなたはおらん殿か。

らん　九市郎様。

九市　思ひも寄らぬ。

らん　ようまア、おまめでおいでなされましたなア。（ト取付く。）

九市　アヽコレ、人や見ん、サア内へ〳〵。（ト手を取り内へ入れて。）御咎めを蒙る閉居の某、番人を附け出入を許さぬ此別荘へ、こなたはどうしてござつた。

らん　ハイ、門番の衆へお金をあげて、事を分けて頼んだれば。

九市　アヽ、たつて咎めもせず。

らん　心よう通してくれたわいなア。

九市　ハテ、粋な番人ぢやよなア。

らん　マア、何から申しませうやら、思ひもよらぬ今度の御難儀。

九市　マア立ちながら話もなるまい、サア〳〵是へ。（ト兩人二重へ上り、こなしあつて、）そもじは夕照様の御傍仕へ、自由に出ては御前の首尾が。

らん　サア、其姫君様には此程より、御行衛が知れませぬわいなア。

九市　スリヤ姫君には、アヽ御出國なされしとか、ムヽ。

らん　人に洩れては一大事と兄市郎衛右門様のお計ひにて、御病氣と披露して忍び〳〵に御行衛を、御詮議申してをりますわいなア。（ト合方になり。）妾やあなたの女房ではござりませぬかいなア。御主の罪を此身にも受け此川崎の下屋敷へ、押込めにおなりあそばせしと、きいて身もよもあられませうか、又其上に悲しいは義理ある兄辰次殿、兄や弟ではない元は他人、女房になれと無體の繼慕、操を守つて得心せねば所詮生けてはおかぬとの事、非道の刃に死ぬるともせなためてあのお顔が一目、見たいばかりに參りましたに、こりやまアなんといたしませうぞいなア。

九市　扨はさういふ事であつたか、あの辰次といふ男は言語道斷の不埒者ぢやなア。（ト此時奥にて。）

鼻之　表に人音するは、誰ぢや〳〵。

九市　馬鹿者の鼻之丞、見咎められては面倒な。（トかくす。鼻之丞、前髪着附にて出る。）

鼻之　何でも此所に。（ト見まはして、きよろ〳〵する。九市郎こなしあつて。）

九市　ヱヽ、馬鹿者め、何をきよろ〳〵。

鼻之　イヤサ、たつた今こゝで。

九市　用事はない、立つて行け〳〵。

鼻之　それでも今こゝに。

九市　ヱヽ、参れと申に。

鼻之　ハア、と答へて失せにけり。（ト淨瑠璃を語りながら、奥へはひる、九市郎後を見送り。）

九市　イヤ、モウよい。何とまア困つた奴ではないか。

らん　さうして召し上りものは、皆あの人がこしらへますのかえ。

九市　どうして〳〵、朝夕三度の食事は親類なれば小左衛門殿、屋敷の賄。

らん　そりやまア、嘸御不自由でござりませうなア。

九市　御推量下されい。

らん　さうあらうと存じまして。（ト以前の袱紗より、杯のつきし提重を出し。）内外の者の目顔を忍び、手づから調へて参りました、無調法ながらせめてもの御氣晴し。まア御酒一つ召上つて下さりませ。

九市　是は近頃忝い、凡そ此廿日餘り酒と言ふ名も忘れをつたが、早速賞翫いたさう。

らん　そのやうにおつしやつて下さりまするとと、嬉しい事でござりますわいなア。

九市　さらば一献。（ト杯を取り上る。）

らん　ドレ、お酌いたしませう。（ト酌をしようとする。九市郎止め。）

九市　イヤ、此杯は、先づ〳〵お手前から。

らん　そりや何故でござります、まア〳〵あなたから。

九市　ハテ、おもたせの御馳走なれば、亭主役にお始めなされい。

らん　ほんに言號とは名ばかりにて、まだ祝言も此度の騒動、そんなら私から始めませうわいなア。

九市　ヲヽ、それがよい〳〵、ドレ身共が酌をばいたさうか。

らん　是は憚りでござりまする（ト一口呑んで。）憚りながらあなた樣へ。（ト九市郎呑んで。）

九市　ヲヽ、甘露々々。（ト此時鼻之丞、奥より出て來り。）

鼻之　ヤア、見つけた、見つけた。（ト兩人びつくりなし。）

らん　ヲヽ、びつくりしたわいなア。

鼻之　お咎めの身を以て美しい娘を引ずり込み、酒盛りをやらかすとは蟲がよい、此由を注進する。

九市　アヽ、コレ〳〵まて〳〵、是は唯の娘ではないぞ。

鼻之　ムヽ、唯の娘でなくば、金を出して買つたのか。

九市　イヤサ、おゝさうぢや、日頃信心する金比羅樣の御化身ぢやわいなう。

鼻之　ヱヽ、そりや嘘ぢや、金比羅樣は男神。

九市　ハテ、其所が神道變生女子。

鼻之　ヱヽ。

九市　ハテ、勿體ない。（トおらんの手を取り上座へなほし。）南無金比羅大權現、おんあびらうんけんそはか。

鼻之　ムヽ、そんならその女は、金比羅樣の御化身か。

九市　神慮を輕んじ、慮外すれば罰が當るぞよ。

鼻之　ヤア。

九市　後で某がお詫び申さう程に、早く奥へ行け〳〵。

鼻之　男が女に化けるのか。（ト鼻之丞奥へはひる。後に兩人こなしあつて。）

九市　日頃我々兄弟は、象頭山を信仰なし奉る事をよく知つて居る故、今の樣に言うたのぢや。

らん　勿體ない、罰の當る事はないかえ。

九市　ハテ神は見通し、大事ない〳〵。

らん　久し振りにてお酒を一ツ戴きましたれば、大さう醉うて參りました。

九市　身共も餘程酩酊いたした、ア、是にて此程よりの氣散じが出來た。

らん　それは宜しうござりました。（ト此時九市郎以前の書置を落す。おらん目早く見て。）こりや何やら書いたものが。（ト是にて九市郎びつくりなし、書置を引ったくる。又獨吟になり。）

〽ついに一歳、二歳に、三歳を待つや小車の。

らん　もうし九市郎樣、今の書いたものはありやなんでござんすえ。

九市　是でござるか、ヲヽそれ〳〵、弓矢の秘傳の書物ぢやわいなう。

らん　イヱ〳〵、さうではござんすまい、さうおかくしあそばすのは餘所のお女中からの、お文でがなござんせう。

九市　なんの左樣なものではござらぬ。

らん　さうでなくば今のを一寸。（ト懷へ手をかける。）

九市　ハテ扨しつこい。（ト兩人爭ふ事あり。ト書置を見て。）

らん　ヤ、こりや是、書置き。

九市　ア、コレ。（ト押へるを獨吟になる。）

〽勤の内の忍ぶ筆、口說した夜の思ひ草。

ト兩人引張りの見得にて、此道具廻る。

本舞臺三間の間見附金襖。東西障子屋體、右二重、眞中に本太郎、羽織袴にて樽に座り居る。廉上下の侍二人、小性兩人附添ひ、下手に刑部着附、上下にて居並び、平舞臺眞中に走井文吾腹を卷き鉢卷きをせし早打のなりにて、悶絶してゐるを諸士四人介抱してゐる。上手に辰次着附、上下、下手に市郎右衞門、銀の藥呑を持ち、双方より立かゝり居る。此見得早舞、バタ〳〵にて、道具止る。

皆々　文吾殿、御前でござるぞ、文吾どの〳〵。（ト市郎右衞門、文吾を引き起し、耳に口を寄せ。）

市郎　走井文吾、時が切れた。

辰次　不忠者めが。（ト双方よりきつと云ふ。是にて文吾、心附き兩人の顏を見て。）

文吾　御家老樣、辰次樣、いづれも樣。

市郎　心が附いたか。

文吾　ハア、御手づからの御介抱、勿體至極にござります。

辰次　若殿樣にも、是に御出座。

文吾　ハア。（ト平伏する。）

本太　鎌倉表の次第心元ない、樣子は何と。

文吾　ハア、大殿豐岐守樣には先日下旬の頃より、些少の御所勞。

辰次　何、大殿には。（ト辰次、刑部と顏見合せ思入あり、）

皆々　御不例とな。

文吾　ハア、御病氣も御全快なく、御食事とても召し上られず、百日が其間に御藥の利目見えざれば、御本服の程も心元なしと典藥の醫案、未だ重らせ給はぬ中、若殿を武將家へ御目見得の上、御家督相續あらば大殿を初め一家中の安堵、急ぎ御下向あるべき赴き、大殿の御上意でござる。

市郎　ハテ、存じも寄らぬ大殿の御不例、總て膈と申す病は百日を限るもの、急ぎ彼の地へ御下向あつて、御家督御相續あそばせば、中將家の御師範と、言はれ給ふ當家の面目。

辰次　アイヤ御家老、若殿御家督御相續とあるからは、兼ねて武將の御懇望當家に傳はる松倉卿の短刀、差し上げる筈なれどその一振りは先達てより、紛失いたしてをりませうがなア。

市郎　夫故にこそ唐崎九市郎、身の誤りとあつて閉門仰付られ、押籠の身の上。

辰次　ム、その九市郎を押籠めおかば、短刀は手に入りまするか。

市郎　サア、其所は身共が詮議をなし、きつとお上へ差上げまする。

辰次　何、その短刀をば。

市郎　如何にも。

辰次　ハテなア。（ト思案のこなし。）

市郎　他家にあつて益なき短刀、當粟津家の家國に望をかける奴等の仕業、さすれば此盗賊は近くにある。（ト刑部、辰次に目を附ける。兩人は顔をそむける。）

士一　短刀詮議の目當は足輕の貫平太。

士二　朋輩足立甚助を討つたる曲者、此程より牢屋へ押込め。

士三　樣々に糾明いたせども。

士四　今に於て白狀せぬしぶとい奴。

市郎　天罰といふ責木にかけて、立所に白狀いたさせ、奪ひ返さんに何の手間暇。

刑部　イヤ〳〵、さう味く行けばよけれど何として〳〵、なう辰次。

辰次　左樣々々、今迄知れぬ短刀の行衛、ハテ心元ない。

市郎　其所を取得て御覽にいれん。

辰次　もし又、手に入らぬ其時は。

市郎　申譯の工夫は種々。

辰次　ちやと申して。

市郎　ハテ、いらざる心遣ひ御無用々々。イヤナニ文吾、其方は長途の勞れ、次へ參つて休息あれ。

文吾　有難うござります、併し大殿より内密の儀もござれば。

市郎　イヤ、その儀は追つて、暫時休息。

文吾　衣服を改め、後程出仕。

市郎　早打大儀。

文吾　ハア、左樣なれば、後刻御意得まする。（ト文吾はひる。四ツの時計鳴る。此時揚幕にて。）

呼び　比良井才次郎樣御出仕。（ト序の舞になり、才次郎、着附麻上下にて出で、本太郎を見て。）

才次　ハア、思ひも寄らぬ若殿樣へ端近の出仕、ハア。（ト花道よき處に平伏して。）大殿壹岐守樣御不例のよし、早速の注進承ると等しく、取る物も取り敢ず出仕いたしてござります。

本太　ヲ、待兼ねた、才次郎近う〳〵。

才次　ハア、各々御めん下され。（ト本舞臺へ來り、下手へ控へる。本太郎思入あつて。）

本太　比良井正春。

才次　ハア。

本太　此度東國より知せに依て早速彼の地に發足いたせば、父上の家督を讓り受け、中將家の御師範となる此本太郎、軍學弓馬槍劍の道は豫め得たりと雖も、柔道捕り物は未だ其奥を極めず、柔道の奥儀水月と名づくる秘密、此座に於て傳授いたせよ。

才次　ハア、御意を返すは恐れながら、御傳授の儀は今暫く御猶餘願ひ奉りまする。

本太　遠慮いたすは傳授を惜むか。

才次　身命全き事君の賜、何しに惜みませう樣はござりませぬ。

本太　ム、、扨は藝道未熟と悔り夫故の事なるか。

才次　イヤ、全く以て。

本太　大事故許さぬのか。（トきつと言ふ。）

才次　ハア、御意の通りにござりまする。（ト是にて本太郎赤面する。）

本太　ム、。

辰次　アノ、是サ〳〵才次郎殿、そりや御心違ひでござらう。御自分には近頃東國より歸らしやつて、若殿の武藝の御上達は御存じあるまいが、持つて產れし御器用肌拙者なども柔道には、餘程骨を折りましたが、イヤモウ何として何として、一家中は申すに及ばず近國近在の諸先生、毎度試合に參られても、若殿の御手に立つ者は一人もござらぬわ。

刑部　只今辰次の申す如く武藝は拔群の本太郎殿、よい程に傳授を許し高祿にありついた方が、よさそうなものだぞよ。

才次　イヤ未熟若輩の拙者なれ共武藝は師の導きに依て、其の甲乙は豫め承知いたしまかりあるがコリヤ各々には、御存じない儀にござりまする。。（ト此時本太郎、羽織を脫ぎ、立ち上り。）

本太　四人の者、立合の用意〳〵。

四人　ハア。（ト四人身拵へする。本太郎鐵扇を持て、ツカ〳〵と平舞臺へ下り。）

本太　サア、四人の者共、余に勝たば褒美は加增、遠慮いたさば曲事なるぞ。

士一　主從の禮儀は禮儀。

士二　慮外いたすも。

士三　武藝の勵み。

士四　恐れながら御容赦は。

四人　仕らぬ。

本太　ヲヽ、出かす〳〵。

四人　恐れながら。（ト是より白囃子になり、本太郎、一、二の兩人を取て投げる。三、四、双方より窺ひ。）

本太　油斷の窺ひ、（ト立廻りあり、トゞ四人を投げ、きつと見得。）

才次　見たか才次郎、飛鳥を欺く今の働き、是でも奥儀は許されぬか。

本太　天晴の御上達驚き入り奉る、さりながら身體手足の働に毛頭透はござらね共、御心の御修行足らざれば、御傳授は申されませぬ。

才次　何と申す。

本太　同じ武藝と申す中にも、劍術と柔道は、心理の沙汰に等しからず、劍を持つては進むを可とし、體に取つては退くを元となす、君藝道に誇る御心あらば極意を得たりと慢心起り、御身に誤ちあらんは必定、その意を察し差控へ故意と御傳授申さぬは、御大切と存ずる故。

本太　ヤア、口賢くも言ひ曲るよな、さ言ふ汝が自慢の鼻を打ち折りくれん。

（ト本太郎きつとなる。才太郎兩手を膝に置きて笑ふ。本太郎せき込み腕を取つてねぢ上る。才次郎わざとねぢられる。是より六段の合方になり、いろ〳〵本手の立廻りあり、）

本太　如何に才次郎、斯樣に備へし身體の固め、投げらるゝなら投げて見よ。

才次　イヤ、其儀は無禮。

本太　許す。

才次　御免。（ト本太郎を投げる。是にて一同びつくりなし。）

皆々　ヤア、若殿樣。（と此時、市郎右衛門立ち上り、才次郎の襟上を取つて引附け。）

市郎　アノ爰な無禮者めが、如何に御免あればとて大切なる主君に對し、手向ふとは不敵な汝、異見のしもとは斯う〳〵。（ト扇子にて才次郎を打つ。）大殿への申譯、いつそ身共が手にかけて。

本太　ヤレ待て市郎右衛門、はやまるな。

市郎　イヤ憎い弟、此場に於て。（ト又斬りかゝるを、本太郎、留めて。）

本太　傳へ聞く唐土の孟燕は、成王に鞭て四百餘州を起せしためし、今才次郎が働きは我が高慢を取りひしぐ、無禮は却て彼が忠節、たとひ主從たりと雖師となり弟子となるからは、五體の骨を取りひしいでも、教へ諭すが武門の習ひ。

市郎　それぢやと申して。

本太　今正春に說破され、日頃の慢心忽ち折れ、心理を得たる我が悅び。

市郎　スリヤ無禮の御咎もなく。ハア流石は寛仁の御計ひ、先づ〳〵。（ト手を取つて、上座へ直し。）

辰次　それでは餘り依怙の沙汰、いつそ身共が。（トツカ〳〵と傍へ來て。）御前叶はぬ。

皆々　立つしやれ。（ト引立にかゝるを振り拂ひ、辰次かゝるを留めて。）

才次　それ、水月と書く文字は卽ち水の月。（ト辰次を引きまはしてよろしくあり。本太郎是を見て。）

本太　ムヽ。（トきつと呑込みしこなし、兩人立廻つて。）

才次　手にも取られず、窺ふにも述べられず。（ト靜に辰次を引廻し、本太郎に諭す思入。）

本太　ムヽ。（ト得心せし思入。）

才次　心を以て心に傳ふる矢流の相傳、柔の極意。

本太　ムヽ。

才次　柔能く剛を制すと言ふ一心の置き處は。とくと御會得。（ト辰次をとんと下に置き。）なされませ。

本太　ヲヽ、傳授はすんだ、承知々々。（ト市郎右衞門、感服の思入あつて。）

市郎　ムヽ、敎へたり、習ふたり、命を的に御主君を諫めし忠臣、無禮を許せし若殿は君子なり。市郎右衞門感心いたしてござります。

本太　斯樣な家來を持ちしは他門への面目家の譽れ、新地二百石加增なし、予を初め一家中へ師範の役目申附くるぞ。

市郎　何、新地二百石下されんとな。コリヤ才次郎承つたか。

才次　ハア、有難き君の御仁政。

市郎　須彌蒼海にも增りし御恩。

才次　心魂に徹しまして。

兩人　有難く存じ奉りまする。（ト嬉し涙に泣く。刑部思入あつて。）

刑部　何と辰次、世は末になつたではないか。主君を投げて二百石とは妙な世の中。

辰次　左樣でござる、いつそ踏殺したら一萬石にもなりませうか、なう何れも。

士一　イヤ、我々も斯樣に鍛錬いたしておつたら。

士二　せめて若殿の足でも持つて引き倒し。

士三　五十石か、百石位は貰ふもの。

皆々　イヤ、殘念な儀でござる。

本太　水月の傳授相すむ上は親人の御不例心元なし、初更を相圖に出發なし、夜を日に次いで急がん。

刑部　御家督相續の砌りなくて叶はぬ松影の彎、卽ち本家の系圖も同然。

辰次　イヤ、たとひ彎は持參なす共、御婚禮の松倉卿の短刀差し上げねば、御家督相續は相なりますまい。

市郎　ヤア、又しても〳〵、其方共の存ぜぬ事だ控へてよからう。

辰次　イヤ御家を大事に存ずる故。

市郎　氣遣ひいたすな、若殿御出立迄に詮議いたして見せる、いらさる差し出、控へてゐよと申すに。

辰次　ム、、然らば控へませう。（ト九ツの時計鳴る。）

士一　最早午の上刻。

士二　御祝儀の刻限で。

四人　ござりまする。

才次　何樣、今日は九月九日重陽の御壽、御先祖忠勝公、數度の合戰に比類なき手柄を顯し、拜領ありし松影の轡。

市郎　則ち御家の系圖と定め、御家督相續の砌は、武將の上覽に備へる古例。

才次　さるに依つて、今日は御家にとつては吉例の日柄。

刑部　本太郎樣には御上使の饗應、座席を改め。

皆々　御祝儀の御酒一獻。

本太　何樣、東國へ出府の門出、祝ふ別れの杯くまん。

市郎　才次郎、若殿に附添ひ奥へ參つて何かの用意、一家中へ申し渡してよからう。

才次　畏つてござります。

刑部　シテ御上使への返答は。

市郎　其返答も初更限り。

辰次　お家の落着。

才次　若殿の御發足。

形部　先づそれ迄は。

市郎　暫時の休息。

才次　若殿樣。

本太　才次郎。

市郎　先づお入り。

皆へ　あられませう。（ト唄にて皆々はひる、後に市郎右衞門、辰次、刑部、諸士二人殘る。）

刑部　何、雁平、軍次、その方共は科極つた長濱曾平太を引き出し、成敗いたしてよからう。

鴈平　ハア、心得ました、（ト兩人立つを。）

軍次　コリヤ、兩人共何れへ參る。

市郎　ハア、獄屋へ參り科人曾平太引き出し。

鴈平　成敗いたさうと存じまして。

軍次　イヤ、一國の政道は家老たる某の役目、其方達の詮議はたのまぬ。

市郎　デモ、刑部樣の御指圖なれば。

兩人　イヤ、御一門とは申しながら御隱居同樣の刑部樣、無益の御指圖、御無用になされませう。

市郎　イヤ、殿の御家來、安達甚助を手にかけし科人なれば。

辰次　イヽヤ、下手人は私事、鎌倉武將へ差上る短刀の紛失は、疑もなき足輕曾平太。

市郎　イヤ、如何樣に申す共、短刀の紛失は唐崎九市郎が誤りと、言はれたではござらぬか。

辰次　イヤ、みす〳〵知れた下手人を、許すと言ふは依怙の沙汰、政道が暗い〳〵。

刑部　ムヽ、類を以て友を呼ぶ、烏を鷺と爭つても助命をもと思はるゝに、却つて成敗急がるゝは刑部殿の御勝手に、惡い事でもござりまするか。

市郎　何サ〳〵、身共決して左樣な事は。

市郎　然らば辰次、お手前は。

辰次　イヤ何も無い。

市郎　左樣なればいらさる御配慮、御控へ召され。

（トきつと言ふ。皆々顏見合せ、惡いと言ふ思入、バタ〳〵になり以前の文吾、上下に改め幕あきの金兵衞の死骸を戸板に乘せ、近習兩人にかゝせて出で來り、）

久吾　何れも、一大事でござる。

皆々　何、一大事とは。

久吾　ハア、若殿の御指圖にて、松影の轡取り出さん爲、瀨田口の御寶藏へ參りし處、盜賊の仕業と見え番士金兵衞は殺害され、寶の轡は外箱ばかりにて紛失いたしてござります。

市郎　何、スリヤ、轡は紛失いたせしとな。（ト當惑の思入。）

辰次　ヤア〳〵そりや轡は紛失とな、短刀の紛失といひ若殿の御出府の折柄、御持參なくては跡目も叶はず。

刑部　萬一其内に、大殿御死去ある時は御家は斷絶。

辰次　短刀献上の願ひは延引もならうけれど、若殿御發足の今となつては。

刑部　大切な轡がなくては、御家は滅亡。

鴈平　御家老、コリヤ何何なされます。（ト思案の思入、此時揚幕にて。）

運平　何れも、轡の盗賊、捕へましてござります。

鮒助　なんと。（ト早舞にて、鮒助、琵琶平、兩人立廻りながら出る。皆々是を見て。）

皆々　ヤア、守山組の下郎鮒助。

鴈平　比良井組の中間、琵琶平。

軍平　盗賊とはこりや。

刑部　何れが盗賊だ。

辰次　されば御ござります。夜前御頭の御用にて京都へ參つた歸り足、通りかゝつた瀬田口の御實藏表通り宮の前の藪陰より、うろたへ出たる此の琵琶平、こやつうろんと引つ捕へて斯くの仕合せ。

ト右のセリフの中、立廻りなから、兩人本舞臺へ來る。

琵琶　ウヌ、正直正路な琵琶平に其言ひかけ、ヱヽ覺えはないわい。（ト又立廻る。）

辰次　アヽコリヤ〳〵、組下に盗賊あらば頭たる者の不調法、シテ其の琵琶平を盗賊とは。

鮒助　ハア、慥な證據は金兵衛の手に握つたる此鑑札。（ト是にて文吾、金兵衛を改める。）

文吾　ムヽ、誠に。

鮒助　比良井組の琵琶平と、あり〳〵書いてござりますれば、それに相違はござりませぬ。

辰次　文吾殿、その品是へ。（ト文吾はためらふ。）

鮒助　何を御猶豫なされます、（ト文吾の手から鑑札を取り。）イザ御改め下さりませ、（ト辰次に渡す。）

辰次　斯ういふたしかな證據があれば。（ト言ひながら鑑札の袋を取つて見る。）

辰次　ナニ、守山辰次組下、坂口部屋鮒助。

敵役　ヤア。（ト顔を見合す。此内市郎右衛門思入あつて。）

皆々　琵琶平、その下郎めに縄打て。

市郎　ハツ。（ト鮒助逃げようとするを捕へ。）サア、縄にかゝれ。

琵琶　コリヤおれを何とするのだ。

鮒助　轡の盗賊、縄にかゝれ。

琵琶　べら棒め、うぬが名の鑑札がどうしておれの科になる。

鮒助　こいつ耳にはひらぬか、不便な奴ぢや。

市郎　サア、辰次今の名を讀つしやい。

辰次　イヤ、是は。

琵琶　讀めずば私が讀みませう。（ト引き取り。）守山辰次組下坂口部屋鮒助。なんと是でもあらがふか。

鮒助　どうしてそれが。イヤ何御頭、なんとかして下さりませ。

辰次　うぬが疎相で手盛りを喰うたを、夫を身共が知るものかい。

鮒助　そりやまたあんまり。

辰次　ヱ、、控へておらう。（ト押へつける。）

市郎　近習の者、金兵衛の死骸片附い。（是にて近習二人、下手にはひる。）

市郎　コリヤ〳〵、鮒助、近う參れ。

鮒助　ヘイ。（トためらふ。）

市郎　今身共が尋ぬる仔細、僞らずと言ひ聞せよ。松影の轡人に頼まれ、其方奪ひ取つたであらう。

鮒助　イヤ、左樣な事は。

市郎　イヤ〳〵最早露顯に及ぶからは、誰れ彼れの遠慮はない、シテ其頼み手は。

鮒助　サア、それは。

市郎　よもや是に居られる、御人達ではあるまい。

鮒助　コリヤモウこゝには。（ト逃げ出すを、琵琶平押へる。）

琵琶　ウヌ、さうはさせぬぞ。

ト此時鳳平、運平の兩人立かゝり、鮒助を押へる心にて、琵琶平にかゝる。琵琶平兩人に當身をくれる。辰次これにて琵琶平にかゝる。市郎右衞門二重より下り辰次の刀を落す。刑部立ち上らうとして、市郎右衞門に目を附けられそのまゝになる。琵琶平此中、鮒助を當てる。

市郎　辰次、其方は此刀で誰を斬る。

辰次　憎い鮒助、眞二つにいたさうと存じて。

市郎　いや、詮議ある鮒助を手にかくれば、轡の行方も知れざる道理。

辰次　ヤ。

市部　餘りお世話をおやきになさるな。（ト辰次を突放す。）

辰次　ヱ、、命冥加な。（ト市郎右衞門と顔を見合せ。）下郎めぢやなア。（ト元の座に直る。）

市郎　コリヤ琵琶平、鮒助に詮議もあれば取逃さぬやう、心を附けよ。

琵琶　ハア畏りました。（ト鮒助に活を入れ、手早く繩をかけ。）キリ〳〵立たう。

鮒助　ヱヽ、いま〳〵しいなア。（ト琵琶平に引かれてはひる。時の鐘鳴る。）

市郎　最早黄昏、誰そある、燈火持て。

近習　ハア。（ト燭臺を二本持ち出で、よき所におく。）

市郎　辰次殿、一寸是へ。

辰次　あの身共に。（ト合方になり。）

市郎　外でもござらぬ、お聞きの通りの仕儀、家老の某甚だ心痛いたするが、御手前何ぞ御思案はござるまいか。

辰次　さればでござる、お家の重寶松影の轡の盗賊、只今の處では十が九ッ鮒助と目星はつけ共、餘り手強く拷問なし若し相果でもいたしなば、詮議の目當もござるまい。と申して若殿御發足迄に手に入らねばならず、コリヤ如何思召しますな。

市郎　何を申すも大切なる寶の紛失、アノ鮒助を拷問なし、寶の出でぬ其時には申譯には身共が腹。

辰次　スリヤあの申譯にはお腹を召すとな、外に詮議の仕樣もありさうなものぢやなア。

市郎　如何樣、拙者とて好んで切腹など仕らぬ、なれ共轡の在所知れざる時は此の身の上、とはいへ雲を當てなる詮議、二重箱の其中は。

辰次　金梨子の高蒔畫。

市郎　袋の切れは世にも稀なる。

辰次　古錦欄の二重鶴。

市郎　シテ、その轡の金色は。

辰次　南蠻鐵の丸、

市郎　ム、、それぞ則ち松影の轡、慥に御身が。

辰次　ヱヽ。

市郎　持つて居ようが。

辰次　アイヤ御家老、そりや何を言はるゝ、轡の賊は下郎の鮒助、身共は一向存じませぬ。

市郎　いや、下郎に盗ませ其方が、かくしおるに相違ない。（是にて、辰次きっとなって。）

辰次　何だ、下郎に言ひ附け身共が所持せしとは、役目を功に出るまゝの其一言、祿に高下はあるとても同じ侍だ、曇り霞のなき某を樣々との言ひかけ、科に取つて落さんとは、守山辰次其手にや乘らぬ。

市郎　ム、左程潔白の其方なれば、此印籠の覺えはあるまい。（ト印籠を出して見せる。）

辰次　南無三、それを。（ト奪はうとする。市郎右衛門その手を打つ。）

市郎　夜前鮒助寶藏へ忍び入り、轡を盜んで立ち退く處を、番士金兵衛に見咎られ殺害なせし其處へ其方來つて轡を受取りかくしぬるに相違あるまい、證據と云ふは此印籠、死骸の傍に落ちたるは、何と是でも言譯あるか。

辰次　サア、それは。

市郎　速かに轡を出すか。

辰次　サア。

市郎　拷問せうか。

辰次　サア。

兩人　サア〳〵。

辰次　さう言やいつそ。（ト斬つてかゝるを立廻り、辰次の後より轡を取り出す）や、それを。

ト取りにかゝるを市郎右衛門引きつける。敵役皆々氣を揉む思入。

市郎　動きおるな。人外めが、（ト合方になり。）元來其方は五ヶ年以前是なる刑部樣の推擧を以て、刀脇差の研磨に妙を得たるを以て、小身ながら當家へ有りつき、御親子は申すに及ばず一家中にもへつらひ、表に仁義は飾れども心に企む邪智佞肝、此市郎右衛門の目鑑に違はず、言語道斷の不行跡組下の下郎に言ひ附け轡を盜ませし企みの段々。トサア、白眼んだ眼に相違はあるまい祿盜人とも人外とも、言はう樣なき人非人めが　天罰主罰報ひ來ておのれを責むる苛責のしもと、カウ〳〵、（ト扇にて打ち。）コリヤ、此樣な不鍛練な手の內にて身共に刄向ふとは及ばぬ事だ、馬鹿者めが（ト突きはなし、奥へ向ひ。）ハア御上使樣、御聞きあられましたか。

左衛　ヲ、、委細の樣子聞いた〳〵。（ト正面の襖をあけ、左衛門尉近習兩人出る。）

市郎　ハア、無事に手に入る松影の轡、イザ、御受取り下されませう。

ト三方に乘せ、左衛門尉の前へ直し、引き下つて平伏する。

左衛　今に始めぬ市郎右衛門の計ひ、系圖の轡に兇事なければ初更を相圖に出府の用意。

市郎　畏つてござれ共、心がかりは今一品の、松倉卿の短刀の行衛。

左衛　イヤ、其儀は少しも氣遣ひいたすな、獻上の日限延引の儀は斯く申す左衛門が、きつとよしなに計ひ得させん。

市郎　ハア。重々の御厚志、拙者當城に殘り詮儀仕出し、追つて上へ差し上げませう。

**左衛**　それ聞いて先づ安堵。（ト市郎右衛門刑部を見て。）

**市郎**　刑部様にも。（ト思入あつて。）嘸御悦びでござりませう。

**刑部**　イヤモウ、轡の無事に手に入るもそちの働き、滿足々々。

**左衛**　此上は奥へ參つて本太郎殿の門出の杯仕らん、市郎右衛門は後より。

**市郎**　左様なれば左衛門様。

**左衛**　市郎右衛門、後刻。（ト呵になり刑部、左衛門はひる。辰次、市郎右衛門の傍へ來り。）

**辰次**　ハア、我ながら迷うたり、若氣の至り後先の辨へもなく、慾といふ字に目がくれし出來心、只今の御異見は、辰次の五體に染み渡たり、面目もなき次第、誤つて改むるに憚る事なしとは聖人の教えの今月今日只今より魂を入れ替へ、是迄の不忠を改め身を粉に碎き。（ト市郎右衛門に寄り。）喩へにもいふ、慈悲は上から、御家老様のお取計ひにて、此儀何卒穩便に。

**市郎**　若殿始めての御參勤、先づ御先乘りは小姓組、才次郎の役目は諸士の殿り。

**辰次**　サア、段々との御立腹は、御尤ではござりますれど。

**市郎**　御臺所を始めとして、諸侯方への御土產は先格の通り、ム、是もよし〳〵。

**辰次**　スリヤ、如何様に願ひましても。

**市郎**　初更と言うても今暫く、ハテ、心ぜきな事ではあるわえ。

**辰次**　イヤサ御家老、今一應御思案を。（ト いろ〳〵言つても市郎右衛門取り上げぬこなし。）ム、、コリヤ御家老には啞か聾か聞えぬふりか。モウよい、モウ賴まぬ、身に誤りがあればこそ言葉をつくして詫をするのだ、モウ賴まぬ、何爰ばかりに日は照らぬ。じたい刀劍の研磨、新刀古刀の日利に於ては凡そ日本に並びのない此辰次、何れの諸侯にても五百石や三百石はすぐにくれるわ、あやまればよい事にして武士に恥辱を與へたな、其上身共を不鍛練とぬかしたな、その不鍛練の手の内、受けて見よ。（ト辰次斬つてかゝるを、市郎右衛門押へ。）

**市郎**　コリや、動かるゝなら動いてみよ、此扇が刃物なら、汝が首はころりと落るぞ。

**辰次**　何を、其の廣言。（ト又斬りかゝる。此時敵役二人も斬つてかゝる。トド三人共、打ち据え。）

**市郎**　コリヤ、身動きなせば命がないぞ。（トきつとこなしあつて。）此度は助けてくれる、此座は叶はぬ立つて失せう。（ト刀を前にほうり出し。）ハテ不便千萬。ドレ、御前へ參らう。

ト呵になり、こなしあつて市郎右衛門奥へはひる、敵役の諸士二人は辰次を見て馬鹿々々しいと言ふ思入にて奥へはひる、辰次一人殘り奥を見て、只一討ちといふこなしにて花道へはひる。後合方にて奥より才次郎、刀を提げ出で來り。

才次　誠に有難き師の御恩、まだ部屋住みの某に、奥義の秘傳下されし故にこそ今日の幸ひ、夫につけても兄九市郎殿、此度の災難に主君の大事を身に引き受け、心の底は切腹と覺悟召されしいたはしさ、御命救ふ思案と言ふは。（ト行かうとして立ちどまり。）イヤ〳〵御閉門の御身の上、それにつけても大兄市郎右衛門樣の、深き御思案あつての事か、心ならざる事ぢやなう。

ト思案の思入、此時合方きつぱりと成り、奥女中みどり、島田わげ、着附淺黄無垢、忌中のなりにて出て來り、

みど　是は才次郎樣でござりまするか、妾はあなた樣にちと御願ひがござりまする。

才次　ヲヽ、誰かと思へば奥女中のみどり殿、御親父甚助殿の不慮の御最期、御愁傷の段察し入る。

みど　御推量なされて下さりませ、產みの母には三つで別れ杖とも思ふ父上に、夢見たやうな、本意ない別れ、悲しい事でござりまする。

才次　ムヽ、シテ身共に願ひとは。

みど　妾が願ひと申しまするは。

才次　その仔細は。

みど　サア、それは。

才次　何事でござるな。

みど　アノ、それは、（ト扇を出し、）是見て下さりませ。（ト才次郎、開き見て。）

才次　ムヽ、扇面の畫は八景の第一。

みど　唐崎の雨の景色。

才次　砂地に雨は。

みど　御判斷下さりませいなア。（ト合方になり。）今更申すも恥しながら過し月見の御遊の時、思ひ染めたる心の一心、思ひの程も情なや、水臭いすげない御返事、不束かな妾なれば御心には入るまいけれどせつない心を思ひやり、どうぞ叶へて下されませいなア。（ト取付くを振拂ひ、）

才次　アノ爰ないたづら者めが、父母の忌は三ケ年それさへ未だ滿たざる内、歎きを外にみだら千萬。

みど　其御叱りは無理ならねど、外に願ひがござりまして。

才次　ムヽ、助太刀がして貰ひたいか。

みど　サア。それは。

才次　何と、違ひはあるまいがの。

みど　サア、誠は敵が討ちたいと思うて見ても誰といふ、頼みに思ふ人もなし、戀と孝との二道を思

ひ込んだる妾の願ひ、力となつて父様の無念をお晴し下さりませいなア。

才次　ム、さこそあらん。義に依て頼まれたものなれ共、討つべき敵は國家の科人、夫故仇討は出來ぬ故、此戀は叶ふまい。

みど　それでは敵を目前に見ながら、討つ事は出來ませぬか、父上様への申譯、さうぢや。

ト自害しようとするに、才次郎是を留める。

才次　ヤレまてせくな、たとひ罪人なればとて、罪一等を輕くして、曾平太を出牢させる工夫もある。

みど　スリヤ曾平太の出牢あれば、助太刀なされて下さりまするか。

才次　義を見てせざるは勇なきなり。（ト扇を投げ。）開いて見よ。（トみどり見て。）

みど　ム、、此扇は矢走の歸帆。

才次　引きは返さぬ弓取の。

みど　つもる恨みも比良ケ根の。

才次　雪諸共に。

みど　打ち解けて。

才次　返事を三井の。

みど　兼ての約束。

才次　時の至るを一ツ松。

みど　かならず違うて下さんすな。（ト手を合せ拜む。）

才次　何の、拙者の心は石山。

みど　ヱ、嬉しうござんすわいなア。（ト取付く。）

才次　身共は兄九市郎殿の、御閉居へ參つて何かの相談。

みど　アレまア待つて、下さんせいなア。

才次　イヤさうしては。

ト振り切るはずみに鐺當り、みどりム、と倒れる。才次郎見て思入あつて、印籠を投出し、花道へはひる、是にて道具廻る。

本舞臺元の數寄屋へ戻る。月を出し花道へ菊の土手板を出し、花壇に蝶飛んでゐる。右二重の眞中に九市郎住ひ、蝶に目をつけて居る。能き所に遠州形の行燈を灯し、合方にて道具留る。

九市　ハテ心得ぬ、夜陰に蝶の飛び交ふは。それ兵を起す時は天理を考へ次に人の道を知る。扨は佞

人あつてお家を横領せんと窺ふものあると覺えたり、是を思へば寶の紛失姫君の御出國、ハテ心にかゝる事ぢやなア。（ト花道より才次郎、着附袴にてツカ〳〵と出で、花道にとまり。）

才次　兄九市郎殿閉居の居間、何卒お目にかゝりし上、此身の願ひお家の納り兄々への孝の道、思案の的は今宵の中。

ト懷中より一書を出して、傍の案山子の弓矢を取つて、一書をくゝりて射る。仕かけにて上手の柱へ立つ。九市郎、是を見て。

九市　羽ひゞきもせぬ、忍びの矢柄。（ト見て。）此一書は。

才次　イヤ、其矢の主は拙者でござる。（ト切戸をあけてはひる。）

九市　ヤア、其方は弟才次郎。

才次　閉居の御身故掟を守り心ならざる此疎遠、眞平御免下さりませ。

九市　何の〳〵、同じ骨肉の兄弟なれども、御身は剛勇にして短慮の氣質、某は又柔弱故、心合さる兄弟と思ふ故、左のみ不審にも思はぬわ。

才次　何は格別、今宵わざ〳〵參りしは、チトお願ひの儀があつて。

九市　ム、、改めて願ひとは。

才次　其仔細は是でござる。（ト傍にある矢柄を取つて差出す。）

九市　ム、傳へきく唐土には、他人同志深く交り兄弟の儀を結ぶ時は、矢柄を折つて誓ひを立てる。

才次　イヤ、其古事とは相違して兄弟の緣をまつこの通り。（ト矢を二つに折る。）今日今宵、兄でない、弟でないと言ふ御一言が承りたい。

九市　そりやまた何故。

才次　ハテ知れた事、科人の兄を持つては手前の迷惑、大兄市郎右衛門殿は役柄なれば格別の沙汰、此方目下なればこなたの身の成行で、如何なる祟りあらうも知れず、表向き役人中へ、此事屆けおきたれば他人の拙者、最早祟りは參らぬ筈、さつぱりと勘當なされて下さりませ。

九市　長幼序あるは聖人の敎へ、兄は弟を深く憐み弟は兄を敬ふが、人たるものゝ誠の道、木石にも劣りし其方、弟といふも穢はしい、望みの通り勘當ぢや。

才次　ソリヤ、その詞に相違はござらぬか。

九市　ハテ、犬猫に論は無益。

才次　如何樣。兄弟は他人の始りぢや。（ト花道へ行きかゝるを。）

九市　才次郎、待て。（ト是にて振り返り。）

才次　用がござるか。

九市　言ひ置く事はそればかりか、死してはものは言はれぬぞや。

才次　何と。（トギックリこなし。）

九市　兄が科を身に引受け、潔く腹切つて死ぬる覺悟、後の心を思ひやり心にもなき惡口雜言、よもや違ひはあるまいがな。（ト是にて才次郎、ッカ〳〵と戻り下に居て。）

才次　スリヤ、拙者が心底を。

九市　オ、サ、知らいでならうか骨肉同腹、事に望んで義を磨くは親人讓りの魂。（ト才次郎思入。）

才次　ヱ、恨めしい兄者人、主人の科を身に引受け一命投げ出しこなた一人が、忠義を立つて弟の拙者はなんとなりまする、こなた樣は御目鏡を以て他家を相續、今腹切つては、唐崎の苗字を失ふ、忠孝二つは武士の表、主君の御爲國の爲、それ故拙者が命を捨て、末世の記錄に忠臣の名を殘させて下さりませ、兄者人頼みまする。

九市　イヤ〳〵、一旦科を受けし身共、如何に弟なればとて罪を讓り存命なせば、武士の道は何處で立つ、その方は後に殘り兄市郎右衞門殿諸共に、實の在所詮議して犬死ならぬやうにして、死後の汚名を雪いでくりやれ。

才次　スリヤどうあつても拙者の望は、聞き入れては下さりませぬか。

九市　死ぬばかりが忠義にあらず、生きての忠義は尙大切、とつくりと合點いたせよ。

才次　是非に及ばぬ。（ト刀の柄に手をかける。）

九市　ヤレ待て弟、早まるな。

才次　それぢやと申して。

九市　イヤ、冥土の魁、此方も。（ト九市郎刀の柄に手をかける。）

才次　イヤ兄上、誤り給うな。

九市　イヽヤ　身共が。

才次　イヽヤ、拙者が。（ト双方互ひに爭ふ。此時市郎右衞門、ッカ〳〵と兩人の眞中へはひる。）

九市　兄弟共、物に狂ふか、うつけ者めが。（ト双方へ突放す。）

才次　ヤア、いつの間にやら兄者人。

九市　どうして、爰へは。

市郎　兩人共に死を爭ひ命を惜まぬ志は、見事武士の魂なれ共其後に實が出れば犬死同然、才次郎とても其如く九市郎になり替り、切腹なせば義理は立たうが主君へ對して第一不忠、何故存

命して諸共に、實の詮議はいたさぬぞ。

兩人　サア、それは。

市郎　生は難く死は易し、死ぬるは必ずとゞまれよ。

才次　オヽ、其詮議は刑部が屋敷。

市郎　イヽヤ、それとても樣々に間者を入れてさぐれ共、企みの洩れん事を恐れ、國を隔てし身寄りの者へ二品を送りしに相違なし、今彼等を荒立てなば毛を吹いて疵を求むる喩、うかつに手出しもなるまいわい。

九市　然らば、我等長らへて。

才次　主君へ忠義が立ちませうか。

市郎　サア、御發明にはましませど元來短慮な若殿樣、弟才次郎は若殿のお傍に附添ひ兄に替つて忠義を盡し、まつた九市郎は出國なされし姫君の御行衛香爐の詮議、某は後に殘り短刀をば詮議いたし兄弟仲よく長らへて、主君へ忠義を盡せし上、忠孝二道の譽れの二道、名も高松の家名の榮へ、かならず共に忘るゝな。

九市　ハア有難き御教訓、心魂に徹し有難く、必ず忘却仕りませぬ。

才次　我々は仰せに從ひ、若殿のお傍に附添ひきつと守護なし奉らん。

市郎　オヽ、遺は返答滿足いたす。さり乍ら事に望んで身を忘るゝは、珍らしいからぬ武門の習ひ。

九市　仰せの如く、生は死の元。

才次　逢ふは別れの始りと聞く。

市郎　是今生の、暇乞にもならうやら、九市郎。

九市　ハア。

市郎　才次郎。

才次　ハア。

市郎　よう顏見せてくれいやい。（ト三人顏を見合せ、愁ひのこなしあつて、氣を替へ。）ハヽヽヽ、大事の門途に涙は不吉。（ト懷中より守袋を出し。）コリヤ金比羅大權現の御守り、九市郎其方へ讓り置けば、大事にかけて出立いたせ。（ト又刀を出し。）此一腰は來國俊身共の秘藏、覺えの業物。

ト九市郎、刀を抜き見て。

九市　刀は武士の表道具、拙者の帶劍は小烏正守。

才次　又私のは備前國光。

市郎　我が一腰は重光へ譲り。

九市　拙者が刀は正春へ。

才次　さし詰め、拙者は兄者人へ。（ト取り替へ受取る事あって。）

市郎　斯う取り替せば兄弟三人。

九市　たとひ所は隔つとも。

才次　朝夕お傍に居る心。

兩人　兄者人。

市郎　無事の便りを待つて居るぞよ。（ト此時、時計鳴る。）

九市　アリヤモウ、初更。

才次　若殿の御立の刻限。

市郎　用意いたせ。

才次　ハア。（ト行かうとする。此時鮒助、窺ひ出で。）

鮒助　才次郎、覺悟。（ト斬ってかゝるに突き廻はして、取って押へ。）

才次　コリヤこれ下郎の鮒助。

市郎　かまはずと行け〳〵。

才次　ハア。（ト立廻はって、見事に投返し、花道へはひる、奥よりおらん出で。）

らん　九市郎樣。

九市　おらん殿。

らん　樣子は殘らず聞きました、思ひも寄らぬ今宵の旅立ち、迚も斯うなる上からは、お連れなされて下さりませ。

九市　なか〳〵以て左樣な事が、大事を前に抱へながら女を連れては足手まとひ。

らん　それぢやと申して。

九市　そちは後に殘り居て兄者人の御介抱、我れは是より直樣發足。（ト立ちかゝるを。）

鮒助　われをやつては。（トかゝるを突き廻し。）

九市　たとひ鐵石城に隱しあるとも、香爐を無事に取返し姫君の御供をして立ち歸らん。

市郎　オヽ、潔し〳〵、身共は是より曾平太を詰議いたし、短刀の在所も何れ今宵の中。

九市　然らば此まゝ。（ト鮒助を投る事あって。）おさらば。（ト行きかける。おらんとめる。）

市郎　早行け。

九市　ハア。（ト急ぎ花道へはひる。市郎右衛門、後を見送り。）

市郎　ハテ、いさましい。（ト又鮒助かゝるを刀を引ったくり斬りつけ。）若者ぢやなア。

トポンと返すを、道具替りの知らせ、おらんは市郎右衛門に取り附き、市郎右衛門は向ふを見込むよろしく合方にて廻る。

本舞臺一面黒幕、牢屋の塀、忍び返し附き。眞中に柳の立木仕掛あり。よき處に番所行燈、上手に文吾相引にかゝり居る。傍に牢屋の役人兩人、十手を持ち控へ居る。此見得、時の太鼓にて道具留る。

文吾　此度、大殿の御不例に就き若殿には御出府、鎌倉へ差し出す短刀の紛失、詮議の目當は安達甚助を手にかけし長濱曾平太と極りし故、此程より拷問にかくれ共、今に於て白狀いたさぬよし、御家老市郎右衛門樣の仰せを受けし此文吾、只今短刀の在所白狀させん、ソレ曾平太を此處へ。

兩人　ハア、畏つてござります。（ト兩人上手へはひり、縄付きの曾平太を引出し來る。）下におれ。

曾平　コリヤ〳〵、さう大きな聲をするなえ、俺が勝手に下に居るわ、どいつもこいつもまじまじとしたしやツつらだわえ。（ト曾平太こなしあり、文吾思入あって。）

文吾　コリヤ、曾平太、其方先達て安達甚助を手にかけ、松倉卿の短刀を盜み隱せしに相違あるまい、サア眞直に白狀いたしてしまへ。

曾平　イヤ、一向に存じませぬ、覺えはござりませぬ。

文吾　ムヽ、しぶとき一言、ソレ責にかけろ。

曾平　たとひ水火の拷問でも、白狀いたす氣は毛頭ござりませぬ。

文吾　ヤア、憎き一言、ソレ。

兩人　ハア、（ト立ちかゝるを、此時下手より奴提灯を持ち、後より市郎右衛門出る、）

文吾　是は〳〵御家老樣。

市郎　ヲヽ、文吾大儀〳〵。（ト入れ替り、上手へかけ）シテ〳〵、白狀いたせしか。

文吾　ハア、情けを以て、色々に詮議いたしますれど、今以て白狀はいたしませぬ。

市郎　ムヽ、さうあらう〳〵、此奴中々一應や再應にては申すまじ、今宵の吟味は某が直々にいたすであらう、其方達は此所を遠ざかつてよからう。

文吾　畏つてござります。

市郎　コリヤ文吾、其方は。（ト囁く。）

文吾　畏つてござります。（ト棒鞘の刀を市郎右衛門に渡し、皆々下手へはひる。）

市郎　コリヤ曾平太、其方が一命はお家の大事にかゝはる命、足輕風情がお家の寶に、目をかけるはあるまい、コリヤ外に頼み手があらう。サア、其頼み手は何者ぢや、白狀さへいたすれば訴人の褒美、一命を助け金子を與へ追ひ拂はうが、サア、盗み取りし短刀の隱し處を申上げい、どうぢや。（ト物和かに言ふ。曾平太こなしあつて。）

曾平　ム、待てよ、白狀さへすりや命を助けた上で褒美の金、コリヤ、味い風が吹いて來たわい。

市郎　只今言ひ聞かす通り、白狀なせばその身の仕合せ、又たつて白狀せずば是を見よ。ためさねばならぬ新身の刀、不便ながらも此場にて。

曾平　ム、如何にも味い話だが、マアよさう、短刀の在所何も彼も言はせておいてばつさり、イヤ、そんな甘口に乘るやうな、曾平太ぢやないわえ。

市郎　スリヤ、如何樣に申しても。

曾平　千度言つても同じ事だよ。

市郎　モシ又此場に於て助けなば。

曾平　命に替る寶はない、白狀せうかい。

市郎　スリヤ、しかと白狀いたすか。

曾平　ハテ、御念には及びませぬ。（ト市郎右衞門思入あつて棒鞘をぬき。）

市郎　エイ。（トいましめの繩を切る。）

曾平　これは。

市郎　サア、命は助けた、して短刀の在所と申すは。

曾平　ム、、命を助かる上からは、短刀はお渡しいたしませう。

ト曾平太上手へ行く。市郎右衞門提灯を持ち、目を附けて居る。此時後より辰次頬冠り尻からげ手鎗を持ち、柳の木を傳ひ、塀の上よりおりる。曾平太捨石を取り退け、下より短刀を出して。

曾平　則ち松倉卿の短刀、イザ御受取り下さいまし。

ト差し出す振りにて油斷を見すまし斬りつける。辰次、提灯の火を消す。市郎右衞門は曾平太の短刀を引ったくり引きすへる。此時辰次、市郎右衞門の太股の處を突く。市郎右衞門突かれ乍ら。

市郎　欺し討ちとは卑怯な奴め。

辰次　こま言ぬかさず、くたばつてしまへ。

ト鎗を捨て、刀にて斬ってかゝる。此中へ曾平太はひり短刀にて斬りつける、市郎右衞門深手を負ふ、三人よろしく立ち廻はつて、市郎右衞門斬り倒され、とどめをさす。

辰次　ヤレ〳〵、中々手強い奴だわえ。

曾平　大骨を折らしやアがつた。（ト短刀を出し。）是が則ち望みの短刀。

辰次　かたじけない。併し、そちも身共も、高飛びせずばなるまい。

曾平　そりや、あたりまへでござります。（ト両人行かうとする。此時番人両人出で。）

番人　曲者。（ト一人づゝかゝるを、ポンと返し。）

辰次　早く行きやれ。

曾平　合點だ。（ト花道へはひる。辰次柳の木へ登り、向うを見込む。此道具廻る。）

本舞臺平舞臺、一面牢屋の塀外の模様、番小屋、此眞中に才次郎、柳の枝の動くのを見てゐる。此傍に琵琶平龕燈提灯を持ち袖に隠くして窺うてゐる。此見得、合方にて、道具とまる。ト本釣鐘虫の聲にて、辰次以前のなりにて柳の木を傳ひ、塀を乗越へ、番所の屋根を足代にし飛び下り、身拵へして行きかゝるを、両人こなしあつて、才次郎、辰次の帶際を取つて引き戻す。琵琶平龕燈を差し出す。辰次たたきおとす。是にて三人きつと見得、辰次逃げようとするを、琵琶平向ふへ廻り立ちふさがる。辰次、才次郎に斬りつける。才次郎身をかはし立廻はつて、辰次すりぬけ花道へかかる。才次郎すかし見て

才次　曲者。（トすかす。）

辰次　エイ。

ト小柄を打つ才次郎程よく受け留める。琵琶平は下に居る。才次郎向ふを見込むを木の頭、辰次は走りはひる。後双方引張りよろしく。

ひやうし　幕

# 三幕目

阿雷明神前の場

信州十市渡しの場

**役名**　唐崎九市郎、同才次郎、守山辰次、田村外記左衞門、篠塚傳内、絹屋松之助、宿引き兵四郎、刑部家來寸平、もがりの竹、すりの辰、田村の娘おまき、娘おつる、浪人の藥賣り、茶店の女房お銀、旅僧、醫者、馬子、船頭田村の供等。

本舞臺平舞臺。向ふ淺黄幕、上の方石の鳥居、玉垣、松の立木。下の方、葭簀張りの出茶屋眞中に壹間半の床几を直し、藥賣り、浪人のこしらへ、深編笠、朱鞘の一本差し、藥箱の上に紙を並べ、

口上を言つてゐる、此傍に病人の腹ふくれ杖にすがり居る。旅僧、醫者、立つてゐる。巾着切りの辰、皆々の腰の廻りを窺居る。下手に絹屋松之助、半合羽、脚絆、壹本差しにて煙草を呑み床几にかゝり居る。茶店の女房、前垂れがけにて仕出しを呼んで居る。參詣の旅人行き迫ひ、此見得辻打ちにて幕あく。

女房　サア〳〵、どなたもお休みなすつてお出なさいまし。

藥賣　私が家の名法萬病療治膏と申すは、世間の醫者が見放したる難病でも、即座に治るといふ妙藥でござります。

松之　時にお銀さん、隣りの吾妻屋は皆達者でござるかの。

女房　ハイ、どなたも變る事はござりませぬ、さうしてあなたは東屋へお泊りかえ。

松之　いつも此宮の本では、向うが定宿でござるわいなう。

女房　左樣でござりまするかえ。

醫者　コレ〳〵藥屋さん、この萬病に利くといふ藥を私に賣つて下さい。

藥屋　サア〳〵、お購め下さい。

旅僧　イヤ、斯う見た處が其許は醫者の樣子、醫者が藥を買ふといふのは、どういふものでござりまするの。

醫者　ハア、問はれて誠に面目ないが、此頃始めた醫者故に藥の調合を存じませぬ故、萬病の藥にて、間に合はさうと思ひまして。

旅僧　それで、受け賣りと出かけたのか。

醫者　イヤ、面目次第もござりませぬ。

松之　イヤ、お銀さん、大きにお世話になりました。

女房　是から何處へお出なさいます。

松之　明神樣へ參詣をして、吾妻屋へ行つて泊ります。

女房　それでは、晩程又お目にかゝりませう。

松之　ドリヤ、參つて來ませうか。（ト神樂になり、松之助、鳥居の内へはひる、巾着切り後をつける。）

旅僧　愚僧も參詣いたさう。

醫者　そんなら、藥屋殿。

藥賣　有難うござりまする。（ト皆々鳥居の内へはひる。藥賣りと茶店の女房殘る。）

女房　モシ、藥賣りの銀藏さん、大分賣れましたねえ。

藥賣　イヤおかげで商ひがありました、ドレ　私は一寸呑んで參ります、店をお賴み申します。

女房　サア〳〵、行つておいでなさいまし。（ト葭簀の内へはひる。唄になりおつる振袖にて出る。）

兵四　モシ〳〵おつるさん、おつるさん。（ト宿引兵四郎、後より出で來り。）

つる　オヽ、誰れかと思へばこなたは兵四郎、こなたに用はありませぬわいなア。

兵四　おまへはなうても、私はあるのぢや、マア〳〵、向うへお出なされませ。（ト本舞臺へ來る。）

モシおつるさん、おまへはなア〳〵。（ト合方になり。）廿四孝の濡衣ではないが、そも内方へ奉公に來た其の日からお姿を見てツイ可愛らしいと思うたが因果の緣、其故此明神樣へ立願して、思ひ焦るゝ此兵四郎、少しはさつして下さりませいなア。

ト此時茶店の女房出る。

女房　モシ兵四郎さん、それでお前はすむかいなう、イヽエイナア、妾が斯うして稼ぐお金も、皆んなお前に入り上げて、今更おつるさんに見替へるとは、アノ憂な女喰ひめが。

兵四　ヱヽつべこべとやかましい、今大事の處ぢや、引き込んで居ろ。

女房　引き込んでゐろもないものだ、腹さんさん欺しておいて、妾や腹が立つて〳〵ならぬわいなア。（ト兵四郎の胸ぐらを取つて立廻る、おつる、鳥居の内へはひる、兵四郎見て。）

兵四　南無三、おつるさんを逃がしては。（ト行かうとするを。）

女房　お前をやつて、なるものかいなア。

ト兩人立廻り、兵四郎先に女房はひる。大拍子になり花道より、辰次菅流し、深編笠、浪人のこしらへにて出で來り

辰次　アヽ、殊の外なる宮居の繁昌、實に泰平の御代ぢやなア。

ト本舞臺へ來る。此時、下手より、下郎寸平、半纏股引、大小飛脚のこしらへにて三度笠を持ち出で來り、顏を見合せ。

辰次　コリヤ〳〵、其方は刑部樣の家來、寸平ならずや。

寸平　ムヽウ、さうおつしやるは、慥に。（ト笠の内を覗き。）ヤア、あなたは。

辰次　コリヤ〳〵、めつたに本名はいはぬ事ぢや。

寸平　イヤモウあなた樣のお行衛を、處々方々と尋ねました折柄、則ち主人刑部樣より、お尋の御書狀。（ト首にかけし狀箱を渡す。辰次、あたりに氣を兼ね讀み終り、腰より矢立を出し、返事を認める。）

辰次　遠路の所お使ひ大儀、委細の儀は認めあれば、よろしく御手渡し申してくりやれ。

寸平　ヘイ、畏りました。（ト狀箱を受取り。）眞平御免下さりませう。（ト寸平花道へはひる。）

辰次　アヽ、木にも萱にも恐るゝ此身、誠にびつくりいたしたわえ。（ト此時兵四郎出で。）

兵四　何處へ隱れたか、一向に知れぬわい。（トウロ〳〵捜してゐる。）

辰次　アヽコリヤ〳〵、兵四郎、兵四郎、（ト是にて、笠の内を覗き。）

兵四　ヲヽ、是は〳〵旦那樣、あなた樣には何御用あつて、此處へ。

辰次　イヤ、其方に用事あつて、近う〳〵。

兵四　ヘイ〳〵。（ト合方になり、腰をかけ。）

辰次　元來そちは身共を育てし乳母の伜、いはゞ譜代の家來も同然、ナリヤ、何事も打あけて、賴むは其方只一人。

兵四　ヘイ昨日御獄の宿で不思議にもおめにかゝりましたが、一家一門に見放され、此信州路迄さ迷ひ來て、今では吾妻屋の奉公人、お賴みにもなりますまいが、よい折柄でござりました。

辰次　それに就き密々の話と言ふは、國元より持參せし路銀も手薄に相なれば、此短刀を、賣入れなしてくりやれ。（ト短刀を出し。）是は兼て奪ひ取りし松倉卿の短刀、寶物なればよしなに賴む。

兵四　ヘイ〳〵、爰は田舍の事なれば、目の明いたものもござりませぬが、力いつぱい働きませう。

ト此時鳥居の中にて。

つる　お銀さん、妾や先きへ行きますわいなア。

兵四　ヤア、ありや、モウ歸りか。

辰次　たつた今刑部樣より、御内意の書狀到來。

兵四　エヽ、一寸待つて下さりませ。（トあわてゝ、鳥居の中へはひる。）

辰次　アヽコリヤ兵四郎、ハテ何をきよと〳〵、一向賴みにならぬ奴、こりやうつかり大事の品をあづけて近年の粗相と申すもの、何はしかれ宿迄歸り一思案いたして見よう。

ト靜かなる大拍子にて、花道にかゝらうとして、向うを見て、

ヤア〳〵あれへ參るは慥かに唐崎九市郎、彼奴に逢うては面倒だ。（ト又後へ立ち戻り。）緣日なれば、社内も定めし人込みならん、コリヤ、いかゞいたしたものであらう。（トいろ〳〵うろたへ、茶屋の見世を見て。）ムヽ、よし〳〵。

ト深編笠を冠り居る。此時大拍子にて、花道より九市郎四天割りかけ、菅笠を持つて出來り。

ト矢張り右の唄にて、本舞臺へ來ると、鳥居の中よりおつる出で。

九市　ムヽ、向うに見ゆるが當國の大社阿曾明神、ハテ賑かな宮居ぢやなア。

つる　お銀さんは、モウ行かれたかしらん。

九市　オヽ、幸ひの此茶店、是にて暫く休息のいたして參らう。